

直江曲輪
中條坂
千貫門

末ハ瀧_ミて落る、其瀧_ミ不動御立被成る、山中_ミくる_ミ有て、搦手の上_ミハ大_ミき成堤あり、其上_ミハ方_ミ直江屋敷_ミあり、則、直江曲輪と申也、搦手の坂_ミ此名_ミなる_ミぢや_ミと有、御門ハ千貫門と云、大手者辰巳向_ミきに登る、日本無_ミ双の御城也、

〔北越軍記〕

四下

日ノ

條ニ

ツ

ク

三月十三

日

晝ヨリ

謙信

卒中

風ヲ

被煩

著色

々醫

療

致候

ヘトモ

次第

ニ重

リ候

直江

山城

守兼

續本

庄越

前守

繁長

長尾

權四

郎景

路ヲ

始メ

老臣等景
勝ヲ擁シ
テ主トナ
ス

老臣共内談シテ、謙信御逝去有_ミ時、トカ_ミ他家へ被_ミ取_ミンヨ_ミリハ、甥ト云、同姓ト云、又子分ニ約束セラレタル事ナレバトテ、上田ノ喜平次景勝へ、上條民部少輔義春ヲ遣シ、内證ヲ云入、迎ニ遣ユへ、景勝潜ニ本丸へ入、上田者黒金上野介宮島參河守栗林肥前守ヲ、本丸ノ大手搦手門々ノ番ニ置、上杉三郎景虎ヲ本丸へ不寄付候、但、三郎モ景勝

景虎ヲ排
斥スル理
由

妹聲ニテ、然モ謙信養子ニ定候得共、上杉家ノ仇敵北條氏康ノ子ナルユへ、越後ノ侍共上下是ヲ主君トセン事ヲ不悦、家臣モ、上條民部モ、喜平次景勝ヲ謙信家督ニ立ント志テ、相聲ノ三郎ヲ忌申候ハ、三郎越後ノ家督トナラバ、小田原ノ氏政貪慾不義ノ人ニテ、頓テ越後ヲ北條領分ニセラレン事、目ノアタリナリトノ了簡ナリ、如此ナルユへ、景勝本丸へ入タル事ハ、三郎ハ不知、謙信ノ病氣窺ノ爲メ、本丸ニ附置タル山中兵部ヲモ、上條民部指圖ニテ、二ノ丸へ出ス、同月十三日ニ謙信逝去、略中五月三日ハ、

景虎上杉
憲政ト議
シテ家督
ヲ主張ス

五十日ノ忌明ニ付、三郎景虎ハ、隱居管領上杉憲政入道立山ト相議シ、謙信在世ノ中ヨリ家督約束ノ事ナレバ、早々本丸へ移リ候ハント被_ミ申候、上杉家臣共同心セヌモアリ、又、三郎ヲ家督ニト思族モアリ、是ヨリ衆議區々ニシテ、越後中モ、府内城モ騒立、景勝方ト三郎方ニツニ國中ワレテ、馬物具トヒシメク程ニ、早景勝ハ、本丸ニ謙信ノ

景勝方ヨ
リ開戦ス

紺地日ノ丸ノ大四半ノ旗ヲ立、二ノ丸ヲ見下シ、大鐵砲ヲ放懸ルニ付、三郎景虎、兼内室井道萬丸ト云八歳ノ子息引ツレ、前管領上杉憲政入道ノ御入候御館城へ心指、五月十三日ニ春日山二ノ丸ヲ落テ、上道一里半有之御館城へ取除被_ミ申候、是ヨリ憲政モ、上杉十郎憲景、北條丹後守長國、本庄美作守慶秀、手塚主水、長尾播磨守以下、倔強

景虎父子
御館ニ入
ル

ノ軍兵共一萬餘、皆、三郎方へ馳加、春日山本丸ハ、鉢峯ト云城ヲ引廻シ、大キナル池アリ、一方ニ愛宕山アリ、此山高シテ二ノ丸三ノ丸ヲ見下ス、此愛宕山ヲ取ント三郎方ヨリ心懸ヲ察テ、上條民部少輔義春、此山ニ砦ヲ構防守ル、三郎方ヨリハ、愛宕山ノ麓

愛宕山

坂戸城ニ番兵ヲ置、愛宕山ヲ取ントス、上條是ト日夜ノ合戦止事ナシ、都テ越後國中ノ鬭諍不斜、三郎ト景勝手切ニナリ候テ、既ニ合戦可始ト有之時、景勝母儀仙桃院ハ、上田ヨリ早々春日山城ニ來リ、一族家臣末々ノ侍共迄、春日山本城水門へ呼、簾ヲ高ク卷セ、直ニ對面シ被_ミ申候ハ、景勝ハ越前守殿子ト申ナカラ、謙信ノ猶子ナリ、先祖長

仙桃院景
勝ノ爲ニ
諸士ヲ勵
マス

天正六年五月十三日

天正六年五月十三日

四八八

尾左衛門尉景忠ヨリ、今謙信ニ至テ八代、年數二百十餘年、越後ノ執權トシテ、貴賤共ニ其因ミ不淺、誰カ舊功ヲ可忘乎、殊更先考(爲景)紋竹菴主、越中千壇野ニテ討死シ給ヒ、國中、大亂ニ及シテ、謙信十四歳ヨリ謀ヲ廻シ、十五歳ノ春ニ宿敵長尾平六ヲ打亡シ、ソレヨリ八ヶ年ノ間ニ、越後國中ノ凶賊ヲ打平、上下枕ヲ泰山ノ安ニ置事、皆謙信ノ恩ナリ、何レモ心ヲ一ツニシテ、味方ノ義戰ヲ佐ケ、中興ノ謀ヲ可運ナリ、カマヘテ比興ヲ振舞、貳心ヲ插、又ハ戰場ニテ推付ヲ敵ニ見セ候ハ、口惜事ナリ、イヅレモ頼入候間、謙信ノ遺跡ヲ景勝ニ知セ候ヘトテ、家老ヨリ末々ノ軍兵共迄、不殘盃ヲ擬被申候ヘバ、上下皆女儀ノ勇氣ニ被勵、感涙ヲ流シ、畏入候、忠功ヲ勵所更ニ不可疎ト一同ニ肯候、三郎方ヨリ小田原ヘ注進シ、加勢ヲ乞申候ヘ共、上野ト越後ノ間、大切所多候ユヘ、是ヲアヤフミ、人數ヲ出事延引ス、○下文ハ、六月十三日、北條ニツマク、

〔豆相記〕 天正六寅年三月九日、北越上杉謙信行年四十九卒、三郎景虎受家督、然謙信之出喜、平次景勝欲受於家督而戰爭矣、

〔北條五代記〕七 三、上杉景虎滅亡の事、聞シハ昔、越後乃上杉藤原輝虎入道謙信と、相模北條平氏康と戰ヒ、終に和睦乃儀おし、然、輝虎いふあるおもそく、や、氏康と一味乃心ざし有より、て、氏康の七男三郎殿を養子ト所望せり、輝虎實子おたぐゆへあり、是より、三郎殿十七歳にして、永祿十二年の春、越後へ越山、家老(康光)ハ、遠山左衛門尉山中民部をさしそへら、と、輝虎望ミと、ぬと、自他乃嘉幸ふ、めなら、其上甥乃長尾喜平次景勝妹を、三郎殿の妻と、し、上杉三郎景虎と改名し、家督をつぎ、春日山ト居給ひぬ、然、氏康ハ、元龜元年十月三日ト逝去、輝虎ハ、天正六年三月十三日頓死也、謙信居所ハ、春日山の本城、景虎ハ、二乃曲輪あり、景勝ハ、ふらびの曲輪に有し、野心をさし、と、越後の國をうむひとらんと、計策をめぐらそといへ共、景虎此くハ、とてを夢も、と、謙信第一の家老、北條(景廣)丹後守を、はじめ、諸侍景虎を尊敬より、其心付、油斷せる所、時日を移さ、景勝同十三日、人數引つ、本城へ、とし、門をうとめ、二の曲輪を、目の下ト見て、弓を射、け、鐵炮を、とし、は、景虎、と、うふといへ共、ふらへ、出城し、越後の府中、お館の城ト取こもる、○下略

景虎援ヲ小田原ニ請フ

氏秀謙信ノ養子トナル

景勝景虎ヲ銃撃ス

謙信ノ遺言ニツキテノ説
越後ノ侍

〔小田原記〕(脱字アリ) 天正六稔三月九日、越後此輝虎俄ハ煩付、四十九歳トて逝去也、辭世ト云く、四十九一夢、一朝榮花一盃酒、遺言トハ、分國を二ツト分て、惣領分ト、憲政公御隠居分を三郎景虎ト、其殘所を喜平次景勝トとの儀也、景勝ハ、輝虎此姉の子なれハ、甥也、旁惣領ト成へきト、輝虎、と、おとて、父爲景、離き給ふ故、國侍共、一門の長尾越前

天正六年五月十三日

四八九

長尾政景
ヲ擁立シ
輝虎諸國
ヲ行脚ス
トノ説

天正六年五月十三日

四九〇

謙信暗殺
セラルト
ノ説

遺領兩分
ノ遺言

守(政下同シ)義景を爲景の聲ふして、一跡を相繼しめ、輝虎をハ出家ふせんと儀ふて、同國の聖王上人之弟子よなし、猿丸殿と申て、上方へ登せをばふ、輝虎おさなくより、賢き人よて、諸國の武勇此様子、國々此名將の様子を聞習見習て、三年目ふ聖と同道し、國よ歸り、萬事利發にして唯者よ非しとて、頓而義景取立家督を渡し給ふ、されハ義景ハ姉聲ふろふいとこ也、其上(先祖)祖父長尾三河守存胤より此惣領家よて、諸事諸家中も是を用けはよ、輝虎其比ハ長尾六郎景虎とて、若輩よて有し共、幼少の事とも思出し、遺恨ふ存、其上義景國よあれハ、諸家中よてたもひ付事無念なりとて、信濃國池尻(野)と云河よて、近習の士よ申付、船のせんを抜、越前守義景を水よ入て殺し給ふ、甚無慙なる、されハ其子兄弟あり、一人ハ女子、一人ハ今此景勝なり、二人なから輝虎養子にして、姉をハ越中(能登)神保の子越後へ證人み來りしみ合せ、是よ上杉を給、上杉(政繁)上條と號し、弟ハ長尾喜平次景勝と名付、養子ふとあれ共、彼も父の子なきハ、輝虎ふ父を被殺し恨と有へしと、内々思されし、小田原より三郎殿を申請、惣領よ立置、上杉三郎景虎と申、諸家中よて悉く一跡ハ此人なほへしと存せは處ふ、○下柏崎物語(天正六)三月十一日此夜謙信厠よて卒せ、中風、床の下よ忍の者有て、肛門をく(氣脱カ)りぬきおると也、表向る卒中風なを翌日八ッ時よて無生、其跡ち正氣よなき、喜平

治景勝を呼遺言を、景勝、景虎兩人ハ國を半分は、可取とふ、十三日、謙信死去、九歳、長尾三郎景虎を、北條をり養子ふ被貫候仁ふり、謙信死去此時、欠遁は、時よ景勝門戎あめて不入、其跡ち打殺し、景勝壹人よて國をとほ、和田喜兵衛前橋の手引を可致といひて、其手段破を、漸々遁れ歸る道みゆひ、其段を申、謙信立腹、左様よ破る、やうな手立をして、爰までおひく事不届と言て、切殺たる、其子恨を含み、厠へ忍入、肛門をくくり殺せ、

色部長眞ノ家臣等、景虎ニ應ゼントシ、本庄繁長コレヲ鎮撫ス、是日、景勝、越後黒瀧城將村山慶綱ニ命ジテ、下越ノ情勢ヲ報ゼシム、

〔歴代古案〕〇羽前

細々書中令披見候、仍而、今度色部家中(造意)ざうい候處ニ、本庄入念被相靜之由、尤簡要候、押詰本庄へ書中ヲ差越、其方如意見入魂可申候、扱又、其元堺目無事之段、是又簡心候、如何様用所共候間、委重而可申越候、其元所々之様體子細重而可被申越候、謹言、猶々、自本庄之書中、何も披見候、以上、

(天正六)五月十三日

景勝

村山善左衛門尉殿

天正六年五月十三日

四九一

十四日、乙景勝、戦捷ヲ、愛宕飯綱二神ニ祈ル、

〔古文書集〕○羽前石丸當素氏所藏

願文

一今度某思立處、於其時ニも、無二入魂申者ハ申ニおよそ、無二無三無別條扱々餘人た、いし、内色を不立、押詰手下ニ相成候ハ、彼一儀存分之まゝ、可有之候者也、仍如件、

(天正六)五月十四日

藤原景勝(花押)

十六日、丁景勝ノ兵、景虎ヲ御館ニ攻ム、東條佐渡守、景虎ニ應ジテ、春日山城下ノ市街ヲ火キ、鮫尾城將堀江宗親、信濃飯山城將桃井義孝等モ亦景虎ニ屬ス、

〔景勝一代略記〕

○上文ハ、十三日、五月十六日早天に、東條佐渡守逆心仕、春日町に火

外様衆景虎ニ屬ス

をかけ、御城の麓より、家數三千間計焼拂、我館に居ふから敵に成也、其日同時、(鮫尾)堀江玄蕃、一千餘の勢にて御館へ味方に參する、又、信州館山の城主、桃井伊豆守、本田岩見守、其外々様衆、是も同日二千許にて御館へ著陣する、○下文ハ、十七日

本田石見守景虎ニ屬ス

三條町奉行

〔越後古實聞書〕

五月十六日に、手遠の者共馳來て御館へ味方に付、先、東條佐渡守、辰之刻に、春日山之町に亂入て、三千間の家を放火して御館に入、鮫尾の城代堀江玄蕃、千餘の人數にて御館へ入る、信州飯山城代桃井伊豆守、(義孝)此日大勢にて御館へ入る、是を聞、本田石見守大將にて小身の者共二千餘御館へ入る、同日都合六千餘御館へ御味方に入、○下文ハ、十七日、條ニツミク、

〔上杉年譜〕

二十五月十五日、三條町奉行東條佐渡守、春日山ノ町屋ヲ放火シ、御館

ニ入ル、鮫尾城主堀江駿河守、手勢數百騎ヲ率シ、館ニ楯籠ル、本田石見守ヲ始メ、小給ノ兵士、五騎十騎馳來リ、敵兵數千騎ニ及フ、味方ノ諸士モ相議シ、近日合戦ニ及ント評ス、(景勝)公ヲ始メ奉リ、軍議ヲ決シ、所々ノ諸壘ヲ守ル、將士ニ使介ヲ馳テ此軍議ヲ告シラス、

景勝ノ部將登坂廣重等、景虎ノ兵ヲ荒川館ニ攻撃ス、

〔竹田久太郎氏所藏文書〕○羽前

御奉公御尋ニ付、書付を以申上候事

一親事、越後之内上田山中淺貝之城ニ被指置、同心數多被仰付、身上先立御奉公申上候事、

淺貝

天正六年五月十六日

天正六年五月十六日

四九四

廣居出雲

一天正六年、拙者儀茂、御錯亂春日山ニ在詰、御奉公申上候事、

一荒河館ニ而、五月十六日高名仕候事、是ハ廣居出雲方初而、何茂傍輩中被存候事、略

慶長四年三月十七日

登坂角内判(廣重)

杉原常陸殿(親意)

御披露

〔歴代古案〕六羽前

今度、於荒川館相稼之段、神妙候、彌、可抽粉骨事専用候也、

荒川館戰功ノ諸士ヲ褒ス

天正六

五月廿二日

景勝

片桐内匠助

片桐内匠助殿

今度、於荒川館相稼之段、神妙候、彌、可勵軍功事肝要也、

豊野藤左衛門

天正六

五月廿二日

景勝

豊野藤左衛門

豊野藤左衛門殿

〔志賀楨太郎氏所藏文書〕前〇羽

乍毎度今度於荒川館相稼之段、神妙感入候、此度之儀候間、猶以勵忠功、可令勸賞者也、

天正六

五月廿三日

景勝(花押)

廣居忠家

廣居善右衛門殿(忠家)

十七日、辰景勝、景虎ノ、春日山城ヲ攻ムルヲ擊退ス、尋デ、戰功ノ諸士ヲ賞ス、

〔景勝一代略記〕ノ上ニハ、十六日、翌日、人数五六千にて、御城ニ向、兩日働、御城堤際迄取詰處、城中隨一の人々、堤表へ打出、爰專度、我さきにと戰ける、御館の者共引去り

桃井義孝戰死ス

そく、敵數百人討取、飯山の城主桃井伊豆(義孝)ふか手負引けるか、其日暮に死也、寄手散々ニ討負、其後廿日斗互働なし、

〔越後古實聞書〕ノ上ニハ、十六日、翌十七日に、右之人數にて、御城攻寄、搦手のなかて

初度ノ戰

うを責めて登ける、千貫門を開かざして人出されハ、氣おふて責登る、七里の坂を登らせ、やせめ、門を開き、穂先き揃ふて突出たり、敵は下手成、味方はかさにて有ば、一トとも合ず、ちりハになり、或は谷へ落るも有り、残り少なに討取館の城代桃井伊豆守深手負、其日御館方散々に敗北也、手合始めに勝利を得られ、其後御館方寄せざりたり、

天正六年五月十七日

四九五

天正六年五月十七日

四九六

〔上杉年譜〕二十

五月十七日、桃井伊豆守ヲ武將トシ、多兵ヲ率シ、春日山へ攻寄ル、味方ニハ兼テ防戦ノ軍議定メシ事ナレハ、城中人ナキカ如クシテ鎮リ至ル、敵兵ハ我先ニト攻上ル處ヲ、思フ圖ニテヒキ寄テ、大手ノ千貫門ヲヒラキ、諸兵急ニ突イテ戦フ、敵兵辟易シテ退ントスレトモ、山城ノ事ナレハ、進退自由ナラサレハ、先勢ハ崩レ立テ敗北シ、岩谷ニ轉ヒ落テ亡命スル者數ヲ知ス、敵將桃井伊豆守討死ス、味方ニハ軍ノ事ハシメニ勝利ヲ得玉ヒ、公ヲ始メ奉リ、諸臣各勇ミヨロコフ、

〔歷代古案〕二

○羽前

今度、不慮之忿劇ニ付、而、何茂致退散候處、吾分事者堪忍就中無嫌、晝夜走廻事、誠以忠信無比類候、依之藪神之内、大石村充行候、知行不可有相違候、仍如件、

藪神ノ内
大石村

天正六年丙丑ノ千支ハ後人、誤記ナラン、

五月廿二日

景勝

大石兵部丞殿

大石兵部丞

〔歷代古案〕五

○羽前

今度、爰元忿劇、悉令闕落之處、遂籠城走廻之段、神妙候、本意之上望之通可申付者也、

天正六

五月廿三日

景勝

岡田重左衛門

〔上杉年譜〕二十

今度、忽劇之處、令缺落之處、遂籠城走廻之段、神妙候、本意之上、一騎一挺之通、可申付候也、

一騎一挺

天正六年

五月廿二日

景勝

林 加兵衛殿

林加兵衛

今度、不慮之錯亂於度々相稼之段、神妙候、靜謐之上、一所可感之候、謹言、

天正六年

五月廿二日

景勝

嶋津喜七郎殿

嶋津喜七郎

〔歷代古案〕五

○羽前

今度、於愛宕相稼之段、神妙候、彌可抽粉骨者也、

愛宕ノ戦

天正六年五月十七日

四九七

天正六年五月二十一日

四九八

天正六

五月廿三日

景勝

平岡神七郎

平岡神七郎殿

〔上杉年譜〕二十

今度念劇之處、於度々相稼之事、粉骨神妙候、何様本意之上、可引立候、謹言、

五月廿四日

景勝

若林九郎左衛門

若林九郎左衛門殿

二十一日、申、壬景虎ノ黨、上野ヨリ越後ニ侵入セントス、景勝ノ兵、コレヲ猿ヶ京ニ邀撃ス、是日、景勝、越後坂戸城將深澤利重ヲシテ、コレニ應援セシメ、尋テ、富里三郎左衛門尉ニ命ジ、利重ト共ニ、地下人ヲ召集シテ防禦セシム、

〔伊佐早文書〕

○羽前伊佐早謙氏所藏

如注進者、猿ヶ京へ働、凶徒追散之由、目出ニ候、扱亦、自其元如何とも人数半途へ迄も申合首尾候條差越度候、從爰元人数可差越由申越候へ共、一向爰元ニも所々へ差遣、無人ニ候間、成之間敷候、其元談合候て、先以少も人数差越尤ニ候、扱亦、以前より度々如申越、兩口之儀者、不及申ニ、其地之事も無油斷用心普請可申付候、少も如在候てハ

景勝兵少クシテ援フ能ハズ

口惜候、自其元も、兩口へ細々人お差越意見候て、武(物)毎油斷無之様ニ、入念(肝)簡要候、委細重而可申越候間、早々申越候、猶萬吉重而謹言、

五月廿一日

景勝(花押)

深澤刑部少輔殿

〔上杉年譜〕二十

重而飛脚差越候、具書中見届候、然者從猿ヶ京、早々加勢可差越由申越候哉如何、其許之儀定而無人數而可有之候得共、先々首尾好候間、先少度半途江人数差遣尤候、左様候者、重而模様具可申越候、自猿ヶ京之書中差遣候、紙面之分者、取詰由申候歟、事實候哉、又候、聊爾手遣無用候、雖無申迄候、物毎無油斷心得專用候、猶萬吉重而可申候、謹言、

五月廿四日

景勝

深澤刑部少輔殿

〔歷代古案〕六

○羽前

急度申越候、其元敵動候由堅聞届候間、其元之地下人成共相集、(防)せん可成候由申、深澤うへも申越候間、此度之條其方事も、無如在、雖無申迄候、談合候て、其擬候而、走廻肝要候、如何候而も相稼人数相集可走廻事肝心候、爲其書中差越候、謹言、

天正六年五月二十一日

四九九

猿ヶ京ヨリ援兵ヲ請フ

猿ヶ京ノ情況ヲ利重ニ問フ

天正六年五月二十一日

(天正六)

五月廿四日

景勝

五〇〇

〔参考〕

〔管窺武鑑〕

卷一

附 上野にては、厩橋城主北條安藝父子、或は應期尾奈淵膳の九郎

三郎利忠、山神道井館林の長尾新五郎、白井の長尾景義、新田金山城主繩城主、或は沼

田の上野中務大輔、上河田下河田久屋棚下佃中山尻高名胡桃、深澤猿ヶ京新城岩櫃

森下新卷、小川の下乗齋、西上野にては、板鼻殿宗舎の長尾殿、彼是大方三郎殿方の衆

多し、又景勝方を仕る衆も之あり、中間取合なり、上野先方の士大將深澤刑部は、無二

に景勝方を存じ詰むるなり、其様子景勝公の御狀を以て之を考ふるに、

如註進者、猿ヶ京へ自倉内相働之由申候哉、因茲雖無申迄候、兩口之備肝要候、扱又

半途迄も人数自其庄出し可然候哉、何も談合にて左様に候はゞ、半途迄人数差越

尤候定而敵爲差儀有之間敷とさうりやう候、重而堺目模様具可申越候、扱承届分

者、其地一向普請不申付候よし、萬々油斷口惜候、晝夜無油斷ふしん等可申付事專

用に候、堺へ目付差越様體聞届註進簡心に候、猶吉事待入候、謹言、

天正六年

五月十八日

深澤刑部少輔殿

景勝御判

一、此深澤刑部少輔定政は、深澤城主故、上野表の様子越後へ註進仕る、二、猿ヶ京には、

尻高左馬助楯籠る、是も景勝方を存ずるなり、其外小川の可乘齋、尾奈淵の沼田平八

郎殿を始め、斯くの如き衆あり、○中後には、猿ヶ京を始、小川も尾奈淵も残らず落城、

或は降参して、景勝方の城は上野中に深澤一城なり、○中深澤一城にて、運を開く事

なり難しと見切り、刑部少輔、城を拂つて人数を率ゐ、厩橋へ取懸つて、北城に一鹽つ

けて越後へ参るなり、

〔上杉家記〕 北條輔廣、其子景廣初メ高廣沼田城將河田伯耆守等、悉ク景虎ニ屬シ、猿ヶ

京ヲ襲フ、深澤等之ヲ破リ、景勝ニ報ジ、且ツ援ヲ請フ、時ニ直峯城新ニ景虎ニ屬シ、上

田ノ要路ヲ杜絶シ、兵ヲ出ス能ハズ、深澤文書、河田文書、

二十三日、西景勝、越後妻有ノ將小森澤政秀、金子次郎右衛門ヲシテ、信濃市川ヨ

リ、敵ノ侵入スルヲ防ガシメ、尋デ、又、吉田源左衛門尉ヲシテ、地下人ヲ召集シ、

上田・妻有ヲ警備セシメ、妻有美作島ノ地ヲ源左衛門尉ニ宛行フ、

〔小森澤文書〕京東

天正六年五月二十三日

五〇一

直峯城景

虎ニ屬シ

援路ヲ絶

ツ

尻高左馬

助猿ヶ京

ニ楯籠ル

景勝ニ屬シ

援路ヲ絶

ツ

天正六年五月二十三日

五〇二

〔今〕
□度之様子申越、得其意候、爰元之儀無心元□□由備等如何にも堅固ニ申付之條、
□□□□金子談合、□□□□堅可有之儀肝要候、自然自市川表敵於相動者、堅固相
抱防戰之儀尤候、□□可爲無人之由、令校□□_(量候間カ)廳、而人數可申付候、可心安候、返々爰
元之儀心安存、其地堅固之備專用候、謹言、

〔天正六〕
五月廿三日

景勝(花押)

小森澤刑部大輔殿

〔吉田源左衛門カ〕

□源右衛門尉指越候間、其刻も申□□其以來、爰元備彌々堅固ニ□□田中

澤十内差遣候、彼者如□□動等成之候共、留守中□□付候由斷候てハ不可有

曲候、調儀□□首尾成就候様ニ、工夫簡心候、猶□□謹言、

六月七日

景勝(花押)

小森澤刑部少輔殿

金子次郎右衛門殿

〔上杉年譜〕二十

上田妻有

今度、爰許不慮之儀出來、就之當城之事、手堅候、心安可存候、從何上田妻有之儀無心元

方面ノ警備

源左衛門

ノ子ヲ妻

有ニ置ク

候、各談合此度之儀候、地下人等相集、一途走廻尤候、取分子共差置候、此上之儀、彌、其元
相稼忠信肝要候、爰許靜謐之上、急度可感之候、謹言、

五月廿四日

景勝

吉田源左衛門殿
(尉脱下同ジ)

美作島内
二千匹ノ
地

今度其元走廻付而、妻有美作島之内、二千匹之地、出置候、彌、可爲忠信事肝要候、謹言、

天正六年

五月廿四日

景勝

吉田源左衛門殿

〔北越軍記〕

四下

略〇上三郎ハ、小田原へ數度飛脚ヲ遣ハシ、此方每度勝利ヲ得申候間、

御加勢ヲ給リ候へ、早ク景勝ヲ退治シ、越後ヲ討平候ハント申遣ニ付、氏政ヨリ、遠山

丹波守富永三郎左衛門中條出羽介恒岡美作守大田大膳北條治部都合一萬八千餘、

小田原ヲ立、妹婿武田勝頼へモ被申合候ユへ、勝頼モ一萬餘、川中島通越後ノ老津迄

出馬ニテ、小田原勢ノ著陣ノ一左右ヲ聞テ、春日山城へ可取懸ト待被申候、_{○中略、勝頼、景勝ト}

和睦ノコト、小田原加勢ノ北條衆モ、申カ京迄推來候へ、_(武田)勝頼別心ニテ、景勝一味ト

天正六年五月二十三日

五〇三

武田北條
兩氏ノ加
勢

北條勢猿
ヶ京ヨリ
引返ス

天正六年五月二十八日

五〇四

聞キ、越後へ入事不叶、猿ヶ京ヨリ小田原へ引返、三郎方力ヲ落候へ、本庄美作子清(秀綱)七郎、北條丹後、其外倔強ノ兵共荷擔一味致候ユへ、少モ不接、合戦日夜ノ勝負ニテ候、略〇下

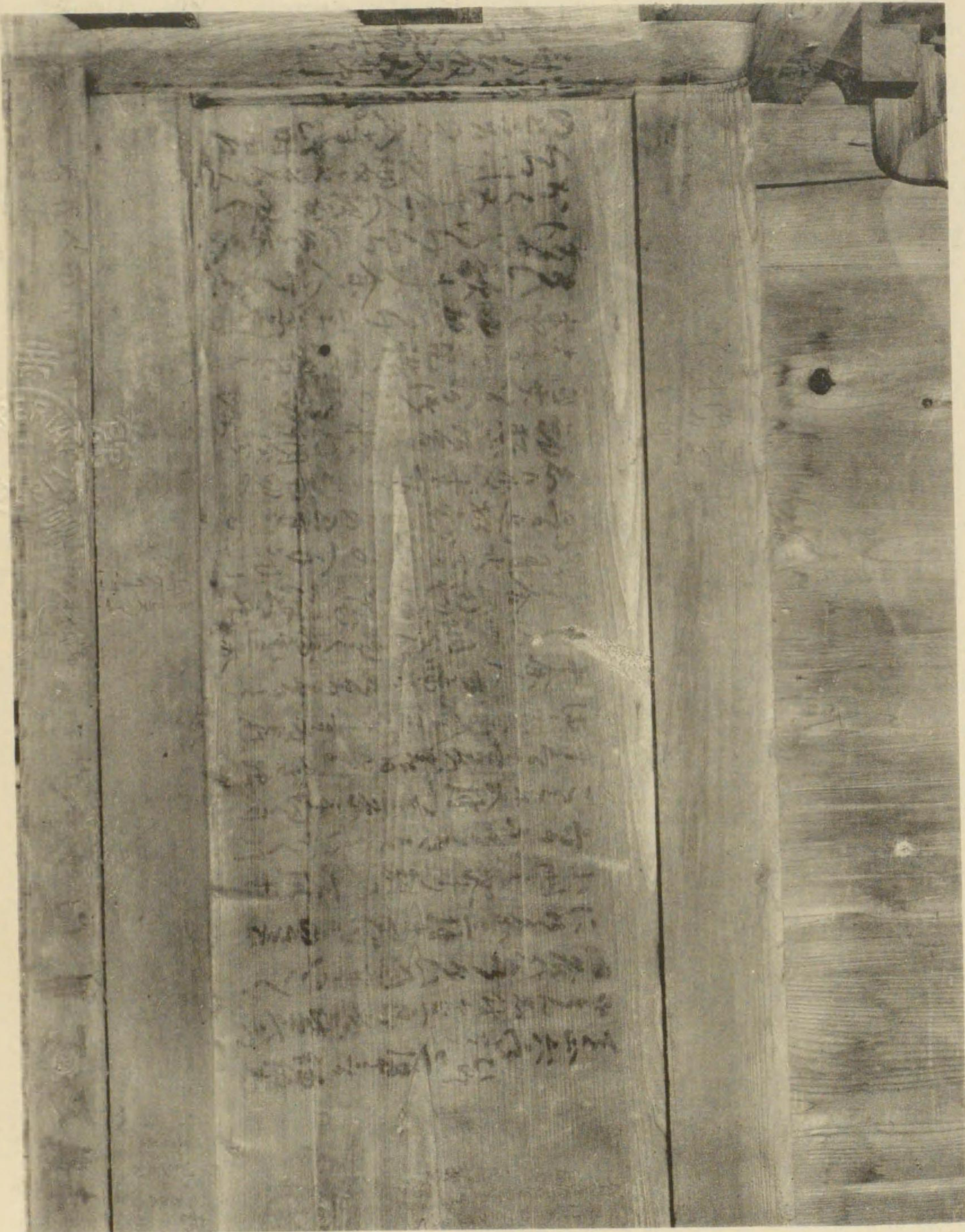
○景勝、小森澤政秀ニ命ジテ、妻有ヲ固守セシムルコト、六月二十三日ノ條ニ見ユ、二十八日(己卯)、蘆名盛氏ノ將小田切治部少輔・小澤大藏、景虎ニ應ジ、越後枋尾城將本庄秀綱・三條城將神餘親綱ト謀ヲ合セテ、菅名ヲ侵シ、是日、雷城ヲ攻メテ敗レ、盛氏、治部少輔等ノ敗戦ヲ責ム、尋デ、ソノ敗殘ノ者、平等寺ニ逃ル、

〔平等寺藥師堂内題書〕〇越後

平等寺藥師堂内ノ題書
黒川衆小國ヨリ亂入
ふてうき
三本寺孝
孝景虎ニ
屬ス
菅名手切
大雨
いかつち

天正六年(戊ノ誤)三月十三日、謙信さま御とんまニ付而、三郎殿(景勝)喜平次殿御名代あらそひ、國中いこく候條、三月末、黒川とのき衆、小國之地より亂入、四月十六日(不調儀)うさニ而さいなく、引こゑ候、五月一日、三條手切候、同十三日、三郎殿春日を引のき、御城之内へ御入候、三不(三本寺孝長)う寺殿を始十余人御味方候間、春日と日々の御調儀候、就(本庄秀綱)神餘親綱尾三條申合、小田切治部少輔・小澤大藏、五月廿四日(中蒲原郡菅名)そらのへ手切、同五日、迄相勸(勸下同ジ)すらの過半村おま候處ニ、廿六日より大雨ゆへ、勸相延候間、足輕爲調儀與、同廿八日(中蒲原郡雷)の地の地へ勸當城をうりに取詰候處ニ、所々より悉令助懸、ゆけくちゑおしそひ、敵

越後岩谷平等寺



平等寺藥師堂内題書(其一)



平等寺藥師堂内題書(其二)

越後岩谷平等寺



敗戦
名家ノ不
興ヲ得テ
寺ニ入ル
同道の人
名

も卅餘人打取候得共、のけくちに候条(敗北)いなく、五十餘人越度候、就之(蘆名盛氏)くろ川より不
調儀之由、御せりうんの上、爰元(東蒲原郡岩谷平等寺)ニ入寺候、此時同道、

小荒井清左衛門尉
齋藤又五郎
なふと彦七郎
荒神守新藏人

六年六月四日

討死人名

うち死

小田切	左近	同	玄蕃	允	同	小	七郎
爪生三郎	衛門尉	高	久	小	一	郎	長谷川宮内
同	<small>(織部)</small> お	坂	内	清	右	衛門尉	長谷川六郎右衛門尉
同	甚	左	衛門尉	大	槻	清	兵衛 <small>(衛)</small>
清田	與	五	衛門尉	山	内	彦	七郎
<small>(廣)</small> ひ	ろ	瀬	彦	八	郎	賀	藤縫殿允
豊島	彌	一	郎	石	川	藤	左衛門尉
							此外廿餘人

天正六年五月二十八日

天正六年五月二十八日

五〇六

○藥師堂再興勸進ノコト、永正十四年六月是月ノ條ニ、蘆名氏ノ兵、小國ヨリ越後ニ亂入スルコト、四月十六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔越後野志〕

十六 古城跡 雷城

雷城
村田大隅
守坂崎與惣
丸田周防
守

紙谷莊河内谷水戸野村山中ニ在テ、堅固ノ城地也、山中八分ニ水アリ、城主村田大隅守坂崎與惣丸田周防守等居住ス、丸田周防守遠祖ハ、筑後ノ産ニテ、竹地源太□基ト云、源賴義ニ仕ヘ、其後裔後藤兵衛尉吉道、平治ノ亂ニ源義朝ニ仕ヘ、軍破レ、義朝東國ニ奔ル日、從臣三十四人ノ其一人也、吉道カ後裔、文明中、本州安田ニ來テ居住スルヲ數世、一族長尾筑前守高景ノ妹聳トナル者アリ、

菅名城

菅名重國
菅名孫四郎

菅名莊菅名嶽ノ山足、(中蒲原郡)菅出村山中ニ在、城主永正中菅名但馬守重國、後ニ菅名孫四郎、村中菅名山洞照禪院ニ、城主菅名氏數世ノ牌アリ、米澤侯上杉家ノ菅名太冲ハ此後裔ニテ、二百石ヲ領、又長尾俊景、天文十一年、座王堂式部少輔利景ヲ此城ニ居守セシム、然ルニ天文十八年五月、新發田尾張守長敦此城ヲ攻拔、天正中、舛坂刑部丞城主トナル、

座王堂利景
舛坂刑部丞

二十九日、辰武田勝頼、北條氏政ノ請ニ依リ、景虎ヲ援ケテ、兵ヲ信、越國境ニ出ス、是日、景虎、コレヲ蘆名盛氏ニ報ジテ、援ヲ請フ、

〔歷代古案〕

三 羽前

甲府無二申合
武田左馬助將トシテ信越ノ堺ヲ侵ス

就謙信遠行之儀、預使僧忝候、仍、先段如申入候、(景勝)少弼無曲擬故、去十三、當館江相移備堅固候、春日山之儀、押詰不爲開外張候、爰許樣體可御心易候、殊更甲府無二申合候之條、武田左馬助(信豐)方爲物主人數信堺迄被立置候、就貴國之儀、從前前互ニ深申談候意趣者、相府被仰合筋目者、於向後者、彌入魂可申覺悟候、御同意ニ付而者、可爲本望候、此時候間、一途御取持候者、自他之覺不過之候、尙、彼使僧口上申合候條、不能細筆候、恐々謹言、
(天正六)五月廿九日 景虎

蘆名修理大夫殿

〔越後治亂記〕

中

七、武田勝頼助勢之事

小田原の北條氏政ハ、三郎殿の兄也、武田勝頼ハ姉聳也、依之相弼カ甲弼ヘ使者有之、其意趣ハ、越後の一亂に付て加勢を指向候間、御直馬を出され、御下知を被添、三郎殿本意の様に御助勢可給との儀也、使者兩度及けれハ、さらハ打立んとて、勝頼三萬餘人を引率し、六月十六日、越後國大出雲原(中頸城郡小出雲)にて陣を張給ふ、御城との其間五里也、

勝頼小出雲原ニ出陣ス

天正六年五月二十九日

五〇七

〔甲陽軍鑑〕二十 三郎殿、既に景勝に負給ふにより、小田原北條氏政より、甲州勝頼公へ御使あり、早々三郎殿をすけ、景勝を退治被成候へと、此方小田原よりハ、江戸の遠山に富長、中條常岡、太田大膳兼高北條治部、都合人数一萬五千、三郎をすけ、景勝退治に差越候との、御一左右を聞召、二萬の人数をもよほし、越後の内（小田雲）（老津）おいづまて喜平次退治に御馬を出さるゝ、子細は、勝頼公、氏政の御妹聲に候、三郎殿御ためには、あねむこにてまします故如件、（日ノ下）文ハ、六月七、

〔上杉年譜〕二十

五月中旬ヨリ、甲州武田四郎勝頼ハ、相州小田原城主北條左京大夫氏政ト牒シ合セ、數軍士ヲ卒シ、越後頸城郡大出雲原ト云處ニ出張シ、景虎カ後援スルノ由聞ヘケレトモ、小田原勢ハ未タ出陣ナキニヨリ、勝頼モ疑ヒヲナス、抑、北條氏政ハ、父氏康トハ天資甚替リテ、親族ノ好ミヲ忘レ、貪慾フカキ大將ナレハ、表ハ勝頼ト示シ合セ、景勝ト戦ヒヲ結ント相見ヘ、心底ハ後切セントノ謀計ナルヘシ、勝頼モ、流石ニ軍事ヲ止ンモ世ノ嘲リヲ思ハレケルカ、先ツ約ニ任テ出陣ト聞エシ、往年不識院殿御在世ノ時、氏康ト和睦有テ、景虎ヲ越後ヘ招キ、縁者ノ契約アリシニ、氏康死後ニ及ンテ、氏政約ヲ變シ、謀計舉テ量ルヘカラス、故ニ謙信公常ニ諸將ニ對シ、氏政ハ盟約ヲ結フヘキ武將ニアラスト宣フニ付、此度ノ出勢モ如何カ有ント、老將ノ

勝頼氏政ノ心事ヲ疑フ

輩ハ評議止ム事ナシ、

六月大朔

七日、亥景勝、使ヲ武田勝頼ニ遣シテ和ヲ求ム、武田信豊、高坂昌信、斡旋シ、勝頼諾ス、是日、跡部勝資、コレヲ中條景泰等ニ答報ス、

〔杉原謙氏所藏文書〕

不存寄候之處、再三珍翰快然候、内々疾雖可及、御報候、勝頼當口出馬取亂故遅々、非存疎意候、御使者口説之趣、典（武田信豊）厩具披露被御回答候、委細被遂御勘辨、可被觸、景勝御賢聞事、專要候、恐々謹言、

跡部大炊助

勝資○武田勝頼家臣

六月七日（天正六）

- 中條（景泰）次殿
- 竹俣（慶綱）三河守殿
- 五十公野（宗信）右衛門殿
- 吉江（信景）喜四郎殿
- 色部（長實）惣七郎殿

天正六年六月七日

武田信豊景勝ノ請求ヲ勝頼ニ披露ス

水原滿家
齋藤朝信
毛利顯元
加地春綱
新發田長
上條政繁

水原(滿家)彌四郎殿
齋藤(朝信)下野守殿
毛利(顯元)惣八郎殿
加地(春綱)安藝守殿
新發田(長敦)尾張守殿
上條(政繁)彌五郎殿

〔河井氏聞書〕

中越

扱又、甲州之儀、武田(信豐)典厩并高坂(昌信)彈正以取成、勝頼此方入魂、何分ニも當方指圖次第、可及其行由之候之條、可心安候、(昌信)八日上下略、全文ハ、(景泰)六月八日、(景泰)五月、越後ニハ此行聞ヘシ

六月八日

景勝判

北條(景廣)丹後守殿
同 安藝(輔廣)守殿

〔參考〕

〔上杉年譜〕

二十

○上文ハ、武田勝頼ノ兵、越後ニ侵入スルコ、五月、越後ニハ此行聞ヘシカハ、中條與次(景泰)三盛竹俣三河守慶綱、五十公野右衛門宗信、吉江喜四郎信、景色部惣八郎長實、水原彌四郎親憲(後號彌七)、齋藤下野守朝信、毛利惣八郎(顯元)、加地安藝守春綱、安田治郎少輔長秀、新發田尾張守長敦、上條彌五郎政繁等相議シテ云ク、武田勝頼已ニ兵馬ヲ越後ヘ向フルト聞定テ、小田原ヨリモ援兵アルヘシ、然ハ吾軍士雄氣ヲ勵シ戰フトモ、寡ハ衆ニ敵スヘカラス、畢竟景虎ノ勝利ハ疑ヒナシ、此ノ上ハ公ヨリ勝頼ト和睦有テ、勝頼ノ妹君ヲ公ニ嫁シ奉リ、兄弟ノ好ミヲ成シ、甲兵ヲ合テ、景虎ヲ攻メハ、兵馬ヲ勞セス、勝利ヲ得玉ハン、然レトモ、勝頼ハ氏政ノ妹、聳ナレハ、容易ク和議ハ調ヒ難カルヘシ、傳ヘ聽ク、勝頼ノ寵臣跡部大炊介長坂長閑齋ハ、寵遇他ニ超過シテ、甲府ノ政務ハ此兩士ノ舌頭ニ歸スル由兼テ、其沙汰アレハ、彼兩士ニ厚ク賄賂ヲ與テ、各評議ノ旨趣ヲ演説アラハ、如何カ有ント云ケレハ、何レモ尤ト評定決シテ言上ス、公モ兼テ此儀ヲ思シメシ煩セ玉フ處ニ、諸將ノ申旨ニ應シ玉ヒ、早速ニ許容シ玉フ、コレニ依テ先ツ跡部長坂ノ兩土方ヘ、富永清兵衛吉田十右衛門以テ右ノ旨趣ヲ申送り、然ルヘキ由公ニ達スレハ、尤ニ思シメシ、諸將ニ命シテ一封ヲ調ヒ、富永吉田ヲ以テ甲府エ遣シケル、兩使跡部長坂ニ謁シ、件ノ旨趣ヲ談ス、跡部長坂ハ天資貪慾ノ者ナレハ、賄賂ニ耽リ、委細ニ唯諾シテ、勝頼ニ達スヘキト云、兩使ハ越後ニ歸リテ、二士ノ返詞ヲ演述スレハ、公ヲ始メ奉リ、諸將各喜ヒノ眉ヲヒラキケリ、

景勝ノ家
臣勝頼ト
和センコ
トヲ勸ム

勝頼ノ家
臣ニ贈賄
ス

景勝使ヲ
勝頼ニ遣
ス

○景勝誓書ヲ勝頼ニ送り、武田信豊コレニ答報シ、尋テ勝頼信豊誓書ヲ景勝ニ
納ル、コト、十二日ノ條ニ見ユ、

〔北越軍記〕四下

略上

三郎方ニハ本庄美作老功ノ兵ニテ智謀尤深シ、北條丹後大

景虎ノ勢
張ル

景虎援ヲ
小田原ニ
求ム

氏政景虎
ノ爲ニ援
ヲ武田勝
頼ニ請フ

剛ノ兵ニテ合戦ニ馴タル功者ナリ、毎度ノ合戦多ハ三郎方打勝候ユヘ、三郎方ハ日
ヲ逐テ勢ツヨク、景勝方ハ勢蹙リ、既ニ一里半阻リタル御館ヨリハ、春日山城下ノ町
ヘ萬事買得ニ來レ共、城中ヨリ城下ノ町ヘ出ル事ハ心ニ不任、本庄越前守繁長新發
田因幡守治長、山本寺庄藏齋藤下野守ヲ始、景勝方ヘ見續申度候ヘ、自分ノ領分皆
三郎方ト入接リ、在々所々ニテ取合申候ユヘ、春日山ヘ思儘ニ加勢スル事不叶、三郎
ハ小田原ヘ數度飛脚ヲ遣シ、此方毎度勝利ヲ得申候間、御加勢ヲ給リ候ヘ、早ク景勝
ヲ退治シ、越後ヲ討平候ハント申遣ニ付、氏政ヨリ遠山丹波守富永三郎左衛門中條
出羽介垣岡美作守大田大膳北條治部都合一萬八千餘小田原ヲ立、氏政ヨリ妹婿武
田勝頼ヘモ被申合候ユヘ、三郎加勢トシテ、勝頼モ一萬餘川中島通リ越後ノ老津迄
出馬ニテ、小田原勢ノ著陣ノ一左右ヲ聞テ、春日山城ヘ可取懸ト待被申候、景勝方ニ
ハ、小田原ノ加勢著陣シ、勝頼信濃口ヨリ攻入ハ、表裏ニ敵ヲウケ、敗軍無疑、上杉家老
齋藤下野守朝信是ヲ聞、早々居城赤田ヨリ馳參リ、景勝ヘ諫言ヲ申テ、勝頼ハ出頭人

景勝ヨリ
黃金一萬
兩ヲ贈リ
東上野ヲ
割讓シ婚
約ヲ成ス

勝頼兵ヲ
班ヘス

景勝賄賂
ヲ勝頼ノ
臣長坂跡
部ニ贈リ
和ヲ謀ラ
シム

長坂入道釣閑阿刀部大炊入道々印次第ニ、萬事被致由ナレハ、行可有トテ、勝頼ヘ黃
金一萬兩、兩出頭ヘ二千兩宛進物トシ、芋川縫殿助島津月下齋ヲ勝頼ヘ遣シ、東上野
ヲ勝頼ヘ進上仕候間、向後御旗下ニ罷成候、其上勝頼御妹ヲ景勝内室ニト被申越ケ
レハ、勝頼モ、長坂阿刀部モ、即景勝使者ニ對面シ、和談相調リ、互ニ誓紙ヲ取易シ、勝頼
妹婿ニ景勝約束有テ、勝頼ハ老津ヨリ甲州ヘ歸陣アリ、○下文ハ、十九日、

〔甲陽軍鑑〕二十

九日ノ條ニツク、

去程に、景勝討死うたがひなしと申候により、景

勝分別いたされ、勝頼公にて兩出頭、長坂長閑跡部大炊、欲をかまへ、萬事禮物をとり、
賄賂にて事をすます義聞及候故、勝頼公へ景勝手を入、長坂長閑跡部大炊をたのみ、
謙信の貯をかれたる金子共を取出し、長閑に二千兩、大炊介に二千兩くれ、勝頼公へ
一萬兩、進上申候、其上御縁者に被仰付候と、勝頼公御簷下に、景勝罷成申へく候、殊に
東上野少も残らず、勝頼公へ指上申候とあるにつき、長坂長閑跡部大炊、勝頼公へ申
あぐる、信玄公御他界の前、春中に天下へ趣給ふとて、御支度のため、金子を御調ある
に、後家役出家の妻帯役まで、召あげらるゝといへども、漸七千兩ばかりにて候、たゞ
今又是は何事もなきに立所にて一萬兩の金子調申候儀は、信玄公十双倍勝頼公御
威光ましなさるゝ故如件、其上景勝起請を仕り、御簷下に罷成、盡未來御無沙汰申間

敷と有儀也、さありて東上州御手にいれらるへき事、大なる御徳分にて候、景勝へは、
信玄公御在世の時、一向宗の長嶋へ御約束のお菊御料人をましまいらせ候へかし、
一段然べく候、又いかに御小舅にて御座候共、三郎殿理運になされ候は、小田原の
氏政大佞人にて欲のふかき屋形に候へば、越後を取つゝ、後は勝頼公を退治なさ
るべき御たくみうたがひなしと、長坂長閑跡部大炊介申により、勝頼公其儀に御つ
き、喜平次と無事になされ、小舅の三郎殿を、此年中にころしまいらせられ候、

〔北條五代記〕七

三上杉三郎景虎滅亡の事

○上文ハ、三月十三日ノ條ニツマク、武田勝頼ハ、景虎の妹むこより、越後鉾楯乃よしを聞、人數をたうハ
し、勝頼を跡より出陣せる所、景虎うちまけ勝頼の陣中より入、先もて安堵乃思ひを
ふせ、其比勝頼乃家老、長坂長閑跡部道印出頭し、其威より甲斐國中飛鳥を落ぬべしと
いふ、此兩人深欲よふなり、無道を沙汰し、武田乃家滅亡のそしと云ふらハ、然、輝
虎當夏中京都へせめのなるべきよし、うまての支度より貯へをきとる黄金、數箱より入
をきとるを、幸ふる哉、此金を取出し、長坂長閑より千兩、跡部道印より千兩、勝頼へ五千兩
送らハし、越後よりよけゆく景虎を誅罰し、此度景勝を御引立たまあるよ付てハ、生
前の大幸とるべきむ、使札をさし送らハ、所より、彼兩臣千兩づゝの金を見て心ま

長坂跡部
勝頼ニ勸
メテ景勝
ヲ援ケシ
ム

とひ、勝頼へ申て云、君ハ織田信長といふ大敵を持給ひて、あゝうひをんとふし、其上
越後と相模一味よをいてハ、甲州持國ととしてあやうかるべし、三郎殿を誅し、越後
と和順然るべしと、まきりよいさめ申よ付て、勝頼ハ萬事兩臣をうらひふれば、其儀
よまうせ、三郎を害し給ひぬ、○景虎自殺ノコト、七年三月二十四日ノ條ニ收ム、
八日、子、景勝、上野既橋城將北條輔廣、景廣父子ノ、窃ニ心ヲ景虎ニ寄スルヲ察
知シ、關越ノ往來ヲ禁ジ、是日、景廣父子ノ背反ヲ詰ル、

〔河井氏聞書〕○越中

爰許之儀、無心元候、而、飛脚被指越、喜悅之至候、仍、當城彌堅（固カ）國備士無油斷申付候、揚北
之諸面々何茂在城、近日彼面々人數打著候條、凶徒可討果儀、案中候、扱又、甲州之儀、武
田典厩（信豊）并高坂彈正以取成、勝頼此方入魂、何分ニも當方指圖次第、可及其行、之由ニ候
之條、可心易候、然者人留之儀者、度々無曲様ニ被申越候、先以無餘儀候、雖然、三郎（景虎）被取
除翌日より、北條之者共近邊へ押懸、證人を取、武色ニ不及迄之仕合候間、扱々父子覺
悟も相替候、かく思候、而人留之儀堅申付候、身之存生も不爲相違候歟、母ふと被呼取
候事、覺悟相違歷然と被成族も可有之候、身之心底不淺露書物之間、此上之儀者、被抛
少々無心所存、身之前者菟も角も、謙信芳志不成、一方事候間、可有其分別も候歟、

輔廣父子
人留ヲ抗
議ス
北條ノ者
共近邊ノ
人質ヲト
ル
父子ノ變
心
景廣母ヲ
上野ニ迎
へ取ル

天正六年六月九日

五一六

謙信ノ舊
恩ニ背ク
者アルモ
自身ハ城
ニ自盡ス
ルノミ
分別次第
ニ委ス

專者、謙信芳志之者共覺悟如何様ニ變候共、身之事只一人於當城切腹之處思定候間、

此時ハ外郭之備も不入候之條如何様も其方分別次第候、更無動轉候、謹言、

景勝判

六月八日
北條丹後守殿
安藝守殿

九日、丑景勝、景虎ト越後木田ニ戰フ、是日、築地資豐ノ戰功ヲ褒ス、

〔築地文書〕

○羽

今度不慮之錯亂之處ニ有當城、相稼、殊木田表之懸合ニ、驗壹ツ討捕候、神妙感入候、彌

々可抽戰、功事簡要候、謹言、

六月九日
景勝花押

築地修理亮殿

上野九兵衛等、景虎ノ黨篠宮出羽守ヲ破リテ、越後猿毛城ヲ奪ヒ、下郡ヘノ通路
ヲ開ク、是日、景勝、九兵衛ノ功ヲ賞シテ、其知行桃木ノ地ヲ安堵セシメ、且ツ、諸
役ヲ免除ス、

〔歷代古案〕五羽前

尚々、彌御奉公之儀、長福寺遠藤方有談合、可被走廻事、肝要候段被思召候、少不可有

油斷候以上、

二位公

今度二位公を以被仰届候儀、其方以持、早速猿毛之地懸取、御忠信無比類被思召候、依

之桃木之地、如前々諸役被停、御軍役等御免被成候て可被下由、御詫候之條、先日も拙

者一札差越候、可被致知行候、御本意之上、急度可被爲引立、彌可被走廻事、肝要候、仍如

件、

天正六年

〔山浦〕
國清

山浦國清

六月九日

上野九兵衛殿參

近々も、さ之地之義、御證判相調、重而可差越候、可被任御書候、以上、

今度御忠信無比類候、就者、桃木之地之事、可申越候、拙者可被相任候、家中區々之由聞

候之間、其方無二走廻、傍輩中意見、肝要候、恐々謹言、

〔附記〕村上源五國清西濱

〔天正六〕
六月九日

國清〔花押〕

天正六年六月九日

五一七

上野九兵衛殿へ参

今度、皆々以談合、覆先忠、猿毛之地、則候事、誠以忠信無比類候、此上猶以各々入魂、其地堅固之備、簡要候也、

六月十四日

景勝

正眼院

正眼院

上野九兵衛とのへ

長福寺

長福寺

今度、其地乗取事、忠信無比類候、何様爰元本意之上、壹所可感之候也、

六月十四日

御判斗

上野九兵衛とのへ

景勝ノ敵城

〔景勝一代略記〕

春日山へ御敵仕城共、先鮫尾富坂直嶺町田米山寺の猿毛、西濱ニ不動山根知是等也、何も御城十里廿里の内也、就中米山寺猿毛ハ、下郡御味方中の道ふさく地也、春日山ハ下郡へ飛脚成共通へき様なし、米山寺ハ御館方被成、上杉憲藤

猿毛城主
上杉憲藤
柿崎父子
成敗

春日山城
ト下郡ト
ノ連絡通
ズ

米山寺

と申、三郎殿ハ彼地給家來之仁、(篠田羽守)の宮と申者を指置る、主ハ御(館)とちに御入候也、猿毛と申ハ、柿崎代々居城ニ候へ共、柿崎父子四人ハ、謙信様御遠行前の年、いウ成子細哉らん御成敗被成、其家中者共大小人共ニ方々へ逃散候義、彼志の宮尋出シ、本の知行扶持等を出し、我者ニふし、如此之處、上野九兵衛と申者、不思議之分別を以猿毛を攻おとし、志の宮討取、景勝様へ忠信申ニ付、下郡の御味方へ通用叶御人數登り兵糧等も如思召罷成候、

〔越後古實聞書〕

御館付城ニ富坂の(中頸城郡東頸城郡直峯)鮫ケ尾のふとを米山地の猿(毛)の城、越中境不

動山根地の兩城、此分ハ御城より十里二十里の内外也、遠き所ハ數多有之、米山寺の

城ハ上杉憲藤居城也、憲藤ハ御館ニ籠る、留守居家來篠宮と云者置うる、彼篠宮柿崎

の城抱ける、去年柿崎父子四人御成敗被成、城代不被仰付、御遠行被成ゆへ、明城より

りたる處に、柿崎下人共集扶持くも、本のことく此城ハ籠置、下郡への往來を留る、又

米山寺三十里の麓と云ふハ奥州海道也、やりの内ハ旗持と云あり、計策して是を引

付、(友重)蓼沼藤七、佐野清左衛門二人を番手に居置る、米山寺の物主篠宮を、上野九兵衛計

策よして討取ゆへ、猿毛の城落るよ付而、則猿毛の城上野ヨ御預被成ニ付、下郡へ道

も自由ふりのふとをの城ハ上田妻有内へ、往來のちまも成を、是も引付て、吉益伯耆

旗持城
蓼沼友重
佐野清左
衛門
直峰城ハ
上田妻有
ノ通路

天正六年六月十一日

五二〇

吉益伯耆守

守を被差置也、

〔参考〕

米山城

〔北越略風土記〕^八 頸城郡 古跡

米山城

猿毛城

〔北越略風土記〕^八 頸城郡 古跡

猿毛城

城の腰村山中にあり、或云、米山ノ山、梯崎三河守景家居城なり、謙信侯、景家信長に通するの疑ありて、天正五年丁丑十一月七日、遣平賀宗左衛門吉江中務本庄繁長伐之、景家父子四人家臣七百人皆戦死して城陥リ、北越略風土記別ニ記スルハ誤ナリ、ナ

十一日、卯、景勝ノ兵、御館城ヲ攻メ、大場及ビ居多濱、府内ニ戦フ、景虎ノ黨上杉景信討死ス、景勝、長尾孫七、村田勘介等ノ戦功ヲ褒賞ス、尋デ復、戦フ、

〔別歴代古案〕^十

爰許追日相募諸人許中、無違儀走廻候、殊ニ去十一、十三兩日相動、初十郎宗徒之者數輩討取、府中之儀者勿論、館際陣城迄放火、巢城計ニ成置候、菟角見結候、而落居不可有程候、^{〇上下略、全文ハ、六月九日ノ條ニ收ム、}

〔天正六〕

六月廿三日

景勝

板屋修理亮とのへ

〔長尾平藏氏所藏文書〕^{〇越}

今度、於大場、遂ニ一戦之刻、驗討執候事、神妙之至候、彌々相嗜可走廻事、簡要候、謹言、

〔天正六〕

六月十一日

景勝(朱印)

長尾孫七殿

〔歴代古案〕^{〇七}

今度、於大場、遂ニ一戦之刻、驗討捕候事、神妙之至候、彌相嗜可走廻事、肝要候也、

〔附記〕五十嵐彌左衛門祖

六月十一日

景勝

大沼無理介とのへ

〔歴代古案〕^{〇五}

今度、於大場、一戦之刻、驗討捕之段、神妙候、彌相嗜可走回事、肝要候也、

〔天正六〕

六月十一日

景勝

岡田拾左衛門尉殿

○景勝ノ、同日、木村與助、北目十右衛門、北村孫兵衛、長谷川與八郎ニ與ヘシ感狀

天正六年六月十一日

五二一

天正六年六月十一日

五二二

ハ、略ホ前文ト同ジキニ付キ略ス、又、楠川左京亮ニ與ヘシ感狀ハ二十八日ナレドモ、同文ニ付キ略ス、

〔上杉年譜〕二十

府内ノ戦

今度、於府内遂ニ戦、驗一討取事、戦功神妙之至候、彌可相稼事、肝要候、謹言、

六月十一日

景勝

土肥善八郎

土肥善八郎殿

村田勘介

今度、於居田濱、遂ニ一戦、(上杉景信)十郎方討取事、戦功神妙之至候、爲賞意、太刀一腰、金覆輪、并折紙

居多濱ニ

遣之候、彌可相稼事、簡要候也、

信ヲ討取

六月十一日

景勝

賞與ス

村田勘介殿

大場口ノ

〔景勝一代略記〕 御館方右不仕合ニ付、働事もなし、府中町人等むさふりあゝと志て

將

日送也、春日山ニハ、御館へ御行可被成御支度有て、御人數相催、六月十一日早天、一萬

小田口ノ

餘御勢、二手ニ分て、大場口、(居多)小田口より御(節)さちへ向押寄給、大場口大將ニ(政繁)上條殿、小田

將

口へハ山浦國清也、御さちニも兼而其聞へり、七千餘二手ニ分て、小田口へ上杉

(景信)十郎殿、大(場)口へ山本寺伊豫守、三千餘大(口)口出向、延命寺の竹藪を後、當相待處ニ、

春日山御勢五千餘ついてゐる、御館方の衆も隨一の士あま、春日の御勢少引退、二

町計追返し、館方此勢今ハかうよとみる處ニ、小田口合戦館方散々、まけ、大將十郎

殿討死也、館方兵共あふけの橋迄退也、大場口ハおさち方少さおへ共、小田口やふき

をるを、敵後かかゝりゐる、御館方前後より敵ニ圍まれ叶へき様なうりけきハ、其よ

り右方深田へ追込き、おさちをさし敗軍す、春日御勢おさち際迄討つゝくる、其より

府中へ亂入、六千間の家共、火をうけたり、折節北風吹、御館へ々ふり吹やる、此烟下

より敵ウゝるふらんと、御館之中男女動轉ス、御城之勢亂取高名思ま、にしをぬし、

其日申刻春日山へ御納馬也、同十二日人馬息休事、十三日又御働有、府中濱方へ火を

うけ、大坪口を押廻、おさちの南方をあふけ橋本御さちのさハ迄、一間も残らば放火

也、素城計體也、

〔上杉年譜〕二十 六月十一日、景勝公御出馬有テ、景虎ノ居城ヲ攻玉フ、大手ハ大場

口ト云、搦手ハ小田口ト云、大手口ハ上條彌五郎政繁軍將タリ、搦手ハ山浦源五國清

武將タリ、景虎ノ將士ニハ上杉十郎信虎ナリ、敵モ味方モ兼テ肩ヲ並ヘタル軍士ナ

レハ、互ニ尺モ進トモ、寸モ退ク事ハナシ、双頭ニ火ヲチラシ、雄氣ヲ振ヒ、接戦スレハ、

天正六年六月十一日

五二三

景勝ノ兵
府中ヲ燒

大坪口
府中火ク

大手ヲ大
場口
搦手ハ小
田口

上杉十郎
信虎
十二日ノ
戦

御館南傘
町應化橋
火ク
十三日陣
ヲ引ク

敵將上杉十郎信虎ハ、公ノ御一族ニテ、長尾右京亮景信ノ男ニテ、始メ長尾十郎景滿ト云、後稱號ヲ賜リ、上杉十郎信虎ト號ス、同十二日ノ黎明ヨリ、雙軍鯨波ヲ合セ鬪戦スレトモ、昨日ノ戦ヒニ軍將討レ、兵士モ勇氣ヲ撓マシ、吾兵ノ雄威ニ氣ヲ屈シ、將卒悉ク城内ニ引入ル、晚景ニ反シテ、府中ノ市廊ヲ放火スヘキ由公命アリ、折フシ戊亥ノ風烈シク、御館ノ南傘町應化橋マテ一時ノ間ニ焦土トナリ、又同十三日御納馬ナリ、今般ノ戰士ニ軍功ノ賞トシテ、感書ヲ下サル其御書云、○感狀ハ、前掲ニツキ略ス、

〔越後古實聞書〕

六月十七日、御館へ御馬被寄、大手の大將上條彌五郎政重、御館方の大將山本寺庄藏、搦手へ向大將山浦源五國清、御館の大將上杉十郎殿、兩口一度、押寄せける、御館の勢も出向、双方共よりけ合、互より知るゝ事あは、詞とらけて險しき戦也、御館方よりあふき事ハ、北條安藝守伽そる小姓、此亂聞て安藝守より暇をとり、舍弟北條刑部少所へ狀を添うて遣す、刑部高名爲致、安藝守方へ遣し度存、善光寺府内の町裏濱の手より付て、彼小姓引付、敵の模様を窺見る處、彼小姓じれてや有けん、刑部よりくれ敵の中へ飛入、其儘打をり、刑部是を聞無是非と云、馬の腹帯を直し、其手へ懸入、刑部少も討死也、刑部弟近江守無念と思ひ、是も討死也、十郎殿聞、指立侍共討死無念也と、總勢一度よりけ責崩さむと先より進み見へける、十郎殿と見て

北條刑部
兄弟討死

中より取込、十方より責メ、十郎殿も討死也、御館方敗北してちり〜成ル、
十二日、辰、壬景勝、誓書ヲ武田勝頼ニ送ル、是日、武田信豊答報シ、且ツ、勝頼ノ信濃海津著陣ヲ報ズ、尋デ、勝頼・信豊、誓書ヲ景勝ニ納ル、

〔上杉家古文書〕

勝頼海津
ニ入ル

蒙抑旨、至于御眞實者、御誓詞可給置之由申届候處、速被相認被指越候、欣悅候、幸勝頼(信濃)海津著陣候間、右之趣具ニ申聞候、委曲附與彼口上候間、不能具、恐々謹言、

六月十二日

(武田) 信豊朱印

上杉彈正少弼殿

〔景勝公御書留〕

○上杉家
記所收

略○上、然而甲州一和之儀落著、既勝頼典、既誓詞相調被越候、○下略、全文ハ、六月二日、十九日ノ條ニ收ム、

六月廿九日

景勝

板屋修理亮殿

○景勝、勝頼ニ和ヲ求ムルコト、七日ノ條ニ見ユ、
十七日、酉景勝、越後赤澤ヨリ援兵ヲ請フニ依リ、樋口與三右衛門ヲシテ赴キ援ケシメ、是日、コレヲ吉益伯耆守等ニ告ゲ、花ヶ崎ノ要害ヲ棄テ、兵力ヲ集中シ

テ、以テ防備ヲ嚴ニセシム、

〔別歴代古案〕九

(中頸城郡吉川村カ)

赤澤之地カ人数之事申越候條、其許ニハ人^(數)無人ニ候條、自爰元樋口與三右衛門

武主ニ申付差越候、^(鐵砲)てりそう二丁ウの人数こそへ、あり澤へ可差越候、扱又、其地無人

數ニ候^(彼處)よ、あそこ^(此處)こ、ニよふ^(要害)ういともと^(九戸濱)とり、人数被差越候事如何ニ候、くどのよふ

いハ、從其元成共^(中頸城郡明治村)うへ可然候、花ウ崎^(中頸城郡明治村)ハいらさる事ニ候條、無人数よてよふう共

相^(中頸城郡明治村)うへへても如何ニ候間、花ウ崎おともとせ可然候、先書ニ如申越、其地用心ニさ

まり候間、少も油斷有間敷候、猶重而可申候、謹言、

(天正六)六月十七日

景勝

吉増 伯耆守殿

佐藤平左衛門殿

長尾 右京殿

佐藤平左衛門
長尾右京

二十二日、^(寅)武田勝頼、信濃長沼ニ陣ス、尋テ、越後ニ入りテ藤卷原ニ進ミ、後退

キテ、大出雲原ニ屯ス、

〔中山小太郎氏所藏文書〕前羽

揚河北ノ
軍近々著
セントス

爰元無事爲可執刷御上使衆、其地へ御越候歟、委細聞届候、幸勝^(武田)頼信州長沼之地ニ在陣、自此方程近候間、日々申談候間、先以御上使衆、早々可被申候、扱又、當城備、至于近日者、彌々相募候、揚河北之人數モ、近々打著之段、追々飛脚到來候條、彼諸勢著候て、御館可討果事、無疑候間、可心安候、雖無申迄候、其地普請用心、定而不可有油斷候、猶萬吉重而謹言、

(天正六)六月廿二日

景勝(花押)

吉江民部少輔殿

赤見小六郎殿

吉江民部
少輔
赤見小六郎

〔上杉年譜〕二十

其地普請候哉、彌以油斷有間布候、爰許甲州衆出張候、併無爲差儀候、可心易候、備等何茂堅固候、○下略、全文ハ二十七日ノ條ニ收ム、

(天正六)六月廿七日

景勝

深澤刑部少輔殿

〔景勝一代略記〕

助とて出馬有、頸城郡大出雲原に至り、六月十七日著陣有、春日の間三十里也、二三日

甲州勢越
後ニ入ル

○上文ハ、五月十一日ノ條ニツミケ、

(中頸城郡新井町小出雲)

山浦國清
甲州勢ニ
備フ

天正六年六月二十二日

休息有、春日山へ向て藤牧原ニ御軍有、鉢嶺其間五里也、お館七里也、甲州勢かゝらハ防戦有へしとて、山浦國清大將よて惣軍催し、町構迄取出被成處、勝頼終日順見有て、何の行もふく、申刻に本陣大出雲原へ御歸陣有、九月上旬迄御在陣被成、其内ニ景勝様と、勝頼公御一和被成、御納馬也、

五二八

〔越後古實聞書〕

小田原北條氏政ハ甲州武田勝頼江使者之趣越後の一亂ニ付而、加勢差向申間、御直馬被出、御下知を以三郎遂本意候様、兩度迄申來ルニ付而、甲州勢三萬程よて打立、六月十六日(頸城)郡大出雲原へ押寄、勝頼陣を取らまけり、御城より此間三拾里(おカ)同十九日(中頸城郡春日村)春日山ハ五里(おカ)藤卷原へよせ、備被立也、此處より御館へハ七里あり、御館方さなふ事云計ふし、春日山よても防戦を支度、麓の町裏へ被出、山浦源吾國清大將よて待ける、勝頼ハ關東勢不著を不審し思ひ一戦ハふし、其日終日被待ける、關東ハ何之儀ふけれハ、申之刻藤卷原引拂本の大出雲原ニ歸り備取、約束相違ハ不審也、關東勢不著ニ戦ふ大事成とて、大出雲原にむくへ、何の手立もふし、七月十七日、春日山よりハ、御館へ可被寄とて、勝頼の押ハ國清を被指置、御館へ被寄、其日を御一戦有て勝利あり、其日の大將(開)具發を討取て御馬被入、去とも勝頼ハ不構して三十日待多とも、關東不著事勝頼案よ違、欲ふうき氏直く幸と

六月十六日
勝頼ノ入
越ニ御館
方振フ
春日山城
警戒ス
藤卷原

景虎ノ將
開發某戰
死ス

思ふて、勝頼をそくし出し、景勝と戦せ、何ニ勝利有ても關東勢押向、甲州越後とも隨うへむとたくみ事、鑑ようつすとく也、乍去關東勢不著問退陣もせまじとて、徒二日を送り玉ふハ、景勝公の御運のつよき所あり、

〔北越軍記〕

四下ノ上ハ、七、小田原加勢ノ北條衆モ申カ京迄推來候へトモ、勝頼別心ニテ景勝一味ト聞、越後へ入事不叶、猿カ京ヨリ小田原へ引返、三郎方力ヲ落候へトモ、本庄美作其子清七郎、北條丹後、其外倔強ノ兵共荷擔一味致候ユへ、少モ不痿、合戦日夜ノ勝負ニテ候、其歳ハ極月迄取合、歳暮申候、此度齋藤下野守朝信行ニテ、大事ヲノカレ、運ヲ開カレ候ユへ、朝信カ恩未來マテ忘ベカラズ、子孫ニ至テ疎略有ベカラザル旨、景勝誓紙ヲ朝信ニ被遣ケルナリ、

齋藤朝信
ノ功勞

○勝頼、藤卷原ニ陣スル日、詳ナラズ、

二十三日、卯景勝、武田勝頼ニ交渉スルトコロアリ、小森澤政秀ヲシテ、越後妻有方面ヲ固守セシム、

〔小森澤文書〕

○東、其元之様體ニ付而、急脚力到來、具聞届候、縦、市川如何様ニ申廻候共、實所與被心得、間布候、其地有無衆用心も大切之由候間、人數差越候、雖□□遣之候、普請用心等不可

市川

天正六年六月二十三日

五二九

天正六年六月二十三日

五三〇

山浦源五

有油斷候、扱又條々申越通、委細聞届候精ハ源五殿可被仰届候、猶萬吉重而々々謹言、

六月十九日

景勝(花押)

小森澤刑部少輔殿

援兵ヲ遣

重而源五殿迄指越書中披見、之事、市川可請取由申候歟、依之今日甲陣へ遣飛脚候、定而別義有間敷候、縱如何様ニ申候共、其地堅固ニ可被相抱事、簡要候、以前人數之事被申越候間、則差遣候、此度之儀候間、如何共手堅仕置專一候、此義者市川可爲所行候、勝頼へ深申合子細候間、様之少差を以大途被違事有間布、其心得尤候、相替儀候者追々可申越候、猶源五殿可被申届候、謹言、

六月廿三日

景勝(花押)

小森澤刑部少輔殿

市川之普請上田衆可由雖申付普請出來申候間、上田爲休人馬雖無申訖候、之用請小屋懸有間敷候歟

六月十六日

○景勝、小森澤政秀ヲシテ、市川方面ニ備ヘシムルコト、五月二十三日ノ條ニ見

二十七日、利景勝、關東方面ノ形勢ヲ慮リテ、登坂安忠ヲ越後坂戸ニ遣シ、城將深澤利重等ヲ援テ、敵ヲ荒戸ノ新寨ニ防ガシメ、且ツ、利重ヲシテ、復、地下人ヲ召集シテ警備ヲ嚴ニシ、北條輔廣ノ舉動ヲ探報セシメ、銃手ヲ春日山城ニ送ラシム、尋デ、甲斐・越中ノ向背ヲ、利重ニ報ズ、

〔歴代古案〕六羽前

上野家成ノ報告あらと
地下人ヲ集メ足懸ヲ作ラシム
地下人ノ實ヲトラシム
態書中差越候、並倉内從上野(上野)ウ(家成)の書中披見候、押詰不聞合、登坂與右衛門用意申付、其元へ差越候間、態々談合候て、あらとウ(荒戸)山中邊ニてふせき、相稼へきよし申付越候、其元(正)去やうたい(體)いふく候て、爰元山之備ちろい候間、如何ニも談合候て、其備專一候、道路ふとあしろり候て、是ヲも地下人成共相集ろへさせ尤候、少も油斷候てハ口惜候、子細與右衛門可申候、謹言、

尙々、地下人ふと此證人とらせ、手堅可申付候、以上、

六月廿七日

景勝

天正六年六月二十七日

五三一

天正六年六月二十七日

五三二

富里三郎
左衛門

富里三郎左衛門殿(附記)富里、後ニ高村ニ改ム、高村丈法印先祖

深澤刑部少輔殿(利重)

〔上杉年譜〕二十

甲州衆出
張
厩橋ノ狀
情ヲ探報
セシム

其地普請候哉、彌以油斷有間布候、爰許甲州衆出張候、併無爲差儀候、可心易候、備等何
茂堅固候、關東境用心氣遣專用候、厩橋(上野)之樣體、北條之手成細可申越候、其許人數何程
候哉、無心元候、又、爰許鐵炮放置度候條、鐵炮可放者候者申付、爰元江可差越候、證人共
何茂油斷無之可申付候、猶關東之様子細々可申越候、謹言、

六月廿七日

景勝

深澤刑部少輔殿

〔登坂文書〕〇東

甲州勢在
陣

昨日も書中差越候つる、定而可爲參著候、然者爰計之様子無相替儀候、甲州衆出張、于
今在陣候得共、無爲差儀候、當地於備者如何ニも堅固ニ申付候、可心安候、扱亦、以前爰
元江如聞得者、其表へ厩橋衆何も申合相動之由候條、押詰登坂與右衛門尉ニ人數相
添、其元江差越、關堺目あらと直路ニ地利ヲ取、如何ニも人數相集放戰(防)可成之由申
付差越候つる、定而其備可申付候、其方も同意ニ談合候、而無油斷様ニ可申付候、其地

岩戸ヲ取
ル
越中方面
ノ動靜
河田長親
ノ好意

普請之儀も、以前與右衛門尉ニ如申越、日々無如在可申付候、爰元岩戸ヲ取、猶以備堅
固ニ候條、可心安候、越中之儀も河田(長親)前守無二此方へ無別條懇切ニ候、自爰元萬端
異見相尋候、少も無別意候、是又可心安候、菟角其表之備ニさゞり候間、與右衛門尉
何も談合候、而無油斷備等可申付候、如何様爰元之樣體重而可申越候條、早々申越候、
謹言、

猶々、關東之様子、細々可申越候、定而其方も可申越候へ共、路次無自由ニ可有之候
間、左様ニも可有之歟、彌、無油斷註進尤候、與右衛門尉ニ申候、以前申付、兩地ふしん
の儀申付候哉、早々申付、人數相集申付尤候、其以後關東之様子如何候哉、申越尤候、
以上、

七月五日

景勝(花押)

登坂與右衛門尉殿

樋口主水助殿

深澤刑部少輔殿

○景勝、深澤利重ヲシテ、地下人ヲ召集セシムルコト、五月二十一日ノ條ニ見ユ、
二十九日(己酉)、武田勝頼、景虎ヲ諭シ、景勝ト和セシメントシテ、越後木田ニ到ル、是

天正六年六月二十九日

五三三

天正六年六月二十九日

五三四

日、武田信豊、コレヲ景勝ニ報ズ、景勝モ亦、コレヲ小木城將板屋修理亮ニ告ゲ、且ツ、修理亮ガ、景虎ノ黨本庄秀綱ノ誘惑ヲ卻クルヲ褒シ、黒瀧與板ノ二城將ト議シテ琵琶島城ヲ攻撃セシム、

〔歴代古案〕一羽前

貴札本懷候、仍而、林泉寺被預置候之一通、則進入候、隨而屋形(勝頼)今日當地著陣、明日者少々出入數路次之普請可被申付候、不可有御疑心候、此上無二ニ和平之儀、助言可被申候、恐々謹言、

甲州勢越後ニ在リテ道普請ヲ爲ス

〔天正六〕六月廿九日

上杉彈正少弼殿

武田左馬助

信豊

〔別本〕歴代古案〕十

今度忿劇以來、度々申届候き、參著候哉、一向ニ無其聞得、無心元候、自黒瀧如申越候者、其元如何ニも無別之由、忠信無比類候、爰許追日相募諸人體中無違儀、走廻候、殊ニ去十一、十三兩日相動、初(上杉景信)十郎宗徒之者數輩討取、府中之儀者勿論、館際陣城迄放火、巢城計ニ成置候、蒐角見結(詰)候間、落居不可有程候、扱亦、黒瀧與板申談、琵琶島へ一行成置尤

候、此節候間、如何共一功之忠信本意之上、一廉可感之候、猶目出重而穴賢々々、

六月廿三日

景勝

板屋修理亮とのへ○越後小城將

〔景勝公御書留〕

内々其元之儀無心元處、態脚力到來、具樣體聞届候、不思儀之世間成來候處、守筋目、無二忠信事、誠以無比類、神妙候、就中自(古志郡)櫛尾種々申寄子、細雖有之、無用心由、是又奇特感入候、彌々黒瀧與板申合、其表堅固之仕置、簡要候、扱又、爰元之樣體、可有其聞得候、然而甲州一和之儀落著、既勝頼(武田信豊)典廐誓詞相調被越候、館へ爲手合、昨今甲衆木田迄、一手二手差越候、定彼脚力見届、無心元樣々可申候、是者内々入魂之子細共候、而、如此候間、曾而不可有疑心候、猶精者可有彼口上候、穴賢々々、
追而、傍輩共ニ、加懇意、可爲走廻候、何樣本意之上、何も急度可感候、此段可申聞候、以上、

勝頼ノ景虎ニ和議ヲ勸告スルハ景勝ノ諒解ニ出ツ

六月廿九日

景勝

板屋修理亮殿

〔志賀楨太郎氏所藏文書〕○羽前

天正六年六月二十九日

五三五

天正六年六月二十九日

五三六

偕又、爰元無何事、甲州衆于今張長候、無相替儀候、可心安候、○上下略、全文ハ、七月

七月十二日

景勝

登坂與右衛門殿

深澤刑部少輔殿

景勝、越後楞嚴寺ノ、柿崎氏家臣ノ意見ニ從ヒ、功勞アリシヲ賞シテ、其寺領ヲ郡司不入ト爲ス、

〔楞嚴寺文書〕○越

今度柿崎家中之者共、依有意見、抽忠信候、就之寺領之儀、成不入進之候者也、仍如件、

天正六

六月廿九日

〔中頸城郡黒川村〕

楞嚴寺

景勝(花押)

○景勝、柿崎家臣等ノ戰功ヲ賞シテ、憲家ノ家督ヲ復セシムルコト、八月二十二日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔新潟縣寺院明細帳〕

中頸城郡黒川村大字半島曹洞宗 楞嚴寺

一本尊釋迦牟尼佛 由緒、文龜年中創立、開山龍室玄光、

是月、景勝、信濃習禪寺村ニ制札ヲ掲ゲテ、諸軍ノ濫妨ヲ禁ズ、

〔諸州古文書〕信州「習禪寺村制札淺岡彦四郎御代官所」

制札

人取

右於習禪寺村、諸軍勢濫妨狼籍、并人取、竹木剪取事、堅令停止之、若有違犯輩者、不嫌甲

乙人、於立所可加成就、由被仰出、被成御印判者也、仍如件、

天正六 (景勝) (朱印)

六月 日

尾張守(花押)

參河守(花押)

下野守(花押)

景勝、越後下崎ヨリ發スル船一艘ニ、過所狀ヲ授ク、

〔宮三郎氏所藏文書〕○越

從下崎自由之、船壹艘、何時成共無相違調可通者也、仍而如件、

天正六年 (景勝) (朱印)

六月 日

所々役所

天正六年六月是月

五三七

天正六年七月九日

五三八

上野家成、景勝ニ應ジテ上野沼田城ニ據ル、河田重親、コレヲ圍ミ攻ム、

〔小野寺文書〕野○上

小野寺刑部少輔ノ武功

小野寺刑部少輔、今村傳四郎殿江呈候武功覺書寫

覺書

天正六年戊子六月

一 上野之内沼田之城ニ、(上野家成)植野中務籠城申候時分、川田伯耆守彼地責候時、馬出之、土橋

二 而、師大介止鑓仕候事、今度丹羽五郎(長秀)左衛門殿御抱候竹内舍人存知候事、

同

水路ヲ絶ツ

一 於同城ニ水の手取申候時、木村内藏介止鑓組候事、右之舍人彼地ニ籠城致能存知候事、

七月小盡辛亥朔

九日、和景勝、越後黑瀧城將山岸秀能等ニ、武田勝頼トノ和成ルヲ答報シ、且ツ、與板城將直江信綱ト聯絡シテ、景虎黨ノ三條城將神餘親綱ヲ計ラシム、

〔上杉年譜〕二十

黒瀧與板ト入魂

其以來其許之儀、無心元處、雖不始儀候、被入念旨、具被申越候、委細聞届候、自何以與(直江信綱)板

黒川本庄ノ交渉相浦主計助、枋尾歸服勸誘功ナシ

其地江別而入魂、無二抽忠信、由(肝)簡要候、雖無申迄候、彌兩地江可懇意事尤候、然而爰元備之儀、近日猶以手堅候、甲州和與之儀、茂入眼候、萬方仕置堅固候間、館可討果事不可有程條可心易候、偕又黒川之一途不及届候、本庄江相渡事無曲候、雖大途爲備、相浦主計助有談合相渡由候間、先以可然候、次枋尾江雖入計策、無納得歟、左候共、折々武略專一候、(神餘親綱)江茂以手引計議候、而可被見候、何篇茂其筋調略之儀、任入候、猶萬吉重而謹言、(景勝)景虎ノ間ニ和議破レ、武田勝頼、甲

七月九日(天正六)

景勝

山岸宮内少輔殿(秀能)○黒瀧城將

同 隼人佐殿

景勝ノ兵、復、景虎ノ兵ト大場ニ戰フ、是日、景勝、戰功ノ將士ヲ褒ス、

〔志賀楨太郎氏所藏文書〕前○羽

二三日以前ニ(館)とてより敵取出候處ニ、及仕合、一騎合十四五騎討捕候、定而可爲満足候、○上下略、全文ハ、七月十二日ノ條ニ收ム、

七月十二日(天正六)

景勝

登坂與右衛門殿(安忠)

天正六年七月九日

五三九

登坂安忠

天正六年七月十二日

深澤利重

深澤刑部少輔殿

五四〇

〔上杉年譜〕二十

大場ノ掛合

今度、於大場掛合、相稼、驗討捕候事、神妙之至候、彌可走廻事、肝要候、謹言、

七月九日

景勝

島津喜七郎

島津喜七郎殿

今度、於大場一戰之刻、相稼、驗一討捕候事、神妙之至候、彌可走廻事、肝要候、謹言、

七月九日

景勝

佐藤佐左衛門

佐藤佐左衛門殿

○景勝ノ兵、景虎ノ兵ト大場ニ戰フコト、五月五日、七月二十七日ノ條ニ見ユ、

十二日、戌、壬景勝、關東ノ情狀ノ不明ナルヲ憂ヒ、越後坂戸城將登坂安忠、深澤利重ヲシテ、探報セシメ、且ツ、樺澤城以外ノ壘塞ヲ撤シ、兵力ヲ坂戸・荒戸ノ二城ニ集中シテ、防備ヲ嚴ニセシメ、銃手ヲ春日山城ニ還サシム、

〔志賀榎太郎氏所藏文書〕〇羽

去比以書中具申越つる、然自其元飛脚一向不差越候、路次不自由故無其儀候哉、其以

直路

樺澤

後關東之樣體如何、無心元候、如何與も相稼、直路〔荒戸〕あらと山取立、普請早々出來候樣ニ

可相稼候、〔樺澤〕その澤入地利ウまへハ其儘差置、可爲持候、其外之小屋ウまへハ、みな

ノ以前其方ニ如被申越相拂、只今普請候兩人へ、地下鑿成共相集可差置候、普請出

來候ハ、早々爰元へ可申越候、日夜無心元候處ニ、關東之様子、自其方所も、細々不申

越候事無曲候、扱又爰元無何事、甲州衆于今張長候、無相替儀候、可心安候、二三日以前

ニ、〔館〕とてより敵取出候處ニ、及仕合、一騎合十四五騎討捕候、定而可爲満足候、〔上野〕倉内之樣

子、其以後如何候哉、聞度候、爰元ニてつ〔鐵砲〕そう衆無之候條、其元ニてつ〔安忠〕そう衆候ハ、以

前其方ニそへ差越候五丁のつ〔坂戸〕そう衆をハ、爰元へ可差越候、是ハ與右衛門尉ニ申

候、〔坂戸〕その澤計ウへさせ、餘之地ヲハえらい、兩地へ必々相集へく候、さて又、〔坂戸〕さうと

山普請油斷有間敷候、又、彼日記の者共、早々爰元へ可差越候、用所候間、早々可差越候、

猶々、深澤ニ申候、無人數ニ候、あそこ爰ニ地利ウまへ爲持、とさろくまんシヲそ

しめとして地之者共ニ申付よし候、萬事咲止ニ候、大ふと之時ハ、必々うちあけへ

く候ニ、なまゝいニ地下人計ニ爲持、けつく敵のすニ可成之事咲止ニ候、左様之儀

申付事無用ニ候、身之くふう候て可爲持地利ヲハ、直ニ可申付候、以上、

七月十二日

景勝〔花押〕

天正六年七月十二日

五四一

地下人守備ノ利害

天正六年七月十六日 十七日

登坂與右衛門尉殿

深澤刑部少輔殿

十六日、丙寅景勝ノ兵、景虎ノ兵ト、越後春日中屋敷ニ戦フ、景虎、乘水右近ノ戦功ヲ褒ス、

〔寸金雜錄〕五 越中

今日、敵相働候之處、於春日（中頸城郡春日村）中屋敷、盡紛骨、無比類走廻、感入候、謹言、

七月十六日

乘水右近殿

景虎

十七日、卯景勝、景虎ノ黨越後上田城ヲ侵スノ報ヲ聞キ、途中ノ敵ヲ擊破シテ後、援兵ヲ送ルコトヲ、長尾平太等ニ答報ス、

〔上杉年譜〕二十

天正六年七月十七日、上田ノ將長尾平太、同舊雪齋方へ御書ヲ下サル、上田邊ノ敵兵相働クニヨリ、援勢ヲ遣ハサレ然ルヘキ旨注進ニヨリ、援兵ヲ差

越ルヘキノ間、其内堅固ノ用心アルヘキ由公命アリ、其御書云、

如註進者、其表凶徒相働之由、無心元候、就其加勢之儀、今日雖可相立候、路次中之地

下人等、少々山小屋江取上、往復差塞様候之條、今明日中討散可差越候、其内堅固之

山塞ニ據
リテ往來
ヲ塞グ

御備可爲千意候猶、相替儀候者、從是可申入候、恐々謹言、

七月十七日

長尾平太殿○上田城守將

舊雪齋

長尾平太
齋

越中神保識泰、吉江信景ノ意見ニ從ヒ、景勝ニ應ジテ質ヲ納ル、

〔歷代古案〕七 羽前

被成御書、畏而頂戴誠忝次第御座候、仍、今度就進退表裏、（吉江信景）吉喜任、御異見、證人進上之仕

候、向後彌奉得御意候様ニ、御披露所仰候、恐惶謹言、

識泰

七月十七日

鱒坂清介殿

鱒坂長實

〔附錄〕

〔志賀楨太郎氏所藏文書〕○羽前

雖出し候、一向不手合候、扱又越中備可然手積共候間、吉事重而可申越候、猶萬吉

重而謹言、

七月十三日

景勝（花押）

天正六年七月十七日

五四三

五四二

天正六年七月二十二日 二十三日

栗林肥前守

長尾伊賀守

長尾伊賀守殿○年次詳ナラズ、姑ク茲ニ付收ス、

二十二日、申、壬景勝、小森澤政秀ノ功ヲ賞シテ、下平修理亮・會津新三ノ舊地ヲ宛行フ、

〔小森澤文書〕○東

今度有_レ其地、抽忠信走廻事、神妙無比類候、依之下平修理亮一跡并會津新三分宛行之候、知行不可有相違者也、仍執達如件、

天正六

七月廿二日

景勝(花押)

小森澤刑部少輔殿(政秀)

二十三日、酉、癸景勝、街道筋ニ於テ、使僧又ハ脚力ト稱シ、猥リニ往來徵發スルコトヲ禁制ス、

〔伊佐早文書〕

○羽前伊佐早謙氏所藏

當城江號用所、從所々或使僧或脚力等於其地賄以下申付由、甚以曲次第候、所詮向後者自爰元差越使飛脚ニ者、彼印判可遣之候條、此朱印至于無之者、何事も承引致間布

者也、仍如件、

天正六

(景勝)朱印 ○鼎形、印文、圓量

七月廿三日

(中頸城郡黒川村)米山寺

犀濱

百姓等

武田勝頼、景虎、景勝ノ和親ヲ媒介セン爲メ、越後府内ニ在陣シ、山吉掃部助等ニ音問ヲ通ジテ、舊誼ヲ演ブ、

〔上杉家古文書〕

急度染一筆候、仍當國惑亂、景虎、景勝辜負歎敷候之間、爲和親媒介、與風出馬、越府在陣、因茲彌次郎方へ及鴻鯉之音問候、自先代入魂候之條、彌、無疎略様、諫言可爲喜悅候、委曲大熊可申候、恐々謹言、

(天正六)七月廿三日

(武田)勝頼(花押)

山吉掃部助殿

同 玄蕃允殿

天正六年七月二十三日

五四五

山吉景長

大熊

彌次郎

犀濱

米山寺

公用ヲ偽
リ徵發ス
ルモノア
リ

五四四

天正六年七月二十七日

五四六

同四郎右衛門尉
仁科中務丞

同 四郎右衛門尉殿
仁科中務丞殿

○勝頼、越後ニ入ルコト、六月二十二日ノ條ニ見ユ、

二十七日、江景勝、景虎ヲ攻メテ、復、大場ニ戰フ、尋デ、戰功ノ士ヲ褒ス、

〔武州文書〕七橋樹郡

昨廿七、於大場口ニ戰之刻、最前ニ合首尾事、神妙無比類候、彌々、相嗜可走廻事（肝）簡要ニ候、謹言、

天正六年 寅

七月廿八日

景勝（花押）

荻田長繁

荻田孫十郎殿

〔歷代古案〕三羽前

昨廿七、於大場（中頸郡春日村）ニ戰之刻、相稼、驗壹ッ討捕候事、神妙之至候、彌々、相嗜可走廻事、肝要候、謹言、

七月廿八日

景勝

境新左衛門

境新左衛門殿

〔竹田久太郎氏所藏文書〕前羽

御奉公御尋ニ付、書付を以申上候事

○中

七月廿七日ニ、（居多）小田濱ニ而、丸山茂兵衛同前ニ、去んか仕、度々返、鍵仕候事、是ハ甘糟（景純）備後方被存候事、○下

慶長四年三月十七日

登坂（廣重）角内判

杉原親憲

杉原常陸殿

〔景勝一代略記〕

七月廿七日、春日山より、六千餘まで、御館へ、小田口より御働有、互

開發某討死ス

〔上杉年譜〕二十

七月二十七日、公御出馬有テ、館ノ城ヲ攻玉フ、勝頼無二御味方ア

ルヘキ旨血盟ヲ御取カハシ有ト雖トモ、其底心ハカリ難ク思シ召シ、甲州勢ノ押トシテ、山浦源五國清ヲ差ヲカル、館方ノ軍將具發某ト云者、一陣ニ蒐出テ、劍頭ニ火ヲ出シ、相戰フ、味方ノ兵士力戰シテ、具發ヲ討捕シカハ、敵兵勇氣ヲ失ヒ、城中ニ退ク、日モ漸ク西山ニ傾ケハ、公モ退陣シ玉フ、此一戰ニ、境新左衛門軍功ニ依テ、感書ヲ賜ハル、

天正六年七月二十七日

五四七

武田勝頼ノ意中ヲ疑ヒテ之ニ備フ

天正六年七月二十七日

○景勝、大場ニ戰フコト五月五日及ビ七月九日九月二十六日ノ條ニ見ユ、

五四八

景勝、金子大學助ノ、春日山城ヨリ上田ニ向ツテ逃亡セシコトヲ、坂戸城將深澤利重、廣瀨城將佐藤平左衛門ニ告ゲテ、守備ヲ嚴ニセシム、

〔吉川金藏氏所藏文書〕○羽

急度申遣候、仍而、今夜中、金子大學助ウケをち候、依之而、(南魚沼郡)廣瀨へも油斷有之間敷候申越候、其元雖無申迄候、無油斷備千言萬句ニ候、其元之様子、細々注進専用ニ候、猶萬吉重而可申候、謹言、

尚々、兩口へも、此段申越、無油斷様ニ申越へく候、以上、

七月廿八日

景勝

深澤刑部少輔殿

〔別歴代古案〕九

急度申越候、今夜廿七夜中、金子大學助ウケおち候、依之其元備用心等、雖無申迄候、無油斷氣遣尤ニ候、爲其彼者共さしこし候、珍儀候ハ、早々可申越候、猶吉事待入候、謹言、

七月廿八日

景勝

佐藤平左衛門殿○廣瀨城將

信濃島津泰忠、其所領高ヲ上杉家奉行ニ注進ス、尋デ、奉行ソノ軍役ヲ催促ス、

〔志賀榎太郎氏所藏文書〕○羽

嶋津左京亮知行

本領上 西尾張邊 右之定納百仁俵壹斗

本領上 夏河 同所 右之地一切荒所

本領上 福王寺 同所 右之地一切荒所

本領上 同所 同所 右之地一切荒所

御新恩 屋敷廻 右之地一切荒所

御新恩 高梨領之内、但下地不請取候 右之地一切荒所

御新恩 蓮之郷 右之地一切荒所

御新恩 夏河 右之地一切荒所

御新恩 村山 右之定納百四拾三俵 此内三拾俵雜穀

御新恩 長沼嶋 右之定納仁百九拾五俵 一斗 皆雜穀

御新恩 今富郷 右之定納六拾壹俵 荒所三ヶ一

以上

都合六百貳俵

天正六年七月二十七日

五四九

本領上 西尾張邊
夏河
福王寺
新恩 蓮之郷
村山
長沼嶋
今富郷

本領上 百貫文
本領上 拾八貫文
本領上 仁拾貫文
本領上 三拾貫文
御新恩 仁百貫文
御新恩 八拾貳貫文
御新恩 百七拾五貫文
御新恩 百五拾貫文
御新恩 百貫文

嶋津領内 西尾張邊
同所 夏河
同所 福王寺之内
同所 屋敷廻
高梨領之内、但下地不請取候
蓮之郷
夏河
村山
長沼嶋
今富郷

右之定納百仁俵壹斗
右之地一切荒所
右之地一切荒所
右之地一切荒所
右之地一切荒所
右之地一切荒所
右之地一切荒所
右之定納百四拾三俵 此内三拾俵雜穀
右之定納仁百九拾五俵 一斗 皆雜穀
右之定納六拾壹俵 荒所三ヶ一

天正六年七月二十七日

天正六年 戊寅

七月廿七日

嶋津左京亮

泰忠花押

五五〇

今井新左衛門尉
武藤三河守

今井新左衛門尉殿
武藤三河守殿

丁丑定納合百廿貫四百文

一乘馬

甲立物、具足、面頬、咽輪、手蓋、脛楯、指物、四方歟、まふ、い歟、馬介可爲如法、

一持小旗

一鐵炮

一弓

一持鍵

一長柄

鐵砲一挺
=付キ玉
藥三百發

可有上手放手、玉藥壹挺、
可有三百放宛、可支度、
可有上手射手、矢、うつろ、并根つる無不足、可支度、事、

實共可爲仁間候事、

實共三間、木柄歟、打柄歟、實五寸、朱してあるへし、

以上廿人、何も歩兵可有武具、

右、如此有道具帶來可被勤軍役、重而被遂御糺明、以御印判可被定旨被仰出候者也、

天正六年 戊寅

八月廿三日

今井新左衛門(朱印)

武藤三河守(朱印)

嶋津左京亮殿

八月 庚辰朔

一日、景勝、越後犬伏城將毛利秀廣等ヲ、妻有ニ遣シテ、小森澤政秀等ヲ援ケシ

〔小森澤文書〕京

其地之備大切之由、 犬伏之地ニ、初毛利名左衛門尉吉益伯耆、 三左衛

門尉長尾筑後守其地へ相移候、雖無申迄候、彼者共有談合、堅固之備簡要候、猶子細も

候者、重而注進待入候、此度之儀候間、彌々可抽忠信、 爰元備堅固候間、可心易

候、猶萬吉重而候、謹言、

八月朔日 案八日付歴代古

小森澤 刑部少輔殿

金子二郎右衛門尉とのへ

景勝、小倉將監、蓼沼友重、秋山式部丞、若林九郎左衛門ノ春日山城ニ籠城シテ、

天正六年八月一日

五五一

吉益伯耆
萩田與三
左衛門尉
長尾筑後
守

金子二郎
右衛門尉

天正六年八月一日

戰功アルヲ賞シ、各領地ヲ宛行フ、

〔上杉古文書〕〇十一 羽前

國分五郎
兵衛原内
膳亮
又四郎分

今度、不慮之錯亂之處、遂籠城、走廻事神妙之至ニ候、依之國分五郎兵衛分、并ニ原内膳亮分、又四郎分充行候、彌々、忠信簡要候、仍執達如件、

天正 戊

八月朔日

小倉將監殿

〔歷代古案〕九 羽前

今度、不慮ニ忽劇之處、遂籠城、殊兩度走廻之段、神妙之至候、依之河井分、并林分遣之候、彌、可抽忠心者也、仍執達如件、

天正六年

八月八日 朔日

蓼治藤七殿

景勝御朱印

〔歷代古案〕六 羽前

夜交民部
左衛門江
村隼人佐
小熊本五
郎分

今度、不慮錯亂之處、遂籠城、走廻事神妙之至候、依之夜交民部左衛門分、并江村隼人佐分、小熊本五郎分宛行候、彌々、忠信簡要候、仍執達如件、

天正六 戊 才

八月朔日

秋山式部丞殿

景勝

〔上杉年譜〕二十

今度、不慮錯亂之處、遂籠城、走廻事神妙之至候、依之石坂左近分、并河村孫六分、後藤勘左衛門分充行候、彌、忠信肝要候、仍執達如件、

天正六 寅 年

八月朔日

若林九郎左衛門殿

景勝

○右ハ景勝、景虎ニ黨スルモノ、領地ヲ沒收シ、之ヲ己ニ屬スルモノニ宛行ヒシモノニシテ、前後、數次ニ互リテコトアリ、

二日、^巳三條信宗、起請文ヲ山浦國清ニ送り、景勝ニ對シテ、一心ナキヲ盟フ、

〔歷代古案〕四 羽前

天正六年八月二日

五五三

石坂左近
河村孫六
後藤勘左
衛門分

天正六年八月二日

天罰起請文之事

右意趣者、某身上之儀、無二上様(景勝)之御まへ奉守、いづやうも御説次第可致御奉公覺悟御座候處、今度拙者めし修(童)の(童)らんへ、不慮之儀申いとし、猶御殿中御取沙汰致迷惑候然處、上様被聞召分、無御別條之段忝奉存候、於向後、自然表裏之族御座候者、御前江被召出直ニ被爲仰聞候者、忝可奉存候、惣體奉對上様某之儀、逆心之儀者不

信宗ノ召仕流説ヲ唱フ景勝寛恕ス

及申、御後聞儀ふも、何分ニも御説一筋御奉公可申上候、此旨偽申ニおゐてハ、上者梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神、惣而日本國中大小之神祇、別而者氏神八幡大芽春日大明神愛宕飯繩白山立山、當國諸大神祇被蒙御罰、於現世者受黑白二病、於來世者、無間地獄可墮在者也、仍起請文如件、

天正六年八月二日

山浦源五殿

信宗

三條道如齋

〔上杉年譜〕二十

略○上此ノ信宗ハ、若齡ノ頃ヨリ、謙信公ニ近侍シテ、恩遇モ亦他ニ

異ナリ、成長シテ武名モ瀆サス、去ル三月十三日、謙信公逝去シ玉フテ、剃髮シテ道恕齋ト號シ、今公ノ味方トシテ、無二ノ忠貞ヲ抱ク、コレニ依テ二心ナキ旨ヲ陳謝ス、

三日、壬午景虎、岩井歳能ニ、勘忍分トシテ、下條宮内少輔并念佛寺領ヲ宛行フ、

〔歴代古案〕一羽前

當國可有堪忍由簡要候、爲其下條宮内少輔分、并念佛寺領出置者也、仍如件、

天正六

八月三日

岩井大和守殿

景虎(附記)或ハ景虎トアル處ニ御朱印トアリ

十五日、甲午坂戸城將深澤利重、援兵ヲ請フ、是日、景勝、將卒ヲ送りテ、守備ヲ嚴ニセシメ、併セテ、荒戸城ノ守備ヲ嚴ニセシム、

〔伊佐早文書〕

伊佐早謙氏所藏

書中具披見候、仍而、其地無人數之由申越候條、人數武主申付差越候、敵何程有之と云とも、其地被始、地行手さ□義有之間敷候、殊更無人之由聞届候間、心安候、併うのもの共差越候條、談合候て、手堅備簡要候、玉藥之事ハ、以前兩度差越候間、定而いつうとよても放間敷候、直路荒戸へも、以前自爰元さしこし候間、重而可差越候、自何關口靜候由簡要候、治部少輔其元ニ有之由、無曲候、早々荒戸へ相越、用心可申付事、肝心ニ候、猶

萬吉、恐々謹言、

天正六年八月三日 十五日

五五五

玉藥ヲ送ルコトニ同コレヲ濫用セザラシム

天正六年八月十五日 十六日

(天正六) 八月十五日

深澤刑部少輔殿○十五日
條參看

景勝(花押)

五五六

越後黑瀧城將山岸秀能等、援兵ヲ請フ、是日、景勝、本庄秀綱上田ヲ侵スヲ以テ、速ニ其求ニ應ズル能ハザルヲ答報シ、姑クコレヲ待タシム、

〔上杉年譜〕二十

下條某ニ
意見スベ
シ
流言ニ惑
フナカレ

重而脚力到來、得其意候、加勢之儀早速可差下之處、本庄清七郎到于上田、相働之由申候條、助勢令遅々候、乍去、不日人數可差越間、可心易候、如啓先書、萬方示合子細候間、本意不可有程候、雖無申迄候、父子三人、令談合下條江茂、加意見、其間堅固之備、簡心候、從初日忠信之儀候間、縱倭人如何様申妨候、其實所與心得間布候、是又、不可有疑心候、如何様自是態可申届候、謹言、

(天正六) 八月十五日

景勝

山岸宮内少輔殿

村山善左衛門殿

山岸出雲守殿

十六日、長景連、景虎ノ勸誘ヲ斥ケ、鯨坂長實ノ讒言ヲ排シテ、誓書ヲ吉江信景

村山慶綱
山岸光祐

ニ送り、景勝ニ對シテ、一心無キヲ盟フ、

〔竹田久太郎氏所藏文書〕○羽
前

敬白 起請文

右意趣者、無二無三奉守上様御前候事、

一從三郎殿様被成御書候へ共、不及御請、惣體上様へ御敵對のうゝへ不致通融候事、

一孝恩寺へ不致通融候事、

付、鯨坂備中守、色々讒言申之由候間、如此申上候事、

若此旨於偽申者、

上梵天帝釋、四大天王、惣而日本國中之大小之神祇、殊、日光月光摩利支尊天、八幡大尊、春日大明神、諏方上下大明神、愛宕山、大權現、飯繩大明神、別而彌彦、二田大明神、三崎兩社、大權現、石動山、五社權現、天滿天神之蒙、御罰於現世者、弓箭冥加永廢、於來世者、可墮在無間者也、仍如件、

天正六年

八月十六日

吉江喜四郎殿

景連(花押)

天正六年八月十六日

五五七

孝恩寺長
連龍

天正六年八月十七日 二十日

五五八

十七日、丙申、景勝、敵兵、越後廣瀨ニ迫ルト聞キ、上田ノ將士山田定宗ヲシテ、コレヲ警戒セシム、

〔上杉年譜〕二十 天正六年八月十七日、上田ノ士山田定宗入道十右衛門ト號 御書ヲ下サ

ル、○中略

其元敵之働、無爲差儀候由、聞届候、雖然、無人數之由、各談合候而、可相稼候、且又北魚沼郡敵廣瀨江動可成之由、其心得尤候、雖不始儀候、其元相稼肝要候、彌以、堅固之備專一候、謹言、

(天正六) 八月十七日

景勝

(定宗) 山田入道殿

二十日、己亥、景勝、尾崎重元ノ年貢ヲ改定ス、

〔歷代古案〕六羽前

尾崎孫十郎知行御改之事

合五拾壹貫六百四拾文

合五貫四百六十文

都合五拾七貫百文

(信濃水内郡) 尾崎之郷

白鳥分

定納

尾崎郷

白鳥分

定納

(俵) 表積而

糶

貳百八拾五俵 一斗二升入

以上

右嚴重可令所納者也、

太豊(黒印)

漆左(黒印)

太佐(黒印)

市丞(黒印)

天正六戊子年

八月廿日

忠兵衛殿

惣左衛門殿

〔武田久太郎氏所藏文書〕○羽前

伏奉再問譜録

(尾崎) 略○中 天正六年御館亂之時分、重信、景勝君之御味方仕リ、中曾根上倉本田今清水、西大瀧等相具シ、春日山江籠城、走廻相働、五月十七日、三郎方北條近江ト接太刀、互ニ討死

天正六年八月二十日

五五九

尾崎重信
北條近江
ト戦ヒ討
死ス

太豊
漆左
太佐
市丞

榮岩寺

飯山城將
二派ニ分
ル

天正六年八月二十日

五六〇

仕候ト留置申候、重信ハ(信濃)飯山市野口ト申處ヘ死骸取寄セ葬申候開基一寺、號榮岩寺、
法名榮岩寺殿、

右之節、桃井伊豆、本田孫七郎、岩井大和、同式部ハ三郎方ト罷成、岩井備中、昌能、同源
藏信能ハ、景勝公御小姓ヲ勤罷在候、

尾崎孫十郎、重元、或勝平、

後、清左衛門尉、大和守、其後、入道、號後東源齋ト、或新東源齋ト云、

本ノ東源寺ハ、信州尾崎郷ニ、文明年中立候、開山明翁和上、

天正六年四月、父重信參上于春日山ノ時ヨリ、飯山城鎮トシテ本壘ニ留守勤之、

同年五月、爲三郎方ト、自武田勝頼、遣武田左馬助於柏原マテ處ニ、孫十郎、重元并嫡子

小佐原重
譽及其一
族

小佐原源太、重譽、一族上堺、奈良澤、尾崎十右衛門尉、同松鷗軒等相向而、武田カ兵之越
後ヘノ通路塞キ相サ、ユ、

右、小佐原源太ハ、勝平長子ニ御座候、諸國武道修行ニ廻候節之名共御座候、小名三

四郎、半平トモ申候、家督前ニハ諸國廻歸參ノ時、小佐原ノ壘ニ居申故、小佐原ト名

乘申候、家督後、奥州福嶋迄參リ申候、

同八月朔日、從景勝君御感狀被成下候、父討死之事も御載セ被遊被下候、

西上野北
信濃ヲ武
田氏ニ屬
セシム

天正六年八月十八日、十九日、廿日、三日、尾崎孫十郎知行高御改有之、證文被成下、

同九月中旬、西上州北信州、從公被爲進子武田殿候ニ付、孫十郎モ屬武田家、累年抱來

候通、菜地(信濃)水内郡ニテ常磐郷、尾崎郷泉小泉此内ニ入、白鳥郷、高井ニテ小布施、小菅等之地、被

宛行、被命飯山城鎮、居本壘、

武田勝頼、景勝、景虎ノ間ヲ斡旋シテ和議成ル、景勝、勝頼及ビ其家臣ニ、物ヲ贈
リテ謝ス、是日、勝頼コレニ答フ、

〔上杉年譜〕二十

就和平媒介成就、態御音問欣然候、殊太刀一腰、包永馬一匹、黒毛并青帙千疋、贈賜候、珍
重候、猶秋山式部(定綱)丞、雇口上候條、不能具候、恐々謹言、

武田四郎

八月廿日

勝頼

上杉彈正大弼殿

〔歷代古案〕一 羽前

御芳札拜見、如仰、今度雙方御和與之儀、勝頼被申變候之處、事入眼目出珍重候、仍爲御
祝儀、秋山式部參使、一段祝著被申候、何様自是以使可被申候、然而私方江御太刀一腰、

天正六年八月二十日

五六一

内藤昌月
=太刀青
銅ヲ贈ル

天正六年八月二十二日

青銅五百疋領受過當之至候、旨趣得御意候、恐々謹言、

內藤修理亮

八月廿一日

昌月

新發田尾張守殿

〔歷代古案〕^三羽前

葛山信貞
= 太刀青
銅ヲ贈ル

珍翰本懷候、如仰、今度和平之儀、勝頼被申唱候處、時宜入眼目出珍重候、仍爲一儀、以秋山式部丞、懇預御音問、一段勝頼祝著被存申候、如何様以使者可被申由候、然而拙者江御太刀一腰、御馬一匹、并青銅千疋惠受、快然之至候、委曲雇彼口上候之間、不能具候、恐々謹言、

〔附記〕〔勝頼弟〕

葛山十郎

信貞

八月廿三日

上杉彈正大弼殿

○景勝、景虎トノ和議破レ、勝頼歸國スルコト、二十八日ノ條ニ見ユ、

二十二日、^丑景勝、能登鹽津ノ四郎右衛門尉ノ、正院出湊船ニ、分國內ノ諸役ヲ免ス、

〔刀禰文書〕^〇能登

海上御用

向後海上之御用可相達之由、因茲能州正院出湊之船壹艘、御分國中諸役被成御免許者也、仍執達如件、

天正六

〔新發田長敦〕
尾張守(花押)

八月廿二日(景勝)

〔竹俣慶綱〕
三河守(花押)

〔齋藤朝信〕
下野守(花押)

能州鹽津

四郎右衛門尉

景勝、故柿崎景家遺臣等ノ戰功ヲ賞シ、孫憲家ヲシテ、柿崎氏ノ名跡ヲ復セシム、

〔歷代古案〕^十羽前

今度、其方家中之者、依令忠信、名跡之儀返置候、彌、可抽忠功者也、仍執達如件、

天正六年

景勝

八月廿二日

〔憲家〕
柿崎千熊丸

〔參考〕

〔訂〕柿崎系圖

景家 彌次郎 和泉守
天正二年中死去

天正六年八月二十二日

五六三

五六二

天正六年八月二十三日 二十八日

五六四

晴家 平三郎 左衛門大夫

天正六年死去

憲家 千熊丸 彌次郎 能登守 母北條輔廣女

寛永十年死去

正家

二十三日、寅景勝、能登飯田與三右衛門尉ニ答報シテ物ヲ贈リ、且ツ、長景連・島倉泰明ノ命ヲ受ケテ警備ニ當ラシム、

〔上杉年譜〕二十

先日、音信到來、祝著之至候、仍、一儀迄小袖二遣之候、偕又、其元、長(景連)與市并島倉(泰明)孫左衛門入魂之由可然候、彌、兩人差圖次第、可走廻事肝要候、謹言、

八月廿三日

景勝

飯田與三右衛門(尉脱)殿

二十八日、未武田勝頼、景勝・景虎ノ間ヲ斡旋シ、一旦和議成リシモ、各主張スル所アリテ、議遂ニ破ル、是日、勝頼、軍ヲ率キテ甲斐ニ還ル、

〔相州文書〕十

節々被入心、書中喜悅之至候、仍、此表之儀、無心許可有之候、(武田勝頼)甲州出馬、(景虎)三郎間之義、

雖被執、雙方旨趣如何被聞届候哉、抛是非、去廿八納馬候、(中略、全文ハ、九月十九日ノ條ニ收ム、)

九月十九日

景勝(花押)

横田右馬

允

横田右馬允殿(家名)

同 織部佑殿

〔歴代古案〕一(羽前)

勝頼和平
成ラザル
ヲ嘆ズ

珍翰快然如承意、去夏以來、以不慮之仕合申談、本懷候、和平之義、種々雖及疎意候、互ニ條々有御存分、無落著候、歎敷候、歸陣以後、彌其備堅固之由肝心候、(中略、全文ハ、九月二

九月廿四日

勝頼

上杉彈正少弼殿(九月二十四日ノ條參看、)

○勝頼、景勝・景虎ノ間ヲ斡旋シテ、和議成ルコト、二十日ノ條ニ見ユ、

九月 己酉 盡

一日、(己酉)景勝、岩井信能等ノ、春日山城ニ籠城シテ、戦功アルヲ賞シ、各領地ヲ宛行フ、

〔歴代古案〕七(羽前)

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙之至ニ候、依之而水木分并關屋佐左衛門分宛行候、

水木分

天正六年九月一日

五六五

關屋佐左衛門分

天正六年九月一日
彌可抽忠功事簡要候、仍執達如件、
天正六年

九月朔日

岩井源三殿(信能)

〔武州文書〕七橘樹郡

大河津治部左衛門尉分
早川分

今度念劇之處、遂籠城、走廻事神妙候、依之大河津治部左衛門尉分、并早川分宛行候、彌々、忠信簡要候、仍執達如件、

天正六

九月朔日

荻田孫十郎殿(長繁)

〔矢野文書〕〇羽

今度念劇之所、遂籠城、走廻事神妙之至候、依之樹源七郎分宛行候、彌可抽忠信事簡要候、仍執達如件、

天正六九月朔日

竹俣藤三殿

景勝御朱印

景勝

景勝(朱印)

荻田長繁

樹源七郎分

竹俣藤三

夜交九郎三郎分

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事神妙候、因茲夜交九郎三郎分宛行候、彌可抽忠義之段簡要候、仍執達如件、

天正六九月朔日

景勝朱印

富永孫兵衛尉
同平太夫

富永孫兵衛尉殿
富永平太夫殿

〔別本〕
〔歷代古案〕十三

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事神妙候、因茲向井分宛行候、彌可抽忠儀(義下同)之段簡用候、仍執達如件、

天正六

九月朔日

丸山玖兵衛殿

景勝

丸山玖兵衛

〔上杉年譜〕二十

今度念劇之處、遂籠城、走廻事神妙候、依之山村藤三分、并多羅澤分、倉賀野左衛門五郎分之内下川充行候、彌、忠信簡要候、仍執達如件、

天正六年九月一日

山村藤三分
多羅澤分

天正六年九月一日

天正六年

倉賀野左衛門五郎分ノ内下

九月朔日

景勝

川

蓼沼掃部助殿

渡部左近分

今度、錯亂之處、遂籠城、走廻之段、神妙候、依之、渡部左近分充行候、彌、可抽忠節事肝要候、仍執達如件、

天正六年

渡部彦七

九月朔日

景勝

松倉將監吉益左近分

今度、錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙候、依之、松倉將監分、吉益左近分、充行候、彌、可抽忠信段簡要候、仍執達如件、

天正六年

狩野秀治

九月朔日

景勝

狩野新助殿

夜交九郎三郎分

今度、念劇之處、遂籠城、走廻事、神妙之至候、因、茲夜交九郎三郎分所充行候、彌、可抽忠義之段、簡要候、仍執達如件、

天正六年

富永彦兵衛

九月朔日

景勝

富永彦兵衛殿

植木源七郎分

今度、念劇之處、遂籠城、走廻事、神妙候、依之、植木源七郎分充行候、彌、可抽忠信事簡要候、仍執達如件、

天正六年

竹俣藤三

九月朔日

景勝

竹俣藤三殿

○前掲矢野文書ト重
複カ、姑ク、茲ニ掲ゲ、

猿供養寺分

今度、錯亂之處、遂籠城、奔廻事、神妙候、依之、猿供養寺分充行候、彌、可抽忠心事肝要候、仍執達如件、

天正六年九月一日

五六九

五六八

天正六年九月一日

天正六年

九月朔日

景勝

土肥太兵衛

土肥太兵衛殿

荏戶内匠分

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙候、依之荏戶内匠分充行候、彌、可抽忠儀、事肝要候、仍執達如件、

天正六年

九月朔日

景勝

瀧口源七

瀧口源七殿

吉田半左衛門分

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙候、依之吉田半左衛門分充行候、彌、可抽忠節之段、肝要候、仍執達如件、

天正六年

九月朔日

景勝

鹿島藏人

鹿島藏人殿

塚本二郎右衛門分

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙候、依之塚本二郎右衛門分充行候、彌、可抽忠節儀、肝要候、仍執達如件、

天正六年

九月朔日

景勝

水無瀨甚助

水無瀨甚助殿

吉田喜左衛門分

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙候、依之吉田喜左衛門分充行候、彌、可抽忠節之段、簡要候、仍執達如件、

天正六年

九月朔日

景勝

小黒式部丞

小黒式部丞殿

坂野源五郎分

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙候、依之坂野源五郎分充行候、彌、可抽忠義之段、簡要候、仍執達如件、

天正六年九月一日

天正六年九月一日

天正六年

石坂將監

石坂將監殿

吉田美濃分

今度、錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙候、依之吉田美濃分充行候、彌、可抽忠義之段、簡用候、仍執達如件、

天正六年

左近司與三

湯淺分

今度、錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙候、因茲湯淺分充行候、彌、可抽忠信之段、肝要候、仍執達如件、

天正六年

大瀧甚兵衛

大瀧甚兵衛殿

景勝

林平右衛門分
尾上村ヲ除ク
金原

今度、錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙候、依之林平右衛門分、但、尾上村者、除之、并、金原充行候、知行不可有相違者也、仍執達如件、

天正六年

九月朔日

景勝

竹俣藤右衛門

竹俣藤右衛門殿

野本小三郎
前守同藏人佐分

今度、忿劇之處、遂籠城、走廻事、神妙候、依之野本小三郎分、并、玉井豐後守、同藏人佐分充行候、知行不可有相違者也、仍執達如件、

天正六年

九月朔日

景勝

富所隼人佐

富所隼人佐殿

木村孫四郎分

今度、忿劇處、遂籠城、走廻事、神妙之至候、依之木村孫四郎分充行候、彌、可抽忠信事、肝要候、仍執達如件、

天正六年九月一日

天正六年九月二日

天正六年

九月朔日

景勝

高梨藤八郎殿

高梨藤八郎

松澤宗助

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙之至候、因茲松澤宗助分充行候、彌可抽忠信事、肝用候、仍執達如件、

天正六年

九月朔日

景勝

上野源五郎殿

上野源五郎

二日、庚景虎、上野、厩橋城將北條景廣ノ、越後北條城ニ歸著セシヲ聞キ、使者ヲ景廣ニ遣シ、明日、鉢崎ニ出陣シテ、旗持城ヲ攻メ、且ツ、速ニ相模北條氏ノ援兵ヲ嚮導セシム、

〔志賀榎太郎氏所藏文書〕

○羽

琵琶島城ヨリ景廣ノ歸國ヲ報ス

急度以飛脚申届候、唯今從琵琶嶋申來分者、今日其地北條迄打著候由、誠以満足不過之候、此上一刻も相急、明日者、八崎江押著、旗持山如何にも及行可然候、從南陣も加勢

景勝ノ侵上郷ヲ略ス

船早飛脚

天正六年九月二日酉刻

景虎(三郎)花押

北條丹後守殿

〔参考〕

旗持城

〔北越略風土記〕

八 古城跡

旗持城

蓼沼友重

〔中頸城郡米山村〕

鉢崎驛山中ニ在、土人此山ヲ名ツケ、旗持山ト云、天正中、蓼沼藤七、佐野清左衛門、此城ヲ守居ス、

友重

〔越後地名考〕

古城跡

旗持城

鉢崎宿東貳拾五丁斗、御關所之南有山城也、謙信侯

竹俣兵庫

時代、竹俣兵庫、佐野善藏守之、

黒川清實、景虎ニ黨シ、中條景泰ノ越後鳥坂城ヲ奪取ス、景勝、築地資豊ヲ遣シテ、コレヲ攻圍セシム、

〔築地文書〕

○羽

其地へ下著、種々相稼故、鳥坂之地、押詰、城中令折角之由、簡要候、雖無申迄候、彌々入計

天正六年九月二日

五七五

五七四

天正六年九月八日

五七六

策候得共、城内引破(中條景泰)、與次遂本意候様ニ被相稼專一候、扱亦、爰元備堅固候間可心安候、猶委細與次可申越候、謹言、

九月二日(天正六)

景勝(花押)

築地修理亮殿(資豐)

○鳥坂城陥落スルコト、七年四月二十一日ノ條ニ見ユ、

八日(丙辰)、景勝、使者ヲ武田氏ニ遣サントシ、越後妻有ノ守將小森澤政秀等ヲシテ、其路次ヲ周旋セシメ、且ツ、妻有筋ノ警備ヲ嚴ニシ、甲斐ノ援軍到ラバ、コレヲ犒フベキ旨ヲ命ズ、尋デ、甲斐ノ軍兵來著ス、

〔歷代古案〕八羽前

勝頼(武田)、信玄以來不申届候間、遣飛脚候、其口路次番無相違様ニ被送通(肝)簡要候、扱亦、妻有筋之備如何無心元候、雖無申迄候、從爰元差越候者共有相談、堅固之仕置專一候然而以前者事、此方缺落之者共押留被及理候、奇特之被致様祝著候、重而缺落之者候者、則可加成敗事尤候、亦當城備至于近日者、彌大慕候、可心安候、申迄無之候得共、其地普請用心晝夜(天正六)遣、不可有油斷候、猶萬吉重而謹言、

九月八日

景勝御居判

鉄落者ヲ押留ス

小森澤刑部少輔殿(政秀)

金子二郎右衛門とのへ

〔小森澤文書〕〇東

如注進者、甲州衆到其地、可爲著陣之由、珍重候、彼諸勢於打著者、馳走肝要候、各令相談、上田筋へ之動□□□候、差急尤候、雖無申迄候、不可有油斷候、扱亦、其方事、今度之忠信無比類候、此度之儀候間、如何様之不祥をも堪忍專用候、本意之上、一際可感之條、彌勳功專一ニ候、猶、目出重而可申候、謹言、

九月十一日

景勝(花押)

小森澤刑部少輔殿(との)

金子二郎右衛門尉□□□

〔志賀楨太郎氏所藏文書〕〇羽

略〇上扱又、此表無相替儀候、可心安候、此(妻有)まりへ從甲賀勢打出候由、申越候、い(坂戸)ん共、其表へ打出候様成之度候、〇中略、全文ハ、二十七日ノ條ニ收ム、

九月廿七日

景勝(花押)

深澤刑部少輔殿〇外宛名、四名略ス、

天正六年九月十日

五七七

妻有到着ノ甲斐援兵ノ坂戸ニ進マンコトヲ望ム

十日、戊午、景勝、越中ノ將山田修理亮ノ勤功ヲ褒シ、且ツ、使ヲ遣シテ、河田長親ト相議セシム、

〔歷代古案〕三

○羽前
(河田長親)

使者富永
清兵衛宮
島將監

今度錯亂之處、(河田長親) 豐前守抽忠信事、畢竟吾分相陣故、與感入候、何様本意之上、可賞之候、扱又、有用所、富永清兵衛並宮島將監指遣候、口上能々聞届、(相) 豐前守風談肝要ニ候、穴賢々々、

(天正六)
菊月十日

景勝

山田修理亮殿

十二日、庚申、北條氏政、景虎ヲ援ケン爲ニ、北條氏輝ヲ將トシ、北條景廣ヲ嚮導トシテ、越後ニ侵入シ、坂戸城ヲ攻ム、城將深澤利重・栗林政頼等、防戦屈セズ、登坂安忠傷キテ死ス、是日、景勝、利重等ヲ激勵シテ、武田勝頼ノ兵ノ出援スルノ日ヲ俟タシム、尋デ、北條氏ノ兵、寺尾・藪上・坂木・浦澤ヲ攻撃ス、

〔登坂文書〕○羽

甲州加勢
ノ管

遙々其表之様子、無其聞得、無心元候處、飛脚差越候、書中令披見候、度々如申越、其地堅固ニ相かゝ、候由、各相稼故、與無比類候、扱亦、甲州加勢押詰其表出張可有之候條、其

道塞リテ
彈藥ヲ輸
送スル能
ハズ
登坂安忠
ノ死ヲ弔
フ

内猶以手堅仕置專一候、其地より何も相稼、日々取出、敵毎日打取由、是又きどぐニ候、彌可相嗜事、(肝) 簡要候、敵所々地利共普請成之由候、事實ニ候哉、縦、如何様ニ行成之候共、甲州申合、無二其地加勢可成之候條、可心安候、爰元何茂味方中之地利共、無別義、手前被守候、當城備手堅申付候、是又可心安候、いゝん共、甲州勢加勢之衆、其表打出候ハ、此度敵打たし、此頃其地之在城、(苦) (勞) (鬱) (憤) (散) くらううつふんさんし度候、扱亦、其元へ、此度てつ(砲) 不う玉藥差越度候得共、飛脚成間敷由申候條、此度不差越候、押詰可差越候、謹言、猶々、(清忠) 與五郎ニ申候、(安忠) 與右衛門深手ニ、而無曲成候事、誠以相稼用所之事、本意ニハ候得共、此度本意見せ、候事、ふひん無申事候、乍去、其方晝夜相稼よし、頼敷候、以上、

(天正六)
九月十二日

景勝(花押)

登坂清忠

登坂 與五郎殿

樋口主水
助

樋口 主水助殿

登坂神兵衛

深澤 刑部少輔殿

栗林政頼

登坂 神兵衛殿
栗林 治部少輔殿

〔志賀楨太郎氏所藏文書〕○羽

天正六年九月十二日

五七九

天正六年九月十二日

五八〇

廣居針生ノ内報

鐵砲玉藥五百發 煙硝五斤 鉛

從其元如申越者其表南衆重其上其地江働之處ニ取合せ及鑓合敵數多打取之由申越候南衆打合武始と云城中すむと云彼是以旁々稼無類候彌此上も無油斷備相稼此時ニ候儲又爰元無相替儀城內何も無別意候涯分備手堅申付候可心安候扱又甲州衆于今賀勢無之由咲止ニ候併廣居針生如申越者二三日中ニ其表可打出由申越候間定而押詰其元可爲賀勢候間可心安候其元之様子晝夜あんし候間細々註進簡要候其表南衆其外敵之様體能々見届候押つけ飛脚待入候扱又てつとう玉藥五百となしゑんせう五斤ふまりさしこし候重而をしつけ可差越候猶萬吉重而謹言尙々萬事其地兵糧事あんし候返々敵の手成さいし註進專一候以上

九月廿二日

景勝(花押)

深澤刑部少輔殿

登坂與五郎殿

樋口主水助殿

栗林治部少輔殿

〔歷代古案〕

六羽前

自上田如注進者甲州于今加勢無之由申越候如何咲止ニ候乍去廣居針生申越分者

をしつけ加勢有之をし申越候間定而二三日中ニ上田表可罷出うと思候隨而其地人數無之由萬事笑止ニ候併爰元ニて涯分談合申人數可差越候條可心安候隨而爰元備無相替儀何も無別條候手堅備申付候是又可心安候雖無申迄候無油斷用心可申付候其方一人ニて萬事於其元辛勞申候此時ニ候間猶以入念相稼頼候猶萬吉重而可申候謹言

九月廿二日

景勝

清水内藏助殿

〔志賀榎太郎氏所藏文書〕

〇羽前

〔書中差越候具〕
□□□□披見候仍而其元甲州賀勢之儀無之之由萬々無心元候乍去其地手□□相かへ日々及仕合ニ敵數多打取之由其間得候萬々大慶心地能候其以後其表之敵陣模様如何候哉具重而註進待入候扱又此表無相替儀候可心安候(妻有)從甲賀勢打出候由申越候いん共其表へ打出候様成之度候隨而其地之者共日々相稼(肝)何も遂籠城之由無比類候何よも此段可申届候猶吉左右細々註進簡要候謹言

九月廿七日

景勝(花押)

深澤刑部少輔殿

天正六年九月十二日

五八一

甲斐ノ加勢妻有ニ人ル

清水内藏助

樋口主水助殿

登坂與五郎殿

同 神兵衛殿

栗林治部少輔殿

〔小野寺文書〕

野上

小野寺刑部少輔、今村傳四郎殿江呈候武功覺書寫

一越後國上田之庄江、喜多條(北)安藝守相動、坂土山宿城押破り申候時、一番鎧仕候、依之

北條氏政感狀被下候、其動之事ハ、今度安藤右京介殿ニ御抱候喜多條能登、雅樂殿(酒井)

御知行厩橋ニ居申候金子三左衛門存候事、

一其次日、彼地江川田伯耆守動申、退場伏ヲ置、引上申候處へ、敵押付慕申候處ヲ、押返

シ討申候時、最前ニ高名仕候事、右之喜多條能登、是も厩橋ニ罷在候大澤孫兵衛存

知候事、

一同所之内寺尾之小屋責申候時、高名仕候事、于今沼田ニ居申候中村何右衛門存候

事、

一越後之藪上坂(南魚沼郡)木之城江動之時、先乘ニ參候時、高名仕候事、真田内木村内藏介存知

小野寺刑部少輔ノ武功ノ一、坂戸城攻、河田重親、坂戸城ヲ攻メ、伏兵ヲ置テ退軍ス

寺尾攻撃

藪上

板木

浦澤

候事、

一同(南魚沼郡)上田之庄浦澤之城責申候時、鎗仕候事、唯今景勝御家中ニ居申候今井藤左衛門、右

之中村何右衛門存知候事、略

〔景勝一代略記〕

關東口之事、三郎殿へ爲助、小田原より、北條陸奥守同安藝守、其子

息丹波守案内者よて、上田之庄より亂入、彼所ニ被指置衆ニ、栗林肥前守、深澤和泉守、

坂戸と云城ニ在城也、關東勢立向防戦仕いへとも、小勢ふれば、地下町人引くし、坂戸

へ籠處、關東勢攻といへ共、名地ふれば不叶して引退、城よりついて出、後ル者多少討

取也、其後行もふし、數日送也、

〔越後治亂記〕

中 九關東の大勢、上田迄押寄し事

一同(天正六)八月中旬に、關東ヲ加勢として、北條陸奥守同安藝守同治部少(北條)毛利安藝守各四人

大將として、其勢四萬餘人、安藝守が嫡子丹後守を案内にて越後上田の庄坂戸の城

へ押寄たり、此安藝守は、本名毛利成けるか、越國北條の城代に居置れて後、謙信公の

仰に依て在名を名乗、其後關東御手入て、上野國前橋の城に居ては、小田原の北條に

紛るゝ故に、本名毛利を名乗ける、謙信公かくれ給へて、越國亂けれハ、關東は大方氏

政に屬して、安藝守も今度の加勢の大將をは承りなるとかや、偕も坂戸の城在番と

毛利安藝守北條ト號ス

地下町人ヲ召集シテ籠城ス

宇津江九右衛門
糧食ヲ坂戸山上ニ運ブ

關東勢樺澤城ニ據ル

志水城將長尾伊賀守
上阪宮内少輔佐藤甚助

關東勢志

聞へしハ、栗林肥前守深澤和泉守兩人、纔の勢よて大軍を防かん事成難し、如何を爲さんと安事(案)煩所に、其頃又御藏領の代官宇津江九右衛門と云し者、下り合て居たりしか、庄中の地下人共頼かたらい、藏米を敵に奪はれんか、とて坂戸の山へ取上せ、地下人共を取まわして、關東を防ける、數刻責戦へけれ共、究竟の名地成れハ、叶すして引退城中を是を見て、一度に突て出、おくる者少々討取けり、其後、關東勢は頸城郡へも打入す、樺澤と言所へ打廻り、古城を拵楯籠徒に日を送、勝頼(武田)此由聞給へて、我等か推量少も違間敷とて、景勝公へ和談有之、九月下旬に甲州へ退給ふ、

〔參考〕

〔管窺武鑑〕卷一 越後(上)植田三庄の内、樺澤の城主栗林肥前守、志水の長尾伊賀守、坂戸山には、上阪宮内少輔居城なり、御旗本より、先手の足輕大將佐藤甚助とて、歩足輕七十五人、與力三十五騎、謙信公時代より預けられて、數度譽ある士を差添へられ、坂戸山に在城して、上野表の抑なり、志水、樺澤の城も、其通各々堅固に用意し、襲來の敵を相待つなり、

右に記そ如く、上野衆、北條と一味故、越後への通路自由にて、三郎殿へ加勢の兵、北上野へは志水谷へ上ては、長尾伊賀守城を取卷き、三國峠を越えては、坂戸山、樺澤城を

水谷ヲ衝ク

坂戸城ノ要害

志水城ノ要害

打圍みて攻むる、此時節、上野は右の通、其外謙信公の切隨へ給ひたる國々、景勝と三郎殿とへ志ある者、互に挑合ひ、自分働きを仕り、越後の内にては、三郎殿方を仕るは、鮫ヶ尾の堀江玄蕃、(枳尾)戸中の本城清七郎を初めて、斯くの如くなる故に、植田表へ後詰なざるへき様なし、されとも道の謙信公、御眼力を以て差置かれたる各々なる故、敵の大軍に聊も臆したる氣遣なく、討立ち討立ち仕り、敵の備色あしくば、突いて出づべき様子なれば、北條家の人數大勢なれども、抑を置いて御館へ直ぐ通る事思も寄らざ候、○中さきども、大軍故、入替り、攻寄する事、七月中旬迄なり、坂戸山城は、三國峠の抑なり、三國峠といふは、上野、信濃、越後三箇國の境の山なり、是に依つて、日頃の用意の兵具、兵糧、丈夫にて、殊に勝利の地、名城なれば、此城へ、兩城より後攻すべしと密談なり、志水城は、上野より直越の抑とは雖も、上野大半御持國となるを以て、支度全からず、殊に坂戸山程の名地にて之なし、是故、志水、樺澤兩城守る事ならざれば、打捨て、坂戸山への後攻をべしと申定むる、然るに、漸く八十日餘の籠城なれば、糧も乏くなる故、志水、樺澤の兩城より、討て出で切抜け候、○下

景勝、廣瀨城將佐藤平左衛門ヲ勵マシテ、防禦ニ盡力セシメ、椿喜助ノ廣瀨ノ兵卒ヲ誘引シ、春日山城ヲ逃亡セルコトヲ告ゲテ、守備ヲ警戒シ、鐵炮及ビ火藥ヲ

天正六年九月十二日

送ル、尋デ、又、平左衛門ヲシテ、會津蘆名氏ヘノ返書ヲ傳送セシム、

〔別歴代古案〕九

甘糟三村
方ヨリ廣
瀨ノ兵卒
ヲ誘引ス

書中差越候、度々如申越、於其地晝夜相稼、日々相動成之由、無比類候、彌、無油斷用心氣遣專一ニ候、扱又、以前あまうす(甘糟)三村うと、椿喜助爰元廣瀨の者共召連うけおち候ニ付て、書中指越候間、無油斷(計議)いり様之けいさけいさく(計策)候共、ぬうれましく候、又、てつそう玉藥、てつそうさしこし候、猶、萬吉重而可申候、謹言、

九月十二日

景勝

佐藤平左衛門殿廣瀨城將

書中具披見候、仍、會津(蘆名氏)よりの書中返當之書狀差越候間、自其元飛脚うとへ申付、早々可相届候、扱又、其地雖、申迄候、無油斷用心專一ニ候、いりやうふる者、扱申、廻候共、直書無之ハ、少も、實儀心得間敷候、備堅固候、可心安候、てりそう玉藥重而可差越候、猶萬吉重而可申候、謹言、

九月十九日

景勝

佐藤平左衛門殿

十四日、戌壬蘆名盛氏ノ將小田切彈正忠等、金上盛備ト共ニ、景虎ニ應ジテ越後安田城ヲ攻略シ、山浦國清ノ家臣ヲ誘ヒ、下條・水原ノ地ヲ侵ス、是日、景虎、彈正忠等ノ戦功ヲ謝ス、

〔中山小太郎氏所藏文書〕

披見祝著候、仍、金上(盛備)同前ニ、安田(北蒲原郡)之地在陣、大儀之至、無是非次第候、

様子新保清右衛門尉一々申候條、承届祝著之至候、然者、山浦(國清)家中、其元無二申合、下條水原押詰、殊加治新保清右衛門尉よりも五十公野新發田へ手切□條之儀も、物色を出候、敷、揚河北之儀、落居程有間敷候、此所畢竟旁御馳走故候、不淺次第、難顯紙面候、彌、彼口之儀者、面々頼入之外無他候、隨而當表之儀者、甲南被及加勢候之條、彌、手堅候、春日山本意程有間敷候、條、可心易候、猶、吉左右重而可申候、謹言、

九月十四日

景虎(花押)

小田切彈正忠殿

〔伊佐早文書〕

伊佐早謙氏所藏

未申届候處ニ、來札披見祝著此事候、仍、爰許就不思儀、鋒楯別而馳走、殊更安田地(北蒲原郡)被乗捕、其上山浦衆引付、其元安田地金上□□ニ在城、堅固ニ被申付、由、誠以大慶、不過之候、

天正六年九月十四日

五八七

新保清右
衛門尉
加治ヨリ
五十公野
新發田ト
斷絶ス

天正六年九月十四日

向後之儀萬端可頼入所存候、委曲重而可申届候、恐々謹言、

九月十四日

景虎花押

小田切孫七郎

小田切孫七郎殿

〔本法寺所藏文書〕

○山城

雖未申届候、及一翰候、仍此度當國不慮之鉾楯故、金上兵庫頭、別而就、被存忠信、旁以馳走之段、誠喜悅不淺候、於向後、彌就御申通者、可爲本望候、恐々謹言、

九月十四日

景虎花押

佐瀨中務丞

佐瀨中務丞殿

〔參考〕

〔金上氏系譜〕

遠江守盛備前平六、又兵庫頭、大主ノ命ヲ奉シ、登坂將軍、關白殿下ヨリ受領セラシメ、天正十七年、伊達正宗亂入ノ節、六月五日、指上原ニテ打

金上氏系圖
津川帶刀

景虎、越後三條城將神餘親綱ヲシテ、糧米ヲ御館城ニ輸送セシメ、是日、東條惣介ヲシテコレヲ斡旋セシム、

〔志賀楨太郎氏所藏文書〕

○羽前

爰元諸軍、堪忍一圓不成候之條、其地域米之儀、神餘かゝへ申越候間、如何様にも相稼、

三千俵徴發

來月順風ナキヲ以テ速ニ船ヲ出スベシ

當月中先以三千俵可上候、心無油斷（神餘親綱）小次郎ニ申理、早々可上候、來月者順風有間敷候、

致鹽味一刻も早速可爲漕候、本庄清七郎郡下之儀者、彼仁人脚可申付候、畢竟面々稼

肝要候、爲其遣一筆候、穴賢々々、

九月十四日

景虎花押

東條惣介とのへ

十六日、甲子景勝、草間正左衛門等ノ、國內錯亂ノ爲ニ、春日山城ニ籠城シテ、戦功アルヲ賞シ、各領地ヲ宛行フ、

〔上杉年譜〕二十

赤川新兵衛分五十嵐式部分

今度錯亂之處、遂籠城、走廻之段、神妙候、依之赤川新兵衛分、五十嵐式部分充行候、彌可

抽忠信事、肝要候、仍執達如件、

天正六年

九月十六日

景勝

草間正左衛門殿

原大學分小池分

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙候、依之原大學分、并小池分充行候、彌可抽忠貞儀、肝

天正六年九月十六日

五八九

天正六年九月十六日

要候、仍執達如件、

天正六年

九月十六日

相浦主計助殿

景勝

相浦主計助

本庄美作分料所ノ内飛驒十日市村

今度錯亂之處、被糺先代之筋目、忠信感悅之至候、依之本庄美作分、并料所之内、飛驒十日市村出置之候、彌、粉骨肝要候、恐々謹言

天正六年

九月十六日

中條與次殿

景勝

計名新右衛門分

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙候、依茲計名新右衛門分充行候、彌、可抽忠節段肝要候、仍執達如件、

天正六年

九月十六日

景勝

平岡素右衛門

平岡素右衛門殿

吉田孫三郎分

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙候、因茲吉田孫三郎分充行候、彌、可抽忠信儀肝要候、仍執達如件、

天正六年

九月十六日

景勝

岩舟彦五郎

岩舟彦五郎殿

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事、神妙也、依之齋藤與一郎分充行候、彌、可抽忠義之段、簡要候、仍執達如件、

天正六年

九月十六日

景勝

塚田新八

塚田新八殿

[安田文書]〇羽

今度遂籠城、忠信不淺候、依之水間出羽分出置之候、彌、忠信可有之者也、仍如件、

天正六年九月十六日

水間出羽守分

安田治部少輔

安田治部少輔殿

○景勝、安田治部少輔ニ與ヘシ感狀ハ、日ヲ異ニスレドモ之ヲ併記ス、

十九日、卯景勝、景虎トノ和議不成立ト、戰況トヲ叙シ、横田右馬允等ヲシテ、其主蘆名盛氏トノ懇親ヲ圖ラシム、

〔相州文書〕十

高座郡 壽命院

節々被入心、書中喜悅之至候、仍此表之儀、無心許可有之候、(武田勝頼)甲州出馬、(景虎)三郎間之義、雖被執變、双方旨趣如何被聞届候哉、抛是非、去廿八納馬候、其以來府内館押詰、其外三郎隨逐之族、相抱地利、或討果、或追拂、悉成置墟候、兎角以一擬、可屬本意之條、可心易候、(蘆名)盛氏父子、彌無異儀、入魂之様、意得任入候、猶吉事重而、恐々謹言、

九月十九日

景勝(花押)

横田右馬允

横田右馬允殿○蘆名家臣

同 織部佐殿

○勝頼、景勝、景虎間ヲ斡旋セルモ、和議遂ニ成ラズシテ歸國スルコト、八月二十

八日ノ條ニ見ユ、

二十三日、庚午本庄秀綱、越後枋尾ヨリ來リテ御館城ニ入り、景虎ヲ援ク、是日、景虎、コレヲ鮎川盛長ニ報ジ、且ツ、本庄繁長トノ鬪争ヲ止メテ、共ニ己ニ歸屬セシム、

〔石坂孫四郎氏所藏文書〕○羽前

急度申届候、今度不慮之鋒楯、雖然於手前備者堅固候、殊ニ從相州之始、加勢、(輔廣)北條安藝守父子、關東衆悉參陣、其上本庄清七郎、馳來候條、本意無疑候、然而其地之儀者、(繁長)本庄與相取合不可然候、此上者、(本庄繁長)雨順與相遂無事可然候、必此儀、景虎任作意、早々本庄雨順一果、千言萬句候、於身可爲祝著候、猶様體重而可申届候、恐々謹言、

九月廿三日

景虎(花押)

鮎川孫次郎殿

○本書宛名關ク、今、歴代古案ニ依リテコレヲ補フ、

〔越後治亂記〕中

九月、中旬に、枋尾の大將本庄清七郎、世中いかにと見合たりけるか、關東勢雲霞のとく、樺澤に充滿たるよし聞へければ、手勢二千餘りにて、在所を出、御館へそ急きける、猿毛の城代上野九兵衛、枋崎濱に出向へ防けれ共、敵は大勢也、俄の事にて味方は無

天正六年九月二十三日

五九三

北條輔廣
父子景虎
ノ應援ニ
參陣ス

上野九兵

衛柿崎濱
ニテ秀綱
ヲ要撃ス

長岡縫殿
助
神保隱岐
守

上口能登
加賀別意
ナシ
河田長親
入魂

本庄秀綱
館城ニ入
ル
岩戸ヲ始
メ味方ノ
地事無シ

勢也ければ、打と、めん事不叶、おくれし者共十四人討取て、九兵衛は城をふみ放れ、遠働詮なしとて引退は、清七郎は無恙御館にこそは入にけれ、清七郎か味方に参たる印なればとて、頸城郡へ出、爰かしの在々を放火してけり、偕又、枳尾の城へは押として、長岡縫殿助、神保隱岐守兩人を被遣けるか、隱岐は城を落て、會津の方へ除にけり、縫殿助壹人踏留て討死す、○二十四日、景勝書狀參看、

二十四日、辛未、景勝、加能越方面等ノ状勢ヲ、坂戸城將深澤利重等ニ報ジ、且ツ、敵状及ビ同城内備付鐵砲ノ數ヲ答報セシム、

〔志賀榎太郎氏所藏文書〕○羽前

其以後、其元様體無其聞得候、重々無心元迄候然者、爰元備涯分手堅申付候、上口能州賀州如何ニも無別意候、殊更河田豐前守別而入魂有之而、萬端意見候、此義（儀）も押詰爰元へ打越意見可有之候由條、可心安候、隨而其地萬事在城之者共、不自由之由申越候、萬端咲止ニ候、自以前度々如申越、甲州賀勢（加）いゝん候や、畏候、早々有助勢、其表之凶徒押拂へらしと念願此事候、其元重而南衆置候由、以前申越候つ、其已後敵之手成いゝん候や、細々注進待入候、爰元館之事、此間も一向うちとて、殊更無人數ニ候、清七郎（秀綱）爲賀勢（加）興（行）して越候へ共、是も一向ニ無動ニ候、始岩戸何も味方地無何事候、是又、可心

安候、雖無申迄、其地用心氣遣專要ニ候、以前（煙）ゑんせう差越候つる、參著候哉、押詰藥合

重而可差越候、猶萬吉重而可申候條、早々謹言、

猶々、其地（鐵砲）てつそうなにと候や、日記（早）さふ差越へく候、以前（登坂）神兵衛ニ差添こし候

者共、于今於其元相稼候や、又在所へこへ、其地ニ在城無之候や、早々可申越

候、以上、

九月廿四日

景勝（花押）

深澤刑部少輔殿

樋口主水助殿

登坂與五郎殿

栗林治部少輔殿

樋口主水
助
登坂清忠
栗林治部
少輔

武田勝頼、越後ヨリ甲斐ニ班軍シ、是日、景勝ニ答報ス、尋デ、景勝、コレヲ音問ス、

〔歴代古案〕○羽前

珍翰快然、如承意去夏以來、以不慮之仕合申談、本懷候、和平之義（儀）種々雖及疎意候、互ニ條々有御存分、無落著候、歎敷候、歸陣以後、彌其備堅固之由、肝心候、上口無相替儀、追本意之形候、可御心易候、委細小山田左衛門大夫可申候條、不能具候、恐々謹言、

和平成ラ
ザルヲ遺
憾トス

天正六年九月二十四日

九月廿四日

上杉彈正少弼殿

勝頼(武田)

五九六

貴札拜見過當之至候、仍、和平之儀種々雖被申唱候、相互ニ有御存分、時宜無落著候、歎
ケ敷被存候、勝頼歸陣以後、御備堅固之由、肝要至極候、當方も上日本意增長候、可被易
賢慮候、委曲雇兩口上候條、不能具候趣、可得御意候、恐惶謹言、

小山田左衛門大夫

小山田信茂

九月廿三日

春日山

貴報人々御中

信茂

〔歷代古案〕

〇羽前

御札快然候、抑、和平之儀種々雖媒介被申候、相互有御存分無落著候事、歎敷被存候、誠
當方歸陣以後、音絶意外千萬候、仍、貴國御備追日被任、御存分之由、肝要至極候、上口之
儀無別條、勝頼本意增益候、可御心安候、委曲雇彼口上候條、不能具候、恐々謹言、

九月廿三日

新發田尾張守殿

新發田長敦

信茂(花押)

竹侯慶綱

竹侯

三河守殿

齋藤

下野守殿

御報

〔歷代古案〕

〇羽前

御札快然候、御和平之儀種々雖媒介被申候、相互有御存分、無落著候事、歎敷被存候、誠
當方歸陣以後、音絶意外千萬候、仍、貴國御備追日被任、御存分之由、肝要至極候、上口
之儀無別條、勝頼本意增益候、可御心安候、委曲雇彼口上候條、不能具候、恐々謹言、

十月朔日

新發田尾張守殿

竹侯三河守殿

齋藤下野守殿

御報

〔歷代古案〕

〇羽前

貴翰拜見忝存候、仍、御和平之儀種々雖被申唱候、相互御存分有之、時宜無落著候、歎ケ
敷被存候、當方歸陣以後、御備被任、御存分之由、肝心候、上口無相替候儀、勝頼本意增益
候、此等之趣、宜預御披露候、恐惶謹言、

天正六年九月二十四日

五九七

春日信達
景勝ノ音
問ヲ答謝
ス

天正六年九月二十四日
(朱書)天正六
九月廿三日

(長坂)光堅

新發田尾張守殿
竹俣三河守殿
齋藤下野守殿

○勝頼、越後ニ入ルコト、六月二十二日ノ條ニ、景勝、景虎ノ和平ヲ斡旋スルヲ、六月二十九日、八月二十日ノ條ニ、甲斐ニ班軍スルコト、八月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔上杉年譜〕二十

勝頼北條氏ノ來攻ヲ防ガンタメニ越後ニ在陣ス

天正六年九月下旬、甲州勢、去ル六月中ヨリ大出雲原ニ在陣スト雖モ、新發田、齋藤、竹俣カ計略ヲ以テ、勝頼和睦整ヒ、誓盟ヲ御取カハシ、早速ニ歸陣シ玉フヘキ事ナレトモ、若シ小田原勢ヲソヒ來リ、景虎ニ後援アラハ、味方ニ助勢アラシタメニ、永々御在陣ナリ、然レトモ、小田原勢少々出陣シテ、樺澤ニ馬ヲ寄テ、空シク糧米ヲ費シタルマテニテ、差シタル儀モ有マシト校量シ、殊ニ寒氣ニ向ヒ、雪中ニモ至ラハ、兵馬モ出張叶フマシトテ、士卒ヲ引ハラヒ、歸陣ナリ、

〔越後治亂記〕中

九、關東勢上田迄押寄し事
略○上 關東勢は、頸城郡へも打入す、樺澤と言所へ打廻り、古城を拵、楯籠、徒に日を送、勝頼此由聞給へて、我等か推量少も違間敷とて、景勝公へ和談有之、九月下旬に甲州へ退給ふ、

二十六日、西、癸景勝、復、景虎ト、大場口ニ戰ヒテ、コレヲ破ル、

〔上杉家古文書〕

新發田重家河田軍兵衛一騎カケス

一昨廿六日、向大場口ニ、景虎、被爲出馬候キ、則、新發田(重家)因幡守、川田軍兵衛ヲ始興して、一騎ウケム乗合、其まゝ、追崩、宗ノ者共三百餘討執候、可心安候、上下略、全文ハ、二、十八日ノ條ニ收ム、

九月廿八日

景勝(花押)

小川左衛門

小川左衛門殿川井城守將

○景勝、大場ニ戰フコト、七月二十七日ノ條ニ見ユ、

二十七日、甲、戊武田勝頼ノ援兵、越後妻有ニ到着シ、將ニ坂戸城ニ入ラントス、仍リテ、景勝、是日、同城將小森澤政秀ヲシテ、犬伏城ニ移ラシメ、コレニ要スル人脚ヲ直峰ニ命ズ、

〔志賀楨太郎氏所藏文書〕前

〔披見〕 仍、其元甲州賀勢之儀無之之由、萬々無心元候、乍去其地、手拔□相加へ、日々及仕合ニ、敵數多打取之由、其聞得候、萬々大慶心地能候、其以後其表之敵

天正六年九月二十六日 二十七日

天正六年九月二十七日

六〇〇

陣模様如何候哉、具重而注進待入候、扱又此表無相替儀候、可心安候、(妻有)從甲賀勢打出候由申越候、いらん共其表へ打出候様成之度候、隨而其地之者共、日々相稼、何も遂籠城之由、無比類候、何よも此段可申届候、猶吉左右細々注進簡要候、謹言、(肝)

景勝(花押)

深澤利重

樋口主水

助

登坂清忠

同神兵衛

栗林政頼

〔小森澤文書〕

京東

今度甲州衆罷出ニ付而、在所明之相渡之由神妙候、就其有所之事申越候、近當之儀候、(東頸城郡松代村)條、犬伏之地へ可相移候、此由彼城衆へも申遣候間、其心得簡用候、次、人脚之事直峰へ申付候、此段可心安候、謹言、

九月廿七日

景勝(花押)

小森澤刑部少輔殿

在所ヲ甲斐ノ援兵ニ引渡ス

○景勝、政秀ヲシテ、妻有方面ヲ警備セシメ、甲斐ノ來援ヲ待タシムルコト、八日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

犬伏城

〔北越略風土記〕

八

古城部

頸城郡

犬伏城

松山郷犬伏村あり、城主年歴共詳ならず、

二十八日、(乙亥)景勝、越後川井城ハ、上田口ノ要衝ニ當レルヲ以テ、小川左衛門ヲシテ、田中某ト議シ、コレヲ固守セシム、

〔上杉家古文書〕

追而、替儀候者重而以飛脚可申遣候、其元之様子共、暮々無心元迄候、此間登坂下候つる、定其元可罷通候以上、(中頸城郡春日村)去飛脚定而可爲參著候、其許之模様無心許迄候、一昨廿六日、向大場口ニ景虎被爲出馬候キ、則新發田(重家)因幡守川田軍兵衛ヲ始興して、一騎ウケル乗合、其まゝ追崩、宗ノ者共三百餘討執候、可心安候、自何川井其地無心元迄候、上田口之うあめよて候間、田中有談合、兩城堅固ニ可相抱事簡要ニ候、弓鐵砲越度候て、色々思候得共、路次不成候間、無念迄候、其元苦勞共察入候、委者先書ニ申遣候キ、様子ニ其分別尤候、恐々謹言、

天正六年九月二十八日

六〇一

川井ハ上田口ノかなめ

天正六年九月是月

(天正六) 九月廿八日

景勝(花押)

六〇二

小川左衛門殿○川井城守將

是月、北條氏輝、北條輔廣、河田重親等ヲ、樺澤城ニ留メテ、坂戸城ニ備ヘ、北條景廣・篠窪出羽守ヲシテ、御館城ニ赴キ、景虎ヲ援ケシメテ、關東ニ退却ス、

〔歴代古案〕五羽前

然而、北丹上府、定様々武略不可有際限候間、少有油斷者不可有曲、萬端氣遣用心、兩地之備片時も無手透、可被申付事、尤所仰候、(旗持)之儀、(往復)ワうふく之さかい、是又節々飛脚使を被差越、被入念可給候、一兩日以前、北丹人衆上府候過分之人衆も無之候、五三日在陣候へ共、珍行無之候、○上下略、全文ハ、十月十五日ノ條ニ收ム。

(天正六) 十月七日

(山浦) 國清(黒印)

遠藤宗左衛門殿○猿毛城將

富所大炊助殿

上野九兵衛殿

林部三郎左衛門殿

長福寺

遠藤宗左衛門 富所大炊助 上野九兵衛 林部三郎 左衛門 長福寺

〔松平義行所藏文書〕一坤

色家證文之内

態預使大慶候、仍、爰元早々可有參府之處、其庄爲仕置、(北條氏邦)安房守殿喜多條安藝入道相留置、任其意于今其地在陣、(肝)簡要候於此上も、安藝同前ニ被、遂越年來春本意之所可相議事、任置候如之各雖、可爲苦勞候、其儘在陣、肝心候、隨而祝儀樽肴、并小袖壹重到來、目出喜悅候、猶、重而可申候、恐々謹言、

(天正六) 十月十日

景虎判○以下斷簡

〔景勝一代略記〕

上田ニ在陣之北條(氏輝氏邦)兩大將、徒ニ長陣いかゝと思けん、御館へ加勢

の大將として、篠窪出羽守三千餘、北條丹後同心(景廣)よておたち(館)へ差遣、上田ニ北條安藝守、かほの澤古城再興ノ指置、兩北條は關東へ歸陣也、去程ニ、坂戸かほの澤互ニ守合、冬中送、坂戸ニハ栗林肥前守深澤和泉宇津江九右衛門籠居、九右衛門は其地に御料所有て、代官被仰付、去四年罷越、兵糧二千石餘坂戸へ入、各配當仕、九右衛門も足輕百人餘拘度々走廻仕、度々御書なと被下、樺澤に安藝守居城なれ共、自分の人數計にて不勢なれば、其冬中門出もならず、お館へ通用も不叶ノ日を送也、

〔越後古實聞書〕

關東勢は、勝頼を無心元思ひ、頸城之郡へも不入、大事に思ふは斷り也、九月末にあれば、雪つもらぬ内に退陣して、來年馬の足立次第進發可然とて、關

天正六年九月是月

六〇三

景虎來春マテ持重ヲ策ス

宇津江九右衛門

降雪ノ期近ツキシヲ以テ關東勢歸ル

勝頼景虎
ヲ見放ス
春日山城
ノ糧道

東より來る四人の大將相談して、人數三千引分、北條丹後守指副、老功之者として篠窪出羽守を付て、御館へ遣はし、關東勢皆々歸る、本庄清七郎(秀綱)も、關東勢歸る由聞、後悔する、關東方様子皆々相違成故、勝頼(武田)も御館見放し給へはとて、御館へ味方之者共、ひるがへて御城方へ入、在郷ノ御館方へ心寄るに、先前々御城へ米石つゝくるは、春日山西に當り、(有馬川カ)あるまくわとり(取)のふほとまり(泊)、此四ヶ村也、

〔越後治亂記〕中

十、本庄清七郎御館に入事、關東勢歸陣の事

○上文ハ、九月二十三日ノ條ニツミクク、

扱又、上田へ寄たる關東勢は、勝頼をあやふみて、頸城の郡へも入

得ず、徒に日を送りけるか、九月も末に成ぬれば、雪の積らざる内に、先々退陣して、來春馬の足立次第に、又こそ進發するへけれど、人數三千引分、北條丹後守を大將として、老功の者成とて、篠窪出羽守を指添て、御館へ遣し、樺澤の古城には、安藝守を詰置、關東勢歸りける、坂戸、樺澤の兩城互に守合て、今年は冬を送りける、彼坂戸と申は、小城成と言共、要害も淺間ならず、殊に名を得し栗林深澤か籠たる事成は、左右なふ落へきとは思はれず、剩へ宇津江九右衛門と言し者は、能書にて文學大才也、足輕をも百餘人召拘て、如形立廻りければ、景勝御感有之度々御書を被下けるとかや、今度小田原加勢大軍成といへ共、仕方惡敷見へしゆへ、勝頼も歸り給ふ、小田原勢も替る

宇津江九
右衛門ハ
能書文學
ノ大才

甲相兵ノ
去來越後
ノ形勢ヲ
變ズ

〔上杉年譜〕二十

冬十月始メ、去ル八月下旬、景虎ノ援兵ニ、北條氏政ヨリ舍弟北條

新四郎ヲ軍將トシテ兵士ヲ遣スト雖モ、御館へモ入得スシテ、樺澤ノ古壘ニ楯籠、上

田邊へ少々兵士ヲ出シ、日々戰へトモ、差タル事モナク、在陣スル處ニ、甲州勢退陣ス

ルト聞テ、北條丹後守ニ兵ヲ差副へ、館エ遣シ、新四郎ハ小田原ニ先歸陣スルトナリ、

樺澤壘ニハ、丹後守カ父安藝守河田伯耆守ニ、小田原勢少々加へ殘シ置テ、是ヲ相守

ラス、

〔参考〕

〔新編會津風土記〕

百十 外編越後國魚沼郡之 城迹 樺野澤村ヨリ申酉ノ方山上ニ

アリ、登ルコト二町四十間、南ハ大澤村ニ屬ス、樺澤城ト云、西北ノ方山ニ連リ、北ニ溪

流繞レリ、頂ニ本丸ノ迹アリ、東西三間半、南北三十一間、少シ下リ帶曲輪アリ、幅八間、

周廻三町、其下ニ平術ノ場段段アリ、大手口ノ左右ニ看樓ノ迹アリ、大手口ノ石垣土

墮居殘レリ、又、當時市町ノ名ニヤ、櫻町、古町、町屋敷ナト云字アリ、丑寅ノ方四町三十

甲州勢退
陣

樺澤城

鞠子城
城資茂ノ
居城
景勝誕生
ノ地

天正六年十月四日

六〇六

間、麓ニ東西一町、南北三町二十間ノ馬場迹アリ、相傳テ治承ノ頃鞠子城トテ、城太郎資永カ舍弟城二郎資茂カ居城ト云、其後上杉景勝ノ父長尾越前守政景住シ、景勝モ此城ニテ生レシト云、其時袍衣ヲ納メシト云所、城ノ東一町十間餘ニアリ、永祿七年、政景、信州野尻ノ池ニテ横死シ、家臣栗林次郎左衛門後肥前守ト改メシト云鐵上野助兩人、景勝ノ後見トシテ此城ヲ守ル、景勝、春日山ノ城ニ移リシ後ハ、栗林肥前守居住シ、天正六年、亂ノ時、肥前守此城ニテ北條方ノ兵ヲ防キシコト、夏目定房カ記ニ見ユ、慶長三年、景勝、奥州會津ニ移リ、廢城トナリシト云、

十月小己卯朔

四日、午、壬河田長親・長尾景直、越中今泉城ヲ守ル、織田信長、齋藤新五郎ニ命ジテコレヲ攻撃セシム、長親等、邀撃シ、却ツテ敗退ス、尋デ、信長、毛利河内守・坂井越中守・森長可等ヲ遣シテ、新五郎ニ加勢セシメ、且ツ、新五郎ヲシテ、神保長住ト相議セシム、

〔黃薇古簡集〕六

鈴木越後守
齋藤次郎右衛門尉
神保長住

書狀并鈴木越後口上之趣、聞届候、(長親)河田至大田、面罷出候由、幸之儀候間、此爲可相果、重而毛利河内守・坂井越中・森勝藏(長可)以下遣之、可相談事專一候、次、齋藤次郎右衛門尉別而可抽忠儀候而、神妙候然者、朱印之儀遣之、何も神保越中守相談尤候、猶鈴木越後守可

鈴木越後守

申候也、

(天正六)十月十一日

齋藤新五郎殿

(織田)信長(朱印)○印文、天

注進之趣披見候、仍、去四日、(十月)河田豊前権名小四郎令一味、相催一揆動候處、則及一戰、切崩、三千餘人討捕候條、粉骨之段無比類、感情不淺候、誠天下之覺可然候、彌、可勵戰功事、(肝)簡要候也、

十月十一日

齋藤新五殿(耶脫下同ジ)

信長(黒印)○印文、

織田信忠
新五郎ノ
戰功ヲ褒
ス
佐藤六左
衛門尉

尙々、寒天之時分、一入苦勞察候、注進之趣披見候、仍、其面敵取出候處ニ、即時覃一戰、得大利、首三千餘打捕之由、寔無比類仕合令大慶候、彌、無越度様可被申付事專一候、尙、自是爲加勢毛利河内守ニ相添森勝藏、坂井越中守・佐藤六左衛門尉差遣候、重而追々可申付候、切々注進待入候謹言、

十月十二日

(織田)信忠(花押)○織田信

天正六年十月四日

六〇七

天正六年十月四日

齋藤新五殿

六〇八

注進之趣委細聞届候、其面事、今度切々動、誠心地能、天下之覺、旁以感情不淺候、然者其元可相動所ニ、能々申付候者、早及寒天之間、加勢之族相談急速歸陣可然候、神保越中守是又可相談候也、

十月廿八日

齋藤新五殿

信長黒印○印文、天布武

今泉城

〔甫庵信長記〕 角テ、十月五日、越中國ニ下向セシ齋藤新五郎ハ、河田豊前守椎名小四郎、楯籠シ今泉城ノ近邊九月下旬ニ相働、民屋令放火、翌日未明ニ罷退候處ヲ、河田椎名節所ヘ引懸、人數ヲ出シ慕候ト云共、無左右節所ヲ差越、平地ニ出テ引返及一戰、數刻相戰テ終ニ切崩、究竟ノ兵五百六十討捕、其競ヲ以國中ノ人質等取固、神保安藝守ニ渡置申旨、飛脚到來シテ申ケリ、

〔参考〕

津毛城
村田縫殿
助

〔越登賀三州志〕鍵藁餘 信長公、齋藤新五ヲシテ、越中ヲ擊ンコトヲ命ス、此時、津毛城ニハ、椎名小四郎アリ、景勝ヨリ副將トシテ、村田縫殿助ヲ置ク、按ルニ、椎名ハ上文ニ、景勝ヲ恐レ、三戸田ニ、

新保氏越
中ヲ平均
ス

置ル、然ルニ越後ノ將村田ト居スハ、新五ノ來ルヲ恐レ、又景勝ニ降リ、屬スルナラン、此故ニヤ、松倉城ニ據ルコト、下文ニ見ユ、冬十月、新五、信濃美濃二國ノ銳甲ヲ率キ、飛州ヲ經テ、楡原松谷ヘ抵ル、椎名等之ヲ聞テ、八日ノ夜半、津毛城ヲ出テ、松倉ニ入ル、新五ハ、斯トモ知ラス、津毛城ヲ圍ムニ空城ナレハ、即チ神保越中守ヲ置キ、近村ニ縱火シ、今泉城、河田ノ郡ニ在リ、此時、椎名ヲ攻取リ、齋藤喜右衛門、同忠兵衛ヲシテ守ラシム、北國太平記ニハ、此時、今泉、陷チ、翌曉、新五軍ヲ歛メ、守返シ、越士亦多ク之ニ死スト云、時ニ、景勝ノ兵、新庄ヲ發シ、荒川ニ戰ヒ、兩軍共ニ死士多シ、因テ、齋藤兵ヲ引テ、太田本郷城ヘ入リテ、景勝ノ兵之ヲ攻ム、城兵防クニ堪ヘス、并田城ニ保ミ、城主、齋藤一鶴ト併守スト云、〔三壺記〕二 其年九月、信長公御上洛まします所ヘ、越中ニ一揆起リ、上方ヘ切て上る由聞へければ、齋藤新五郎を越前ヘ被遣、早々罷下り可討よし被仰處に、越前并能美江沼郡の大將共、殘所なく馳參、魚津の此方迄發向す、一揆の大將、椎名小四郎と申は、尊氏の時分は、椎名孫六といふ、其孫なり、越後より河田豊前といふ強兵を遣し置、此者共所爲なれば、上方勢は此度滅却せんと、汗水に成て終には皆々討亡して、神保に越中平均に相渡、越中阿尾の菊地も相順ふ、此合戰別て越前衆骨折、御滿悅に被思召けり、

六日、甲申、樺澤城ニ據レル北條氏ノ兵、坂戸城ヲ攻メ、清水藤左衛門、邀撃シテ功アリ、是日、景勝、コレヲ褒ス、

天正六年十月六日

六〇九

天正六年十月十日

〔歷代古案〕八 羽前

今度錯亂之處、於其元相稼之段、殊其地敵取懸處、數多討執之由、神妙之至候、猶自今以後、彌可抽忠信候、何様靜謐之砌、急度可感之者也。

(天正六) 十月六日 御朱印

清水藤左衛門との

〔上杉年譜〕二十

(六日、誤) 天正六年十月廿八日

上田ノ魁將清水藤左衛門、此擾亂ニ御味方

ニ屬シ、相稼特ニ樺澤ノ敵兵其地へ働ク砌リ、取合セ、敵討トリ、勝利顯然タリ、彌其功

ヲ思シ召シ、感狀ヲ賜フ、

〔小野寺文書〕〇上

小野寺刑部少輔、今村傳四郎殿、江呈候武功覺書寫

略〇上

田中村ノ
戦闘

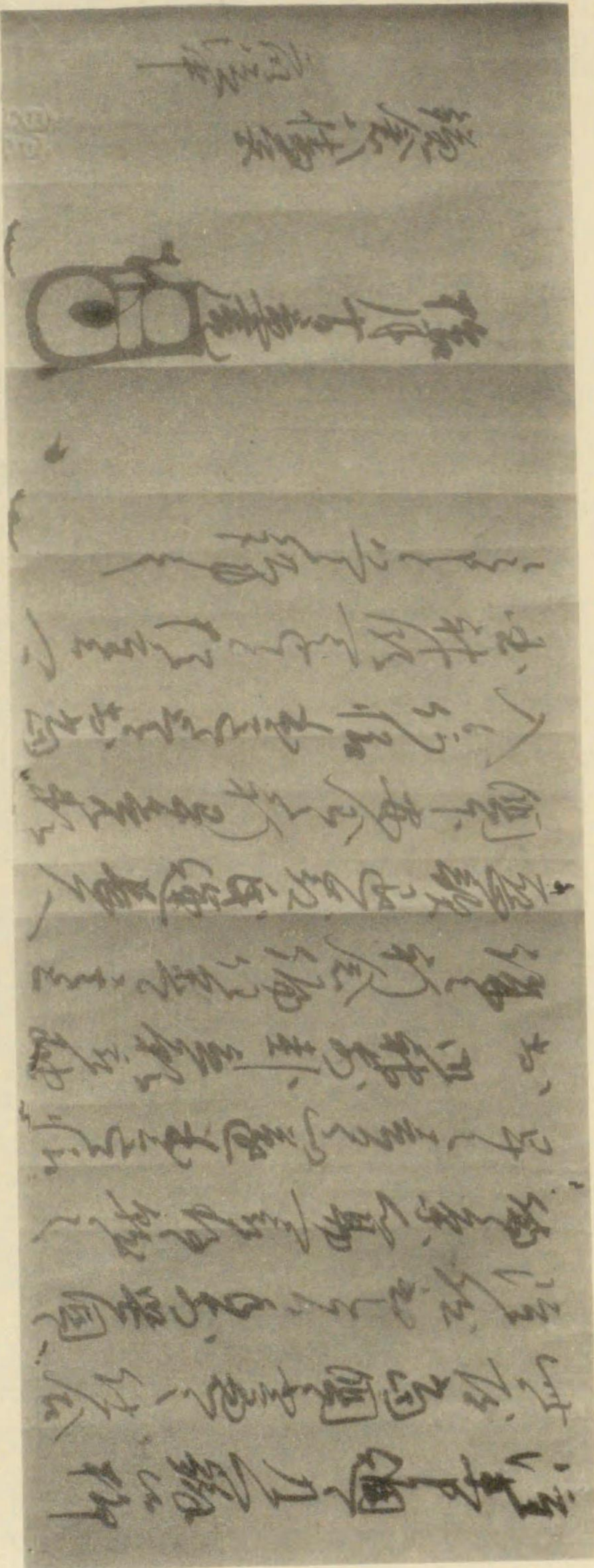
一同所か、(樺) 澤之城ニ、(北條輔廣) 喜多條安藝守在陣之時分、

而鑑仕候事、沼田衆小暮嘉兵衛、喜多條能登存候事、〇年月詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

十日、子、戊 景勝、小倉伊勢守、河田軍兵衛ヲ越中松倉將城、河田長親ニ遣シテ、參陣ヲ

促ガサシメ、且ツ、長親ノ臆意ヲ探報セシム、

相模鶴岡八幡宮所藏



上杉景虎書状

〔上杉年譜〕二十

歸陣ヲ急ガシム

態及脚力候、昨日如申含、爰許三日共於滯留者、敵地江相聞可及其備候條、一刻茂急可働成候、證人之義急度有催促、明日夜中成共可引著候、定而豐前守(河田長親)可爲油斷之間、堅可申斷事專用候、能々豐前守臆意承届、明日歸路待入候、謹言、

十月十日

景勝

小倉伊勢守殿

河田軍兵衛殿

○河田長親、春日山城ニ參陣ノ爲メ、兵ヲ率キテ能庄ニ至ルコト、十二月十六日

景虎、戰捷ヲ相模鶴岡八幡宮ニ祈ル、

〔鶴岡八幡宮文書〕模〇相

雖未申通候、及一翰候、抑此度當國不慮之仕合、雖然至今日、手前堅固ニ備候条、心易可被存候、就之早々春日山遂本意候様ニ、於御神前卦(掛)立願、被抽誠々祈念、偏任置候、其上怨敵退散(武)氏運長久、國下安全之祈、畢竟頼入候何様本意之上者、於(越後)當國神領可進候、猶重而可令申候、恐々謹言、

天正六年十月十日

六一一

天正六年十月十一日

(天正六) 拾月十日

(相模) 鎌倉八幡宮

景虎(花押)

六一二

十一日、己小森澤政秀、越衆徒中後市之澤ヲ攻取シ、鈴尾城ニ迫ル、景勝、コレヲ褒シ、且

ツ、用金ヲ送ル、尋デ、政秀、信濃板鼻飯山等ヲ攻ム、

〔小森澤文書〕京東

去十一、市(中魚沼郡)之澤乘取□□□□可然儀候、鈴尾集城計ニ成置□□□□彌、無油斷、其元仕置等

可相□□□□(肝)簡用候、然者不如意□□□□各うとへ申越候間、黄金貳拾兩遣之候、猶皆々々

とより可申候、謹言、(天正六)(五カ)十月十一日

十月十一日

小森澤刑部少輔殿

景勝(花押)

黄金二十兩ヲ贈ル

其地相移ニ付、而飛脚到來、然者向鈴尾相働、集城計ニ成置之段、(肝)簡用候、此上彌相稼、可付落居事專一候、隨而其方在所之義、清水うとへ申付候條、城中へ相移、用心已下清水可令談合事、尤候、猶各所ヨリ可申越候、謹言、

十月十五日

景勝(花押)

小森澤刑部少輔殿

○景勝、政秀ヲ犬伏城ニ移ラシムルコト、九月二十七日ノ條ニ見ユ、

〔小森澤文書〕京東

□□□□相拘候、板鼻□□□□御成□□□□乘取之段、誠□□□□敵數多討捕之由、心□

□□□□談合候て、其地備堅固□□□□用所有之、而使可□□□□遣候、猶萬吉重、而可

申□□□□(候謹言)

廿四日

景勝(花押)

小森澤以下斷簡

飯山ニ戦フ

去廿七、向飯山相動□□□□放火、殊敵慕候處、押返、數十人討捕申候、心地好次第

候、彌□□□□堅固之備專一候、此度之□□□□近□□□□(地)下人成共付、勇相催□□□□候

□□□□義尤候、爰元於備者、曾□□□□心□□□□候、近日中ニ御館可討果候□□□□候

間、如何ニも可心安候、誠□□□□筋目被抽忠信事、□□□□本意之上手寄之

地□□□□之□□□□此上猶以可被勵忠功□□□□萬吉重、而候、謹言、

追而、金子所(二郎右衛門)へも遣直書候間、相届候、彼者談合、堅固之備、(肝)簡心候、扱又、其方證人之義、

天正六年十月十一日

六一三

スニ及バ
ズ

天正六年十月十二日 十三日

出事無用ニ候其段上田へ申越候已上

六〇〇〇〇〇

景勝(花押)

六一四

小森澤刑部少輔殿

十二日、寅景勝、樺澤城ニ在ル河田重親ニ、來附ヲ勸ム、

〔歷代古案〕一

(羽前)

急度申遣候其元へ安藝入道亂入申付而、同心之由其聞候、仍其方事ハ、

(河田長親)

別而懇意候上者、定而別儀有間鋪候得共、當意館相之存候間不苦候、今度如何共於其

許被勵忠信者可爲祝著候、委細三人之者方へ申越候條、定而可申談候、謹言、

(天正六)
十月十二日

景勝

河田伯耆守殿

十三日、辰、辛、枋尾城將本庄秀綱ノ兵、下倉城及ビ三澤ヲ攻ム、下倉城將佐藤平左衛

門、多功豊後ト共ニ防戦シテ卻ク、是日、景勝、コレヲ褒ス、

〔別歴代古案〕九

如注進者、(枋尾カ)

類候、其元石(峠)とけ押拂之由、是又心地能候、彌多功談合候て、堅固之備專一ニ候、扱又、

石峠ノ敵

壘ヲ押拂

多功加勢

南雲
大平

爰元備無相替儀候、何も無別意、何事ニおゐても走廻候條、可心安候、隨而三澤ニても、

敵數多打取、手堅相抱之儀申越候、從其許多功所自兩地も人數加勢申候由、是亦令喜

悅候、猶萬吉重而謹言、

猶々其地者共、南雲、大平ヲおしめ、いつとも相稼之由、誠ニ神妙之至ニ候、何様本意

之上、いつとも急度可引立候條、此由可申聞、以上、

(天正六)
十月十三日

景勝

佐藤平左衛門殿

〔上杉年譜〕二十

天正六年十月三日、上田下倉ノ將士佐藤平左衛門ニ御書下サル、

枋尾本庄清七郎カ與黨、下倉ニ取掛ル所ニ、一戰ニ及ヒ、敵數百人討トルノヨシ、注進

ニ依テ感書ヲ賜ヒ、其上多功豊後ト相儀シ、石峠ノ敵壘ヲ押ハラフ由聞ヘシ、是又、忠

信ノ至ナリ、彌多功ト示シ合セ、堅固ノ備專用タルヘシ、三澤ノ地ニテモ、敵數多討ト

ルノ由、其節多功ヨリモ加勢ヲ出ス旨、御喜ヒナサル、

十五日、巳、北條景廣、越後府内ヨリ、其居城北條ニ還ラントス、山浦國清コレヲ探

知シ、猿毛城將遠藤宗左衛門尉等ヲシテ、旗持城將佐野清左衛門尉ト共ニコレ

ヲ要撃セシム、是日、景廣、府内ニ退キ、景勝、清左衛門尉ノ防戦ノ功ヲ褒ス、

天正六年十月十五日

六一五

天正六年十月十五日

〔歷代古案〕

五羽前

切書披見候、仍木下之地御落著候、今度忠信被申候上、譜代名跡無取立、其上數年相違候本領迄安堵、誠各不忘名利、當上様御芳志不淺候、能々分別簡要候、然而北丹上府定様々武略不可有際限候間、少有油斷者、不可有曲、萬端氣遣用心、兩地之備片時も無手透可被申付事、尤所仰候、(旗持)之儀、(往復)之儀、是又節々飛脚使を被差越、被入念可給候、一兩日以前、北丹人衆上府候、過分之人衆も無之候、五三日在陣候へ共、珍行無之候、如聞者近日被下候由候、至于其分者御館之儀、彌難相續候歟、自然北丹被下候者、(旗持)もち前後ニおゐて、如何共擬候而可然候歟、但大軍之儀ニ候間、結句大切候條、能々見たり尤候、千言萬句其地之仕置堅固肝心ニ候、恐々謹言、

追而、煩于今然々與無之候間、以印申候、珍儀候者、節々注進尤候、以上、(天正六)十月七日、(山浦)國清(黒印)

遠藤 宗左衛門尉殿 ○猿毛 城將

富所 大炊 助殿

上野 九兵衛殿

林部 三郎左衛門尉殿

大平 富所大炊 助 上野九兵衛 林部三郎左衛門尉

長福寺

〔歷代古案〕

六羽前

源五殿へ差越候注進狀、具ニ見届候、今度丹後守其地へ取懸候處、堅固ニ相抱、及防戦之由、奇特神妙候、依無心元、先日人數差越候キ、定可參著候、然者今朝陣拂之火先相見、人數爰元へ越候條、其地之義、(儀)先以心安候、雖然晝夜無油斷之様、用心等可申付候、段簡要候、猶萬吉重而謹言、

追而、西村隼人佐、同五郎左衛門近藤、甕二郎左衛門、於其元相稼候由、神妙ニ候、此由能々可申聞候、以上、

十月十五日 ○上杉年譜 五トス、

佐野清左衛門殿 (尉脱)

西村隼人 同五郎左衛門近藤 甕二郎左衛門 戰功アリ

〔上杉年譜〕

十二

今度北條丹後守被相働之砌、赤尾入道付初鎗候處、無比類候、來春者地方急度可出之候、彌奉公肝要候、謹言、二十八日、

十月廿日

直江與兵衛 信綱

池浦喜右 衛門赤尾 入道ニ初 鎗ヲ付ク

天正六年十月十五日

天正六年十月十五日

池浦喜右衛門殿

六一八

○北條景廣、越後館城ニ入ルコト、九月是月ノ條ニ見ユ、景廣、再ビ旗持城ヲ攻撃スルコト、十二月二十八日ノ條ニ見ユ、

羽前伊達輝宗、越後ヲ侵ス、是日、織田信長、輝宗ノ將遠藤基信ニ、越中平定セルヲ以テ、越後ヲ攻撃センコトヲ答報シ、且ツ、輝宗ノ越後侵入ヲ謝シ、續テ進撃センコトヲ望ム、

〔性山公治家記録〕

(天正六) 十月癸亥、小信長(織田)公ヨリ越後御働註進ノ御返答トシテ、御書并

ニ、大津傳十郎長昌ヨリ、遠藤山城基信ヘノ返狀到來ス、左ニ載ス、信長公ノ御書不傳、

芳札之旨令披露被及御返答候謙信遠行以來、至越後御働、端々破却之由、可然候從、此方越中表被出勢、遂一戰、敵數千人討捕、一國平均候、然間、越後之儀、即時可被加退入治候、其口之事、御馳走肝要候、委細小笠原殿可在傳達候、恐々謹言、

大津長昌

(天正六) 十月十五日

遠藤山城守殿(基信)○伊達輝宗宿家臣

右越後御働ノ事、去年閏七月、信長公ヨリ越後ノ輝虎入道謙信惡逆ニ就テ、誅伐ヲ加

輝宗越後ノ支城ヲ攻取ス

ラルノ間、本莊(雨)南順齋御相談、御粉骨專一ノ旨御書ヲ贈ラル、時ニ公、相馬表御在陣、其後道祐君卒シ玉フ、彼此故アリテ越後御出馬延引シ玉フ、然ルニ當三月、謙信卒去セラル、此時一戰ヲ勵マルヘシト、越州ヘ御出馬、支城所々攻メ拔キ玉フ、因テ御書ヲ以テ信長公ヘ註進セラレ、遠藤山城基信モ、大津傳十郎長昌マテ書狀ヲ以テ注進ス、

越後御出陣、御歸陣ノ月日、并ニ御戰ノ様子等ハ不傳、此年越後御出陣ニ就テ、相馬御戰ノ事、亘理兵庫頭殿元宗、同源五郎殿重宗父子ヘ命セラル、元宗父子伊具郡ニ出張シ、屢籌策ヲ運シ、一日嶋田村ノ内日高ノ地ニ於テ戰ヒ、大ニ敵陣ヲ破リ、討獲ル首數級ト云云、

○伊達輝宗、越後ニ侵入スルコト、他ニ所見ナシ、

十六日、辰、壬景勝、坂戸城將士ノ戰功アルヲ以テ、宇津江小三郎ヲ褒シ、增岡甚四郎ニ領地ヲ宛行ヒ、長崎彦四郎等ニ、國內平定ノ後、三千匹宛ノ地ヲ宛行フコトヲ約ス、

〔上杉年譜〕二十

今度錯亂之處、其地遂籠城、走廻之段、神妙至候、彌、無油斷、様忠信肝要候、何様靜謐上、急度可感之候、穴賢々々、

天正六年十月十六日

六一九

天正六年十月十六日

(天正六) 十月十六日

宇津江小三郎殿

景勝

六二〇

鹿島分

今度錯亂之處、遂籠城、走廻事神妙候、依之鹿島分充行候、彌可抽忠儀^(義)之事肝要候、仍執

達如件、天正六年十月十六日

景勝

增岡甚四郎殿

今度抽忠節之段、神妙候、然者本意之上、何茂三千匹之地、可充行之間、彌忠功肝要候、仍執達如件、

天正六年十月十六日

長崎彦四郎殿

長崎彦四郎殿
古海平次郎殿

古海平次郎殿

富屋彦四郎殿

藤卷與三郎殿

同 捨五郎殿

若山新七郎殿

富屋彦四郎殿

藤卷與三郎殿

同 捨五郎殿

若山新七郎殿

二十三日、^丑北條氏邦、蘆名盛隆ニ答報シテ、景勝及ビ佐渡ノ將士ト和セントス
ルヲ詰リ、明春、上野沼田城ヲ略シテ、兵ヲ越後上田ニ出サンコトヲ告グ、

〔秋山文書〕^{〇美}

去二日之便書、同十一披見、去頃奥口之模様蒙仰候處ニ、不及御報由一段不審ニ存候、^(景勝)
蒙仰毎度及細報候キ、取紛故遅々之義も可有之歟、少成共對貴所無疎略候、越國喜平^(上野)
次、被對貴國へ、手切動之由、無是非次條ニ候、尤指行有之間敷候、來春之事者、沼田本意
無疑問、上田表出勢可及其備間、其口新因手前、景勝如存分之罷成間敷候、貴國佐越三
和之扱、重而有之由不審ニ存候、如仰難有落著、與令分別候、一先段以飛脚申入候處ニ、
御馳走忝存候、御報參著之上、以使可申入候、龜谷丸殿御前御馳走畢、竟憑入候、一新因
使返し申候、能々被送越可給候、^(金上盛備)金遠へも及細報候、委曲令來音候、恐々謹言、
追而、御老父へ、其以來無音本意之外ニ候、近日以使可申上候、

天正六年十月二十三日

六二一

金上盛備

龜谷丸

景勝蘆名
氏ト絶ツ
新因

天正六年十月二十四日

拾月廿三日

却上宛名詳ナラザル、

氏邦(北條)花押

六二二

二十四日、寅、景勝、景虎ト御館城ニ戦ヒ、其將本庄秀綱ヲ破リ、敗兵ノ米山ヲ經テ逃ル、ヲ察シ、旗持城將蓼沼友重、佐野清左衛門尉ヲシテ、コレヲ要撃セシム、

〔歷代古案〕六

富所兄弟

態遣飛脚候、今日向館相動處、敵取出之間、則遂一戰、本庄清七郎(秀綱)人數追崩間、百餘人討捕、手負無際限、伏出(任カ)館際迄取込候間、可心易候、殊富所兄弟共何茂引取候、此由隼人(富所)佐

二能々可申候、然者、敵夜中米山卅里(三)通路致、其間夜々ニ出入數、如何共往行之者、討留候様可相稼候、何様本意之上、兩人之儀者不及申、其地在城之者共、地行等出之可感候

條、何茂へも此由爲申聞、晝夜可相稼事任入候、又其元之様體、急度注進(肝)簡要候、萬吉重而謹言、

十月廿四日

景勝

蓼沿(友重)七殿
佐野清左衛門(尉脱)殿

〔上杉年譜〕二十

秀綱腰差ノ小旗ヲ捨テ敗軍ス

富所隼人佐

態申遣候、今日向館働候處、敵取出之間、遂一戰、本庄清七郎腰差小旗迄捨敗軍候、然者其許忠儀(義)相稼、早々注進可申候、重而穴賢々々、

十月廿四日

景勝

〔竹田久太郎氏所藏文書〕前

御奉公御尋ニ付書付を以申上候事

略上、十月廿四日、おとて春日山江爲押寄申候時分、大坪口ニ而、一日ニ二度之鐘ニ首尾仕、手負申候事、是ハ山田囚獄被存候事、略下

慶長四年三月十七日

登坂角(廣重)内判

杉原常陸(親憲)殿
御披露

〔越後古實聞書〕

十月廿四日、御館を責らるべしとて、御馬被寄、本庄清七郎其日先

駈成りけるに、關東勢歸りし故、後鞍の邊見へて、一支もなく敗軍して逃入を、追詰め討程に、本庄か人數三百餘討取、申刻に御馬入、清七郎御手並に驚く、何隙見合落度斗分別成、祖父本庄三河守、其子美作守二代迄、忠信の者成けるに、清七郎ハ似さりける、略下

天正六年十月二十四日

六二三

御館ヨリ春日山ヲ攻ム
登坂廣重
大坪口ニ傷ク

天正六年十月二十八日

六二四

○本庄秀綱、枋尾ニ退クコト、十一月四日ノ條ニ見ユ、

二十八日午、景虎、赤川新兵衛尉ニ來屬ヲ勸メ、道場建立ヲ約ス、

〔專稱寺文書〕○越後

此度、當御館江名々相談、就忠信申者、如申上望之所導場可被爲取立候由、被仰出者也、仍如件、

天正六戊

神田

神田

拾月廿八日(景虎)朱印

遠山

遠山

一揆中

奉之

赤川新兵衛尉殿

十一月大戊申朔

四日亥、景虎、琵琶島城ノ危急ヲ聞キ、小笠原某等ヲ遣シテ援ケシメ、又、本庄秀綱ヲシテ、枋尾ニ還リテ中越ノ味方ヲ糾合セシム、是日、景勝、コレヲ探知シ、旗持城將佐野清左衛門尉ニ命ジテ、ソノ通路ヲ扼シ、琵琶島ニ備ヘ、且ツ、敵狀ヲ探報セシム、

〔代右衛門所藏文書〕

○白川領風土記十六所收

小笠原

雖未御届候、及一筆候、仍敵先日其地取懸處、堅固被相拘候由、(肝)簡要候、此上之備大切候條、重而始、小笠原殿指越候條、自最前之横目者共、各々被相談、晝夜用心普請等、萬事仕置少も油斷有間敷候、本庄清七郎差越候間、猶有談合、手堅仕置肝心候、恐々謹言、

霜月三日(天正六)

景虎(花押)

琵琶島善次郎

琵琶島善次郎殿○刈羽郡舊蹟志上所收、景虎、關矢八郎次ニ送ル書狀ハ、同文ニ付キ略ス、

〔歷古代案〕

六羽前

昨夜中、本庄清七郎館を取除候由、懸入之者才覺候、自然琵琶島杯へ之助勢ニも候歟、無心元候、第一其地用心、并琵琶島へ念を入、被表之模様注進待入候、無申迄候へ共、無油斷精ニ入尤ニ候、若ゆへふくそくと被リニ仕候者、通用さいさり肝要候、何偏彼者様體早速注進尤ニ候、謹言、

赤田ノ模様

尙々、(赤田)あうとのをやううつて無其間得候、此間(琵琶島)ひをしまはとらさふと仕候哉、うやう之儀も、重而申越尤ニ候、以上、

霜月四日(天正六)

景勝

佐野清左衛門殿(尉脱)

〔越後治亂記〕

中

十一、清七郎、在所に逃歸る事

天正六年十一月四日

六二五

天正六年十一月十一日

六二六

○上文ハ、十月二十四日御(本庄秀綱)清七郎は、御手なみに驚て、軍法便も身に入す、只明暮透を窺ひ、落はやとのみ思ひけるか、果して霜月三日の夜半の頃に、手勢引連(板尾)在所へ逃て歸りにけり、去程に、御館にて本庄か落たると言裡にこそあれ、小身の輩、或は筋なき下郎とも、我もくくと落失ける間、今日漸身付恩顧の族、義を重んずる者共斗詰留て、纔の勢に成けり、本庄か落たる事、其夜の内に春日山へ注進しければ、さらは打留よとて、道筋の城々に以飛脚を觸遣す、去共本庄は馬の足をもいとわす、直打に打て急さける間、難なく在所へ落著たり、偕も此本庄は、親父美作守は不及申、祖父三河守を始累代忠節の家臣たりしか、今清七郎か代に成て、春日山を背て御館に入、剩そこにも怵すして、在所へ逃歸、兩君に不儀を盡、門戸を閉て案し煩ひ居たる有様は、鳥の翔をそかれ、獸の爪牙をくしかれたるに異らす、

秀綱ノ祖
父三河守
父美作守

十一日、戊午景勝、越後直峰城將小日向隼人佐等ノ戦功ヲ褒シ、桐生杵右衛門等二地ヲ宛行フ、

〔上杉年譜〕二十

今度在直峯地、相稼之事、神妙之至候、何様靜謐之上、一所可感之者也、仍如件、

天正六年

霜月十一日

景勝

小日向隼人佐

小日向隼人佐殿

北條ノ内
小幡市之
丞分

歲月御奉公申付而、北條之内、小幡市之丞分、充被下置候、彌、神妙御奉公可申上候事、肝要候、仍如件、

天正六年

泉澤河内守

霜月十一日

久秀

泉澤久秀
桐生杵右
衛門

桐生杵右衛門殿

村岡

今度不慮之錯亂之處、每度相稼之段、誠粉骨忠信無比類候、依之、村岡地出置之候、彌、於勵軍功者、可令歡賞者也、

天正六年

霜月十一日

景勝

嶋津喜七郎殿

嶋津喜七郎

天正六年十一月十一日

六二七

天正六年十二月十六日

六二八

水吉ノ内
上倉下總
守分

今度念劇之處、在直峯之地、走廻事、神妙之至候、依之、水吉之内、上倉下總守分、充行候、彌
忠信肝要候、仍執達如件、

天正六年

十二月朔日

景勝

北村孫兵衛

北村孫兵衛殿

〔歷代古案〕^九

○羽前

今度念劇之所、有直嶺走廻事、神妙候、依之上郷之内局分、田中助兵衛分、料所之内平井
分宛行候、彌、忠信、簡要候、仍執達如件、

天正六

十二月朔日

景勝

山田彦右衛門

山田彦右衛門殿

○右二通ハ、日ヲ異ニシ、桐生宛ノ分ハ、戦功ノ地不明ナレドモ、便宜茲ニ合叙ス、

十二月小戊寅朔

十六日、^巳越中松倉城將河田長親、春日山城應援ノタメニ、越中能登ノ兵ヲ引率
シテ、能庄ニ至ル、是日、景勝、山崎秀仙ヲシテ、コレヲ猿毛・赤田・黒瀧ノ諸城ニ報

ゼシム、

〔歷代古案〕^五

○羽前

旗持城將
ヲシテ赤
田・黒瀧へ
ノ使者ヲ
護衛セシ
ム

急度申達候、仍、河田豊前守方、今日能庄へ著陣、能州越中兩國之御人數被相催、參城被
申候條、御館可被討果之段無疑候、然時者旁も可爲思、召儘候間、可御心安候、又、河豊
參府ニ付者、赤田・黒瀧へ御使を指越度候、由御意候條、旗持衆有談合、以舟可被越候歟、
最又、渡海於難叶者、以道働可被通候歟、兎角ニ旁可有御頼之由、堅御意候間、依被返答、
御使之義可被指越候、此度之儀候條、御馳走簡用候由、何へも御意得尤候、恐々謹言、

專柳齋

(天正六)
十二月十六日

秀仙

上野九兵衛尉

上野九兵衛尉殿
○猿毛
御住城將所

○景勝、長親ノ參陣ヲ促スコト、十月十日ノ條ニ、長親、越後系魚川ニ著スルコト、
十二月二十九日ノ條ニ見ユ、

十九日、^申坂戸城將登坂清忠等、援兵ヲ請フ、景勝、明春ヲ俟チテコレヲ遣サント
ス、尋デ、清忠等、更ニ春日山城ニ來リ守ラントス、是日、景勝、コレヲ諭シ、坂戸城
ヲ嚴守セシム、

天正六年十二月十六日 十九日

六二九

存達
景勝送ル
ベキ援兵
ナキヲ嘆

〔歷代古案〕五羽前

存達歸路之間、一筆差越候、仍而、自以前度々如申、其表爲賀勢、誰う人體衆差越度候て、何も相稼候得共、ふつとく無之、菟角候へ、ういゝにハ不成之打過、口惜迄候、吾分如存知、旁輩共之中、何も差むい候間、人々内まゝす者無之候間、いゝんくふうに不及申候、まゝしふるら、各談合申、尙冬中正二月中に其表一切有之様ニ、所々自他國計策ヲ廻、涯分談合成候事ニ候、於其少も油斷無之候、可心安候、扱又幾度如申越候、吾分共、今度別而入身相稼事、誠之無比類、共可申様無之候、彌以此時候間、其分別專一ニ候、猶萬事存達可被申候條、早々申越候、謹言、

十二月十七日

景勝

登坂神兵衛
樋口主水助

登坂與五郎殿
同 神兵衛殿
樋口主水助殿

以別紙申越候、仍而、聞届分者、吾分共ヲとしめ、春中ハ押詰其地引拂、爰元へ越、可走廻由申候段聞届候、惣別其元之備さへ堅固ニ候ハ、爰元之儀ハ餘とやすく候間、殊更

坂戸城兵
五十人退
去スレバ
城危シ

何方にて奉公も同前ニ候、走廻道そのうくれふきものニ候間、いゝんさやうに分別候哉、其地五十與引拂候へハ、敵へ之覺、又ハ其元之者共、手をうしふ事ニ候間、爰元にての(奉公)不うこうより、猶以可爲喜悅候間、有其地走廻頼候、餘ニ此儀聞届候止ニ思候て、書中さしこし候、何ニも此段申爲聞、其心得尤候、猶萬吉重而謹言、

極月十九日

景勝

登坂與五郎殿
同 神兵衛殿
樋口主水助殿

二十三日、庚子景勝、秋山定綱ヲ甲斐ニ遣シ、武田勝頼ノ妹菊姫トノ婚約ヲ結バシム、是日、勝頼答謝ス、

〔上杉家古文書〕

爲嫁娶之祝儀、以秋山伊賀守蒙仰候、目出珍重候、仍、太刀一腰、馬一疋、(信茂)黒毛、鵝眼千疋送給候、欣悅候、來春者自是早々祝詞可申達候、猶小山田可申候、恐々謹言、

十二月廿三日

勝頼(武田)花押

上杉殿

天正六年十二月二十七日 二十八日

六三二

○菊姫、越後春日山城ニ入興ノコト、七年十月二十日ノ條ニ見ユ、

二十七日、辰、甲景勝、甲斐跡部勝資ニ物ヲ贈ル、是日、勝資コレヲ答謝シ、且ツ、武田勝頼ノ駿河・遠江ニ備へ、伊豆ヲ撃破セルコトヲ報ズ、

〔歴代古案〕一 羽前

御書謹而拜見、忝候、仍、駿遠兩州之仕置手堅被申付、歸陣之砌、至豆州亂入、國中悉撃碎、去九日被致歸府候、先以可被安貴意候、然而鱈拜領過當之至候、御芳志奉賞翫候趣、宜預御披露候、恐惶謹言、

跡部尾張守

(天正六)
十二月廿七日

勝資

竹俣慶綱

(慶綱)
竹俣三河守殿

二十八日、乙北條景廣、旗持城ヲ攻ム、城將佐野清左衛門尉等、コレヲ撃退ス、

〔越後治亂記〕中 十二、佐野蓼沼か注進之事

極月廿九日に、旗持の城々、佐野蓼沼以飛脚御城へ注進仕けるは、昨廿八日、北條(景廣)丹後守、二千餘りにて當地へ寄來る所に、隨分防戰、數多討取、利を得て候とて、首の注文に、軍の事書を指添て遣しける、毎度の軍の忠神妙也、○下略、景廣、旗持城將ト戰フ、十月十五日ノ條ニ見ユ、

二十九日、丙河田長親、越後糸魚川ニ抵ル、景勝、上條政繁等ヲ遣シテコレヲ迎フ、長親諸將ト議シ、明春正月ヲ期シ、來援センコトヲ約シテ越中ニ歸ル、是日、景勝、書ヲ長親ノ將山田修理亮等ニ遣リ、長親ヲシテ、約ニ違ハザラシメンコトヲ求ム、

〔山田文書〕○上杉家 記所收杉家

今度、(河田)豐前守、糸魚川ノ地迄參陣ニ付、(政繁)初上條殿皆々指越候處、相談之上、先以從彼地入馬候、(天正七)正月中旬必可參府由候、而、豐前守事者不及申、何も誓詞成之、若林宗右衛門差越候、誠以神妙之至候、然者任兼約、正月十六日ニ其元打立候様ニ、豐前守ニ諷諫專一候、此等之趣、親類同心共能々可申届事簡要候、猶、子細若林可演說候、穴賢々々、
(天正六)極月廿九日 景勝

山田修理亮殿

島倉左馬助殿

島倉左馬助

〔上杉年譜〕二十

天正六年十二月二十一日、河田豐前守能州(越中)ヨリ兵馬ヲ進メ、越後

上條政繁
吉江信景
山崎秀仙
河田窓隣
軒

糸魚川地ニ參著ノ由言上アリ、上條彌五郎(政繁)吉江喜四郎(信景)山崎專柳齋(秀仙)河田窓隣軒、此四士ヲ糸魚川迄差シ遣サレ、河田此節ヲ激勵シ、忠貞ヲ存シ、遠境參陣ノ事、御喜悅斜メ

天正六年十二月二十九日

六三三

天正七年正月四日

年未且ツ
雪積リ行
路自由ナ
ラザルヲ
以テ越中
ニ引揚グ

ナラス思シ召ル、旨申送ラル其上、四士、豊前守ニ對シ、軍談有テ、豊前守并ニ能越ヨ
リ隨屬シ來ル諸士ニ至ルマテ、無二御味方ニ屬シ、忠信ヲ勵スヘキ由、各誓詞ヲ調ヒ、
上條彌五郎ニ相渡ス、抑、今年ハ、歳モ已ニ暮ニ及ヒ、雪モ又深ク積レハ、人馬ノ行路モ
自在ナラス、豊前守先ツ是ヨリ居城ニ罷リ歸リ、留守中ノ仕置等申付、來年正月中旬
ニ及ビ、參府セラレ、公ノ御憤リヲ散シ、賊徒ヲ屠殺スヘキ働アルヘキ旨、堅ク約ヲ定
メ、豊前守始メ歸郷スレハ、上條ヲハシメ、四士モ歸リ、件ノ誓詞ヲ差上、豊前守カ蘊底
ヲ委細ニ言上ス、同月二十九日、越中在國ノ士山田修理亮、島倉左馬助ニ御書ヲ下サ
ル、今般河田、豊前守、糸魚川マテ參陣ニヨリ、上條彌五郎ニ四士ヲ副差ツカハシ、對談
申處ニ、豊前守ニ從屬シ來ル諸士ニ至ルマテ、誓詞ヲ以テ無二ノ忠信ヲ勵スヘキ事
顯然タリ、兎角雪中ノ事ナレハ、人馬ノ往來モ容易カラス、先ツ是ヨリ歸國シテ、來陽
參陣スヘキ由公命アリ、略下

○長親ノ、越中能登ノ兵ヲ率キテ能庄ニ至ルコト、十六日ノ條ニ見ユ、

天正七年己卯 紀元二千二百三十九年

正月 丁未 朔

四日、庚戌越後林泉寺住持宗慧泰室寂ス、

傳記

〔日本洞上聯燈錄〕十 林泉益翁宗謙禪師法嗣

(中頸城郡春日村)

越後州林泉泰室宗慧禪師、益翁手度之弟子也、出參諸方、復歸依益翁、得旨、初出世永平、

遷林泉、示衆萬法、是心光、諸緣惟性曉、本無迷悟人、只貴今日了、既無迷悟人、了箇什麼、代
曰、春風無高下、花枝自短長、僧問、如何是般若體、師曰、維摩懶開口、曰、如何是般若用、師曰、
枝上一蟬吟、天正七年正月四日寂、

〔林泉寺過去簿〕乾○羽前

天正七年正月初四日

前永平當寺ハイ九世泰室宗惠(慧)大和尚

六日、壬子河田長親、越中ヨリ越後ニ來リ、景勝ヲ援ケテ御館城ヲ攻メントス、是日、

景勝、コレヲ旗持及ビ米山寺ノ城將ニ告ゲ、赤田・黒瀧・與板・下條等ト聯絡シテ、

景虎ヲ攻撃セシム、

〔歷代古案〕六○羽前

近日、其地之模樣如何無心元迄候、舊冬者皆共無比類相稼故、敵數多討捕之注進之趣、
悦喜不斜候、年内無餘日不申述候キ、仍川田(長親)豊前守來十六日、必令參府館之儀可討果、
之由候間、可心安候、依之赤田・黒瀧へ爲使左近司傳兵衛尉差越候、以船路送届候者、可

使者左近
司傳兵衛

天正七年正月六日

天正七年正月六日

悦喜候、巨細猶、米山寺へ申遣候條、令相談馳走(肝)簡用候、謹言、
(天正七)正月六日 景勝

尉ヲ海路
赤田ニ送
ラシム
佐野清左
衛門尉

〔歷代古案〕七

○羽前

融雪ノ候
北條氏ノ
援兵來ラ
ザル前ニ
決戦セン
トス

態以使者申届候、爾來其許近邊之手成、無其聞、如何無心元迄候、當城備無相替儀、堅固之條、可心安候、仍舊冬、河田豐前守至于糸魚川之地、令著陣之間、内々年内當地へ呼越館之儀、雖可討果候、留守中之仕置未落居之様ニ聞及候間、初上條殿(山崎秀仙)、專柳齋(信景)、吉江喜四郎(河田)、窓隣軒、糸魚川へ指越相談、先以豐前守自彼地指歸候、然者當月十六日、必令參府無二可令走廻候、由堅約、豐前守事者不及云、家中之者共迄誓詞成之、若林宗右衛門ニ差越候、如此之時者、日限無相違可參府事眼前之條、如何共其方事與板赤田(直江信綱)、下條(齋藤朝信)申合、來月上旬被打登、手合簡用候、度々如申遣、當城備之儀者、正二月中ニ相極候、雪消南衆館へ相重候者、凶事出來之儀も可有之候歟、兎も角も豐前守參府一切於無之者、無詮儀候條、此刻遂鬱憤、屬本意候様之才覺任入候、猶左近司傳兵衛尉口上ニ申含候間、令略候、謹言、

正月六日

景勝

村山善左衛門殿(慶綱) 城將○黒瀧

○長親、一旦糸魚川ニ來リ、再來ヲ景勝ニ約シテ、越中ニ歸ルコト、六年十二月二十九日ノ條ニ見ユ、

景虎、越後猿毛城將上野九兵衛尉ヲ誘ヒテ已ニ屬セシメントス、九兵衛尉應ゼズ、是日、景勝、山崎秀仙ヲシテ九兵衛尉ヲ褒シ、直峯城衆ト議シ、景虎ヲ攻メシム、

〔歷代古案〕五

○羽前

九兵衛景
虎ノ使者
ヲ斬ル

舊冬御書中畏入存候、然者、御館より使之者、有成敗、彼書付共被指越、尤御忠節之至、一段被成御悦喜候、其刻、爲御使、糸魚川へ罷越候付て、御返事不申候、非疎意候、次、此度御働之儀、直嶺衆有御相談、御馳走尤候、始而之儀候間、乍御太儀急度一働可被成之事簡(肝)用候、猶重而可申述候、恐々謹言、

追而、各へ雖可申入候、何も不知案内候事候間、貴所御意得頼入候、以上、

專柳齋

秀仙(山崎)花押

(天正七)正月六日

上野九兵衛尉殿

御宿所

十一日、景勝、片桐善左衛門ノ功ヲ賞シテ、越後富坂ノ地ヲ宛行フコトヲ約ス、

天正七年正月十一日

六三七

六三六

天正七年正月二十六日

〔片桐文書〕○信濃

就富坂之儀、去年以來種々辛勞神妙候、彼地至令落著者、於富坂之内參千疋之所申付可宛行者也、仍如件、

天正七

正月十一日

景勝(花押)

片桐善左衛門殿

二十六日、申、壬景勝、越後高津城ヲ攻メテ陷ル、是日、コレヲ河田長親ノ將若林宗右衛門等ニ報ジ、且ツ、齋藤朝信竝ニ下越ノ兵來リ會シテ、景虎ヲ攻ムル旨ヲ告ゲ、長親ニ、前約ニ依リテ來援センコトヲ勸メシム、

〔上杉年譜〕二十

(河田長親)

舊冬、於糸魚川之地、豐前守如兼約、去十六日、被打立候哉、無心元候、於巨細者先達申遣候、偕又、爰元備無異儀候、去十六日、向高津地(中頸城郡高土村)及行、同廿日、攻落之、河東之在々令破却、即彼地人數入置候、然者豐前守出勢之事、堅就約諾、下郡江遣飛脚、始齋藤下野守(朝信)其外揚河北之人數悉相催、二月上旬、可打上之段、示合候條、其首尾無違儀、樣意見肝要候、猶萬吉重而穴賢、

正月廿六日

景勝

若林宗右衛門殿

山田修理亮殿

山田修理亮

〔歷代古案〕十羽前

去十六日、高津地被爲攻落、數多討捕之、河東之在々被打破、即彼地自此方御人數被入置候、○上下略、全文ハ、二、月三日ノ條ニ收ム、

二月三日

五十公野因幡守

重家○外ス、名略ス、

鯨坂備中守殿

五十公野重家
鯨坂長實

二月丁丑朔

一日、丁丑景勝、景虎ヲ御館城ニ攻メ、其將北條景廣ヲ傷ク、翌日、復、攻メテ火ヲ府内ニ放チ、外廓ヲ燒ク、

〔歷代古案〕六羽前

急度飛脚遣候、一昨々兩日、向館及行、北條丹後守陣所追掛、數多討捕、頸之注文差越候、可披見候、同丹後守をも萩田孫十郎(長繁)二ヶ所躡付候、深手ニ候間、可死去、由落來者共申

戰勝ヲ旗

天正七年二月一日

六三九

六三八

天正七年二月一日

六四〇

持及ビ赤
田兩城ニ
報ズ

景廣ノ殘
兵退路ヲ
要撃セシ
トス

候、昨日茂館際迄押詰外構悉焼放候、火者可見得候、今度動之様體、赤田へ脚力指越候、送之儀猿毛へ頼候、若不相調候者、自其地舟成共、陸地成共、無相違可送遣候、將亦彌自館北條之者共可落行候、夜ニ待伏出無油斷可相稼候事、肝要候、猶子細清水罷歸之刻、具可才覺候、謹言、

二月三日

景勝

佐野清左衛門殿(尉脱)

〔伊佐早文書〕

伊佐早謙氏所藏

武田勝頼
戰捷ヲ賀
ス
東條館ヲ
攻落ス

以富山縫殿助重芳問、珍重候、抑去朔日、至府中被動干戈、被得大利之已後、爲始東條館寄居數ヶ所被攻落、追日被屬御本意之由、誠御武勇之至無比類、次第候、此上猶手堅御備專要候、委曲諸與彼口上候之間、不能具候、恐々謹言、

二月廿一日

勝頼(武田)花押

上杉彈正少弼殿

〔佐藤主稅氏所藏文書〕

後越

景虎敗戰
ヲ河田吉
久ニ告ケ

急度申届候、依當月朔日二日、不慮之仕合ヲ以、從春日山相働、府内悉令放火候、無是非次第、口惜敷迄候、日ノ下略、全文ハ、五

二月五日

景虎花押

河田對馬守殿(吉久)

〔武州文書〕

七橘樹郡

感狀

去朔日、於府内、頸壹討捕之、殊更北條丹後守鑑付事、無比類候、不始于今數度之高名神妙ニ候、向後彌可抽忠切事、肝要候、謹言、

貳月三日

景勝花押○本書宛名ヲ關クモ、荻田長繁ニ宛テシモノナラン、

〔毛利安田文書〕

前羽

去朔日、於府内、頸壹討捕之、神妙之至、無比類候、彌可被抽忠(功)劫候、謹言、

二月三日

景勝花押

安田彌九郎殿(能元)

〔上杉年譜〕

二十

去朔日、於府内、油木豐前守討捕之、戰功無比類候、向後彌可走廻、肝要候、謹言、

二月三日

景勝

富所隼人殿○上杉年譜所收、景勝ノ山田與五郎平賀、左衛門下平右近ニ與ヘシ感狀ハ、同文ニ付キ略ス、

〔歷代古案〕

三羽前

天正七年二月一日

六四一

富所隼人

油木豐前
守討死

安田能元

天正七年二月一日

六四二

去年以來、度々相稼、殊今日於東廻輪走廻、無此類感候、其上神妙ニ就奉公、其方望之地、
於沼田(上野)發知又左衛門分、同名主水佐分出置候者也、仍如件、

景虎林傳
内ノ戰功
ヲ賞ス
發知又左
衛門同主
水佐分

天正七年

二月二日

(加筆)三郎殿
景虎

林傳内殿

〔上杉年譜〕

三十

天正七年春二月朔日、丹後守ハ、昨夜ヨリ八幡宮ニ參籠シケル由

北條景廣
八幡宮ニ
參籠セル
ヲ襲フ

聞ヘケレハ、諸臣ヲ召テ相議シ玉ヒ、未明ニ御出馬ナサレ、丹後守カ籠リシ八幡宮ヲ

取圍ミ、丹後守ヲ始、一人モ洩サス討捕リ、夫ヨリ御館ヲ攻ラルヘシトナリ、爰ニ味方

ノ軍士ニ、荻田孫十郎、三俣九兵衛、左近司傳兵衛、彼是四五人、竊ニ示合セ、公御立馬ト

聞ナラハ、定テ丹後守ハ御館ヘ退クヘシ、然ルニ於テハ、中川口ヲ通ルヘシ、イサヤ各

待伏シテ、丹後守ヲ討捕リ、忠功ヲナサントテ、昨夜ヨリ彼輩忍ヒ行テ、中川口ノ土手

ノ陰ニ、段々伏兵シテ、丹後守カ通ルヲ待居タリ、既ニ公ノ御出馬ト聞ヘケレハ、案ノ

如ク、丹後守ハ八幡宮ヲ出テ、手勢ヲ前ニ立テ、其身ハ馬上ニテ二三間ホト跡ヨリ來

ル、荻田行年十六歳ナリ、心強ニシテ又並フ者ナキ武勇ノ士ナリ、如何アラント土手

ノ上ニ登リ見レハ、果シテ丹後守馳來ル、荻田ハ鎗トリ直シ、相待所ニ、丹後守カ猛勇

中川口

荻田長繁
景廣ヲ刺
ス

ニ怖レケルカ、一ノ伏ニテモ通シ、二三ノ伏ニテモ其行ナク通シ、又荻田ハ少シ丹後

ヲ遣リスコシ、後脇ヨリ荻田孫十郎ト名ノリ鎗取テ投突ニス、丹後守モ心得タリト

テ、太刀ヲ拔テ馬ヲ引返ントスレトモ、荻田カ鎗後脇ヨリ乳ノ下マテ突貫タレハ、流

石ノ猛勇ナレトモ、心目眩然トシテ鎗ヲヌキ捨テ、猶進テ御館ニ走入ル、公ハ府内ニ

御出馬ナサレ、八幡宮ヲ打圍ミ玉ヘトモ、丹後守立退ヌ、殘卒トモヲ屠戮シ、夫ヨリ御

館ニ向テ攻玉フ、館方ニハ、一騎當千ノ丹後守深手ヲ負ケレハ、敵方コトニ力ヲ落シ、

防戦スル者モナク、此日モ既ニ暮ケル間、公モ止ム事ヲ得ス、御納馬ナリ、此夜、館ノ城

ニ籠リタル下部二三輩、城内ヲ走出テ、春日山ヘ來リ云ケルハ、丹後守痛手故、暮ニ至

リ死去ス、此故ニ籠城ノ諸兵モ心ヲクレ、各落行仕度ノミニテ、軍事ノ沙汰ハナカリ

ケリ、此時御立馬アラハ、館ハ忽チ落居仕ルヘキト言上ス、公モ荻田カ武功ヲ聞シ、召

御喜悅ノ餘リ、賞詞アリ、後孫十郎ヲ改テ主馬ト號シ、加祿シテ糸魚川城ニ差置レ、武

名モ世ニ隱ナシ、

同月二日、公御出馬ナサレ、館ノ城ヲ攻メ玉フ、敵兵モ突出テ防戦スルトイヘトモ、我

兵猛威ヲ勵シ、矢砲ヲ避ス攻撃シケレハ、賊徒我先ニト走入ル、是ニ依テ外構ヲ燒拂

ヒ、先御納馬ナリ、翌三日ニハ、去ル朔日二日ノ一戦ニ、高名舉タル輩ヲ御僉議有テ、感

景勝御館
ヲ攻ム

一日ノ暮
景廣死ス

長繁主馬
ト號シ糸
魚川城主
トナル

二日ノ戰
館城ノ外
構ヲ燒拂
フ

天正七年二月一日

六四三

書ヲ玉ハル所謂山田與五郎平賀捨左衛門富所隼人下平右近等ナリ其御書云○書略ス

〔附録〕

糸魚川城

〔北越略風土記〕

九 古城跡下

糸魚川 頸城郡

荻田長繁

荻田主馬長繁

荻田氏ノ
經歷

荻田與三
耶上坂氏
ニ屬ス

隼人

越後ニ來
リ西濱ニ
居ル

長尾爲景
ニ任フ

先祖何某應仁の亂後文明年中々延徳の頃迄江州荻田の庄に數代住ける郷士なり明應二年の冬國主佐々木京極高濂入道之老臣上坂治部大輔泰貞に屬し荻田與三郎と號す武勇力量ありて殊に水練の達者ゆへ數度の軍功を以文龜元年五月二千貫の所領を賜り愛智郡川南の城を預り荻田隼人正貞と名乗江南江北の境目を守る永正十三年三月九日主家上坂泰貞病死其子上坂治部少輔泰舜家督相續す然るに同年八月廿三日同國淺井郡の住人淺井新三郎後淺井備前守亮政と號し小谷の城主と成不意に軍兵を發し上坂城を攻落し泰舜一類滅亡す此時荻田隼人戰死す其子荻田與五郎十五歳なりといへ共武剛にして甲斐々々敷驅込父の敵を討取り郎黨四人を引具し北國へ下り越後國西濱に蟄居す其後長尾爲景に隨ひ春日山城内に住居し天文二十一年卒去其子荻田孫十郎時に二歳なりしか母の養育にて成人の後上杉謙信に仕へ戦功あり御館亂の時景勝方となり天正七年二月朔日北條丹後守長國景廣に鎧を付

松平忠直
ニ任フ

し武功によりて侍大將一作武者奉行に取立られ荻田主馬判官長繁本作二と號し糸魚川の城主とし一萬石を領し感狀を賜ふ○感狀前掲ニ付キ略ス此時主馬十七歳なり慶長三年景勝會津へ入國同五年米澤へ所替の節浪人し後に越前宰相忠直松平卿に奉仕す

三日卯巳坂戸城將長尾景憲景虎ニ屬シ北條輔廣ノ據レル樺澤城ニ入リシガ志ヲ翻シ脱シテ坂戸城ニ歸ル是日景勝コレヲ褒シ且ツ樺澤城ヲ略取セシム

〔歷代古案〕六 羽前

急度申遣候前々筋目を以此度樺澤南魚沼郡引除候事誠忠信無比類候此上如何共樺澤落居

候様各令談合可被稼事肝要候然者一昨朔向館相動北條丹後守陣所押破親類家風數多討捕之頸之注文差越候重而昨日館際外構悉放火巢城斗成置候落居見詰候條押詰陣取當月中可討果候爰元於備可心安候畢竟其庄備肝心ニ候萬吉重而謹言○輔

廣ノ樺澤城ニ據ルコトハ次ノ五
十公野重家等ノ書狀ニ明ナリ

(天正七)
二月三日

景勝御判

(景憲)
長尾平五郎殿

景勝五十公野重家等ヲシテ能登七尾城將鯨坂長實ノ參陣ヲ促サシム

〔歷代古案〕十 羽前

天正七年二月三日

天正七年二月三日

六四六

高津及比
府内ノ戦
況

樺澤城攻
圍

長實ノ謙
信景勝ニ
對スル恩
義

最前及兩度以_レ使僧被_レ仰届候、定而可_レ爲_レ參著候、其以來御當城御備堅固可_レ御心易候、去
十六日、高津地被_レ爲_レ攻落、數多討捕之、河東之在々被打破、即彼地自此方御人數被_レ入置
候、偕又一昨朔日、向御館被_レ及御行、北條丹後守陣所へ押寄攻破、數多被_レ討捕之候、即頸
注文被_レ指越候、可有御披見候、丹後守も二ヶ所手負、旬々引退候、深手候間、今明日中可_レ
死去之由、只今落來者共申事候、昨日重而被_レ成御働御館際、無一字被_レ燒拂、御館之儀落
居被_レ詰御覽候間、押詰有御陣取可_レ被_レ討果之由候、偕又上田表之儀、樺澤地、北條安藝守
相踏候、上田三庄之御人數押詰、二三之廻輪迄燒拂、巢城斗成置、二百餘人討捕之、到今
日取詰候間、落居無疑之由、追々御注進候、隨而其國御助勢之儀、此節極候條、國衆其外
各へ有御異見、一刻も早く御出勢被_レ遂御本意候様、御馳走肝要候、自然此段國衆於疑
心者、自我々誓詞差越申候間、各へ爲見可_レ被_レ申由、御意候、次、貴殿淵底如御存知、我等事
御當代之御厚恩無之、又者謙信様御代も別而之御芳恩雖無之候、謙信様御墓所與申、
爲御國存、旁以捨在所、抛身命、晝夜馳廻候、況貴殿御事者、御分國二人共無之歎、與見及
申候、然者、御當代有御見除者、自他國之覺不可、然候歎、此儀雖不及申候、猶以有御鹽味、
景勝様引立於御申者、謙信様御孝儀與申、又者御安全之事、貴殿御名譽可_レ罷成候、千言
萬句御館之儀落居眼前之事候間、早速御加勢專一候、於巨細者彼證人衆付副候方々、

具可_レ申理候之條、不能詳候、恐々謹言、

五十公野因幡守

(朱書)「天正七」
二月三日

重家

竹俣三河守

慶綱

竹俣慶綱

新發田尾張守

長敦

新發田長
敦

鮎坂備中守殿
(長實)

五日、_{辛巳}景虎、府内ノ危急ヲ河田吉久ニ報ジテ、本庄秀綱ト議シ、三條城將神餘親
綱ヲ促シテ共ニ參陣セシム、

〔佐藤主税氏所藏文書〕_{〇越}

府内悉ク
放火セラ
ル
神餘親綱
ノ參陣ナ
キヲ歎ズ

急度申届候、依、當月朔日二日、不慮之仕合ヲ以、從春日山相働、府内悉令放火候、無是非、
次第口惜敷迄候、此譯ニ候條、本庄秀綱(本庄秀綱)以夜續日、早々參陣可_レ走廻候、其節之儀者、三條
内江于今參陣無之候事歎敷候、此度之儀も右折角之條、私事を打置、三條有一味、一刻
片時も早く於打著者生々世々可_レ爲_レ祝著候、左様ニ無之付てハ、去年以來之忠信も、水

天正七年二月五日

六四七

天正七年二月九日

六四八

下村

二可成候、能々有分別參陣待入候猶、下村可申候、恐々謹言、

(天正七)二月五日

景虎(花押)

河田對馬守殿(吉久)

九日、酉景勝、大石兵部丞ヲ甲斐ニ遣シテ、武田勝頼ニ年頭ノ賀ヲ述ベシメ、マタ、蒲庵永派等ニ物ヲ贈ル、是日、永派答謝ス、

〔歷代古案〕四羽前

爲陽春之御祝儀、大石兵部丞方被差越候、勝頼祝著被存候、殊、我等式迄、御太刀折紙如御書中拜領、寔忝奉存候、何様自是以使者可被申入候條、期其節候、此等之趣宜預御披露候、恐惶謹言、

蒲庵

永派

(天正六)二月九日

山崎秀仙(山崎秀仙)專柳齋

改年之御慶、不可有際限候、仍、太刀一腰、金覆輪、青銅三百疋送投、快然之至候、委細自是可申述候間、不能具候、恐々謹言、

武田信綱

二月

信綱(花押)

上杉殿

御報人々

〔上杉家古文書〕

爲歲暮之祝儀、小袖一重、并五種五荷送給候、珍重候、委曲從是以使者可申候、恐々謹言、

大膳太夫勝頼(花押)

二月六日

謹上

上杉殿〇年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

十一日、亥景勝、御館城ヲ攻ム、城兵窘窮シ、逃亡相踵グ、佐野清左衛門尉コレヲ途ニ要撃ス、本庄繁長ノ子顯長、景虎ニ屬シテ城内ニ在リ、景虎、依テ書ヲ繁長ニ送り、存亡旬日ニ迫レルヲ告ゲ、來援ヲ悃請ス、

〔須田文書〕〇羽前

此度之仕合ニ付、而、兩度御飛脚申入候キ、令參著候歟、無心元候、如顯先書、此度不慮之仕合以當館折角此時極候、今日迄者、涯分備堅固ニ相抱候、十日被相延時者、滅亡迄ニ候、去年以來賴置意趣興云、尤(顯長)新六郎爰元ニ有之間、萬事被打置、于今有參陣可被引立事、偏ニ其方前ニ可有之候、去とてハ新六郎有之間、可有油斷儀無之候、鹽味ニ過間敷

使者ヲ發スル既ニ二回長繁答ヘズ

天正七年二月十一日

六四九

天正七年二月十一日

六五〇

事ニ候、大方ニ被_レ存候てハ滅亡極候、委細新六郎可_レ被_レ申届候條、不能具候、恐々謹言、
追而、千言萬句、一刻も早々自身參陣歟、又ハ人數千も二千も可_レ相立事、待入迄候、

(天正七)
二月十一日

景虎(花押)

(繁長)
本庄兩順齋

○景勝、顯長ノ、景虎ニ黨スル罪ヲ宥シテ、地ヲ宛行フコト、六月一日ノ條ニ見ユ、

〔西澤徳太郎氏所藏文書〕

前羽

去九日、北條之者共、數多討捕之、殊、大澤(右近)頸竝生捕差越候、乍毎度誠無比類候、彌、無油斷

大澤右近
ヲ斬ル
景勝十一
日館附近
ニ出軍ス

於相稼者、可_レ令祝著候、扱又、爰許之儀、先日如_レ申遣、館巢城計ニ成置、一昨十一、爲_レ被_レ進陣

候ニ付而、無力沙汰之限之由、日々落來者共申事候、猶以、其口可_レ落行候間、成_レ其之意得

可_レ討留事、簡用候、謹言、

(天正七)
二月十三日

景勝(花押)

佐野清左衛門尉殿

〔越後治亂記〕

中

御館落人之事

丹後守(北條景廣)か討れて、以_レ來、館方ノ上下逐日弱り行ければ、定て落除者多かるへしとて、

館落人

城々へ觸遣す、就中、旗持ノ城は、奥州海道ノ押ノ地成は、米山寺(行)三十里ノ麓道、夜々武

士を出して守らせける、案のことく、二月九日夜半ノ頃、大澤と言者を大將として、三

百餘人落來る、待居たる五十人にてたらぬ、小勢成共、臆病神ノ付たる落人成ハ、太刀

打する迄もなく、方々へ逃散けるを、爰かしこに押詰、大將大澤を始として、七拾

壹人打取、其外七八人生捕にして、翌日十日ノ朝、打取所ノ首共と、生捕を御陳場へ爲

引、則生捕ノ口を聞せらる、有ノ儘に白狀す、先_レ去_レ夏頃、甲州ノ助勢雲霞のことく押

來りし時は、上下の、めき渡で、四五日は鳴も止す悦しか、勝頼退散ノ秋ハ、又木々の

梢と諸共に、色を變して力を落し、去共關東勢上田に控て有と聞へければ、さりと

と頼を懸て相待しに、丹後守斗を遣して、關東勢歸陣しければ、上下男女肝を消し、十

方に暮て候へは、丹後守力付申けるは、次第に雪もつもれば、働事も不叶故に、關東の

加勢は歸りぬ、馬足ノ立次第に、大軍率し參り候と申ければ、又色を直し、春毎の花を

待_レ猶もとかしく、雪の消を相待候所に、丹後守は討きて候へは、蒐にも角にも三郎

殿ノ御運ノ盡ぬる所なりとて、日頃鬼神ノ様に言れし人々に、手たるけに見へら

れ候へは、増て其外ノ者共、女童ノ有様は、目も當られぬ、何方も切なるは、兵糧盡て候

へは、草木ノ根をほりて食とし、草ノ葉ノ露に口をうるをし候へは、落居程は、御座有

間敷候、何も、透を窺て、落除んと斗にて候、去間、三郎殿は琵琶島へ一所に籠るか、

館籠城ノ
状態

天正七年二月十一日

六五一

天正七年二月十四日

六五二

さなくは米船を御待有て、とにもかくにもと思召れ候のよし承り候と、有のまゝに
そ申ける、景勝、此由聞召、又城々へ觸被遣て、夜白の嫌もなく、海陸共に守らるゝ、

○景勝、佐野清左衛門尉ニ、景廣ノ殘兵要撃ヲ命ズルコト、二月一日ノ條ニ見ユ、
十四日、申、庚旗持城將佐野清左衛門尉、越後青海川ニ青海川圖書助ヲ誘降シ、又、鯨
波ヲ攻メントス、是日、景勝コレヲ褒シ、且ツ、圖書助ヲ赦シ、尋デ、新地ヲ宛行フ、

〔西澤徳太郎氏所藏文書〕

○羽

青海川圖
書助誓書
ヲ納ル

重而飛脚到來、仍、(中頸郡米山村)青海川引付之由、依之彼誓詞書狀指越、何も令披見候、扱又、(刈羽郡)鯨浪小屋

地下人ヲ
召集シテ
鯨波ヲ取
ラシム

可屬手之由、尤可然候、就其人數可指越之段、爰元向館爲被進陣、日々相働無手透候間、
先々此般ハ不差越候、如何共其元地下人成共召連、於可然者、其分可相計候、此表十日
共延々之様ニ候者、必人數可遣候、於様體者清水口上ニ申含候、謹言、
(大正七)
二月十四日

佐野清左衛門尉殿

〔上杉年譜〕

三十

青海川忠信可仕之由申候歟、然者望之地、可充行候條、此旨申届、早々出、武色候様、可申
理者也、

二月十四日

景勝

佐野清左衛門殿

〔歷代古案〕

七
○羽前

今般可令忠信之由、簡要候、時宜於入眼者、堀川分并尾崎分異儀有間敷候者也、仍如件、

二月十九日

景勝

青海川圖書助殿

堀川分
尾崎分

態啓之候、仍而、已前者度々修理亮方へ懇書祝著候、今般御忠信無比類候、彌、可被相稼
儀尤ニ候、御館之儀ハ落居不可有程候、隨而在所筋有用所之子細、彼者指越候間、以談
合可然様ニ異見憑入候、委曲口上申含候間、不能具候、恐々謹言、
(天正七)
三月一日

三月一日

政繁

青海川圖書助殿

上條政繁

今度、旗持衆有談合、於其元様々御加世儀候由、誠以無比類被思食候、此上彌御忠信肝
要ニ候、扱亦、有御用、琵琶島之地御使者被指越候、各有談合可然様ニ御馳走專用ニ候、

天正七年二月十四日

六五三

天正七年二月十四日

萬々重而可申述候間、早々恐々謹言、

六五四

山崎秀仙

三月廿六日

專柳齋
秀仙(山崎)

青海川圖書助殿

〔附錄〕

〔歷代古案〕七羽前

本庄繁長
詮言遅々

今度、本雨之(本庄繁長)(託言)佗事、到遅々、仍、自宗旨、堅餘儀候、爰元吉刑懸落候間、歸參可有候、其故其元見合召進簡要候、恐々謹言、

國清

八月二日

國清(山浦)

青海川圖書助殿

返々、注進可有候、上様へ上申、まゐたい引立へく候、以下二通、年次詳ナ、姑ク茲ニ附收ス、

窪氏名跡
相續ノコ

窪方名跡ニ付而、先代之筋目を以、御懇比承候程者、千萬存候、殊、廣泰寺頃異見ニ候條、任其意候處ニ、御一札ニ預候満足存候、精自芳春公可被申述候間、早々及御返事候、恐々謹言、

宗俊

八月十五日

宗俊

青海川馬丞殿

紀伊高野山清淨心院、謙信ノ卒去ヲ弔フ、是日、景勝、コレヲ答謝ス、

〔上杉家古書簡類聚〕高野山清淨心院所藏

去秋之芳翰、今二月到著、披覽、畏悦之至候、如仰謙信、去年不慮遠行絕言語候、仍、當國銜之事、差儀無之候、早速可屬本意候條、可御心易候、猶、巨碎中條越前守可申候、恐々謹言、

二月十四日

景勝(花押)

清淨心院

中條景泰
添狀

貴札拜披、殊、五種被懸御意、恐悦之至存候、仍、如尊意、謙信遠行之事、無是非次第候、依之當代へ御狀被指越、即及披露祝著被申趣、回報御使僧へ申渡候、次、當國錯亂之儀、差事無之候間、可屬靜謐候、可御心易候、隨而御音信計一種進覽之候、猶奉期、再音時候、恐々謹言、

二月十四日

景泰(中條)
景泰(花押)

天正七年二月十四日

六五五

天正七年二月十八日

清淨心院

參尊報

六五六

謙信廟前
ノ勤行

預使札殊、爲御音信三種投贈令祝著候、然者於謙信廟前晝夜之勤行無御退轉之由、彌洒掃以下被仰付賴存候、猶使僧可爲演說候、恐々謹言、

十月十六日

景勝(花押)

清淨心院

○右書、月日異ナレドモ、便宜茲ニ附收ス、

十八日、甲午猿毛城將上野九兵衛尉、景虎ノ黨ヲ島ノ壘ニ破ル、是日、景勝、九兵衛尉ニ命ジ兵ヲ應化ニ出シテ、錦ノ地ヨリ兵糧ヲ景虎ニ送ルヲ絶タシム、尋デ、錦ノ兵降り、質子ヲ春日山城ニ送ル、

〔歷代古案〕五羽前

野澤半内
ヲ擧ヘテ
斬ル
應化橋上
ヘ出兵ス
ベシ

御懇札披見、則令披露候、仍昨日島之地被打破之段、(肝)簡用之至候、殊ニ從御館之使野澤(半内)與申方いけ取、御さいはい候哉、是又可然候、さて又御人數之儀、早々(應化)あふけのうとまて可差越候事、一刻も可被急候、御とちより日々おち來もの申分者、にしき(錦)の地、通用致候てハ兵糧すこしつゝ、さらひ候て早々有參陣、まうふくをさへさり可有之候、一

日も有遅々者、曲有問敷候由、御誼候、早速御參陣待入候、恐々謹言、

專柳齋

(天正七) 二月十八日

秀仙(山崎)

○上杉年譜
十九日トス、

上野九兵衛殿
御報

岩井信能
錦ノ要害

態令啓候、其元御在陣、各御太儀不及是非候、然者自上様御樽被遣候條、各御賞翫專肝候、隨而昨日者預御書中候、様體承無御餘儀候、錦之地(中頸郡美守村)惘望申渡可進候由申上、付而昨日岩井源三(信能)方御越被成候條、彼地さへ屬御手候得者、河向候御陣取不入事候間、重而可及御左右候、其内各乍御太儀御在陣、賴思召候、此趣自拙者可申届之段、御誼ニ付而申入候、委細彼御使口上ニ可有之候、恐々謹言、

專柳齋

(天正七) 二月廿四日

秀仙

上野九兵衛殿

遠藤惣右衛門尉殿

遠藤惣右
衛門尉

天正七年二月十八日

六五七

天正七年二月十八日

六五八

富所大炊助

富所大炊助殿

御陣所

〔上野文書〕

○上杉家記所收

木田渡守
錦在陣衆ノ證人
武田氏多
數ノ彈藥
ヲ送ル

昨日者預御書中候、則可及御報處、少用之儀有之候而、無其儀候、然者、(中頸城郡春日村)木田渡守之儀被差越候間、申付、自今日船之儀爲渡可申候、扱又、(中頸城郡)錦在陣衆之證人共、陣江參候哉、彼地之儀御刷事澄候ハ、今日中證人何も爰元へ可被差越候由、御説よ而候、亦、鐵放之玉藥之儀承候事、甲州より玉藥昨日過分可罷越候間、則申上可進置候、尤可御心易候、猶、以面上可申述候條、不能具候、恐々謹言、
猶々、昨日參證人衆、今日早々可被差越候、以上、
二月、
專柳齋
秀仙

上野九兵衛殿

〔參考〕

應化橋

〔越後名寄〕

五 舊跡 頸城郡

應化橋 荒川

昔者アフゲノ橋、荒川今ノ舟渡場ヨリ少シ水上、門前ト云ル處ニ、(中頸城郡有田村)應化橋有テ、直江ノ今町ヨリ、春日新田ノ往還ナリシニ、慶長年中、福島ノ城ヲ高田へ引移サレシヨリ、高

田驛路筋トナリ、橋ハ名ノミニ、柱朽テ殘リテ猶有、北越太平記ニハ、往下ノ橋ト書リ、又淨瑠璃本ニハ、逢岐橋ト云ヘリ、書言古事考ニ應化トアリ、

二十五日、(辛)旗持城將蓼沼友重、佐野清左衛門尉等、景虎ノ黨鯨波ニ據レルヲ降シ、進ミテ琵琶島城ヲ攻メントス、是日、景勝、コレヲ褒シ、且ツ、輕擧ヲ戒ム、

〔西澤德太郎氏所藏文書〕

○羽前

鯨波之儀引付之段、注進到來、念ニ入相持之處、誠以神妙ニ候、此上琵琶嶋江可働之由、尤ニ候、雖然無衆ニ而、聊爾之行能々可致分別候、扱亦、下口之様子、無其聞候間、節々注進專一ニ候、館中追日無力、落居可爲十日中候間、可心安候、猶、專柳齋可申候、謹言、

二月廿五日

景勝(花押)

蓼沼藤七殿

佐野清左衛門殿

二十六日、(壬寅)景勝、深澤利重等ヲシテ、坂戸、荒戸直路諸城寨ノ守備ヲ嚴ニシ、速ニ士卒ヲ送りテ、御館城ノ攻撃ニ參加セシム、

〔歷代古案〕

五 羽前

長尾平五郎被歸候條、一筆申遣候、然者、爰元無相替儀、館之儀追日無力、落居見詰候、日

長尾景憲

天正七年二月二十五日 二十六日

六五九

天正七年二月二十六日

六六〇

上田ニ歸ル
淺間藤兵衛

雪中ノ防備工事

十日ノ内ニ館落城セシ

々働成之候、去頃淺間藤兵衛ニ如申越、いん共早々人數相集、近日可差越候、油斷候てハ口惜候、十日之間之義ニ候間、一者敵ヘノ見ウケニも候條、人す相調候やうニ相稼專一候、扱又以前如申越、兩口ふしん之儀、地下人早速相集、普請成之尤ニ候、(荒)トトヘハ、以前之日記之とく、いつきも打越候哉、直路之儀も早々打越雪ふうく候共、雪トヘニ弓木ゆせ相抱、雪さへ候ハ、押詰ふしん候やうニ、無油斷可申付候、人數之事ハ、おしつけ可差越候條、早々相調、武主差添可差越候、(例)式と心へ、如在候てハ口惜候、爰元十日之内ニ落著見詰候條、如此申事ニ候、將又珍尾千田高柳手ニ付、定而何も可爲大慶候、猶萬吉重而可申候、謹言、
(天正七)
二月廿六日
深澤刑部少輔殿
樋口主水助殿
登坂神兵衛殿

二月廿六日

景勝

樋口主水助
登坂神兵衛

〔附録〕

〔戸田文書〕前羽

先度其方事、人數召連可打越、由申越候キ、于今遅々如何候哉、(長尾景憲)平五郎令談合、早々可打

栗林政頼

ヲ春日山城ニ徴ス

越事(肝)簡心候、先書ニ如申遣候、關東堺兩口ニ堅人留差置、不通ニ相留尤候、巨細自泉澤(久秀)所可申越候、其心ヘニ而早速參陣待入候、謹言、
(景)勝花押(宛名)燒失

〔包紙〕年號ハ無之、八月十三日と覺申候、

中納言景勝様御書也、正保三年三月廿二日大火事ニ、車長持之内ニ入置申ニ、長持やけ御書計殘申候、勝之御一字御判殘申候、被下人ハ栗林肥前ニ候、五十騎惣支配之仁ニ候、やけ申候ヘハ覺無御座候、

○右文書年次詳ナラザレドモ、便宜茲ニ附收ス、

二十七日、卯景勝ノ兵、越後犬伏ヨリスルモノ、善根ニ進ミ、亦、赤田ヨリスルモノ、畦屋ニ進ミテ、北條輔廣ノ北條城ヲ挾撃ス、是日、山崎秀仙、コレヲ上野九兵衛尉等ニ告グ、

〔上野文書〕上杉家記所收

昨日者、兩度預示候、然者□筋敵働之段、注進申候哉、其儀者努々有間敷ヲと存候、其故者、大澤高柳、自犬伏乘取、日々善根表迄相働候、又、赤田(同上)より畔屋の地ニ陣取、是も日々北條城際迄可働候由、昨日注進到來候、是付而御使被差越候條、御分別之上、御返答肝要候、委細重而可申入候條、早々謹言、

天正七年二月二十七日

六六一

天正七年二月是月 三月三日

(天正七) 二月廿七日

專柳齋

(山崎) 秀仙

(遠藤總左衛門) 遠總
(上野九兵衛尉) 上九

是月、景勝、清水藤左衛門ヲシテ、越後浦澤城ヲ守ラシム、

〔歷代古案〕〇八 羽前

(南魚沼郡) 右浦澤之

城、彌、可被相固、與被仰出、被成御朱印者也、仍如件、

天正七御朱印

(泉澤) 河内守信秀判

(上村) 美濃守尙秀判

泉澤久秀
上村尙秀

清水藤左衛門殿

三月 丙午 盡

三日、申戌景虎、使ヲ琵琶島城將前島修理亮ニ遣シテ、糧食ヲ御館城ニ送ラシム、旗持城將佐野清左衛門尉、コレヲ道ニ要シテ奪取ス、是日、景勝、清左衛門尉ノ功ヲ褒ス、

〔歷代古案〕〇九 羽前

使者夜交
源徳ト合
議スベシ

河治松倉
ヲ琵琶島
ニ置ク

北條城寄
送ノ兵糧
ヲ源太左
衛門ニ渡
スベシ

從其地之兵糧、餘令遲々、爰元折角候間、夜交指越候、彼仁相談、俵子急度相調、一刻も早々可爲相登候、源徳夜交仰合、先身命此度就走廻者、涯分可引立候、少も油斷有間敷候、抑拙之儀ハ、條々夜交ニ申付候間、彼者作意次第相談、彼是可走廻候、尤河治松倉自始其地指置候條、彼者共別而相談、夜交其方河治松倉申合、船兵糧以下不嫌夜中相調、早々可被登候、大方ニ存有油斷、有曲間敷候、然者かこ□んのため候間、俵子二百俵夜交ニ可相渡候、是ハかこ可爲無調、由彼兵糧之出可召連候、北丹進上之兵糧、源太左衛門可相渡候、尤其方相調候内を以、夜交ニ二百可相渡候、彼是一書を以申越候間、名々遂談合、其作配專一ニ候、委細夜交ニ申付候、謹言、

景虎

前嶋修理亮殿

〔佐野文書〕〇上杉家

(羽前) 所收

今度、自琵琶島館へ兵糧入置處ニ、從其地賊舟共出、方々へ押散、舟共取之、殊ニ上乘者、其舟頭以下數多討取、頸是迄指登候、誠以每事各持無比類候、然者館之儀、追日落居可爲十日中候、其内自下筋館へ兵糧入置儀無之様ニ、日夜無油斷、可相持事專一候、隨而鯨波之地ニ、鐵放人數入置由、是又奇特仕様ニ候、吉早重而可遣候、謹言、

館城ノ落
居十日以
内ニアル
ベシ
炮手ヲ鯨
波ニ備フ

天正七年三月三日

天正七年三月三日 四日

三月三日 佐野清左衛門殿(尉脱)

景勝

六六四

景勝ノ兵、樺澤城等ヲ陷ル、是日、武田勝頼、書ヲ遣リテコレヲ賀ス、

〔歴代古案〕七

(南魚沼郡) 〇羽前

爲始樺澤數ヶ所之執出被押落、萬方景勝御本意之由、肝要至極候、就中向館御進陣之由、無御心元候、每事堅固之備、不可如其諫言候、恐々謹言、

三月三日

新發田尾張守殿(長敦)

勝頼(武田)花押

新發田長敦

四日、戊辰旗持城將佐野清左衛門尉、上條城ヲ降ス、是日、景勝、清左衛門尉ノ功ヲ褒シ、且ツ、琵琶島城ヲ降サシメ、併セテ海路敵ノ連絡ヲ遮斷セシム、

〔西澤徳太郎氏所藏文書〕〇羽前

(刈羽郡)

旗持城ノ兵ヲ以テ上條城ヲ守ル琵琶島ヨリ舟ヲ館城ニ送ラントス

昨三日、上條へ相働、彼地以計策引付之由、目出肝要候、雖無申迄候、仕置等堅固ニ可成之事尤ニ候、就中自其地入數入置候由、雖不始儀候、稼寔無比類候、此上琵琶嶋之事、如何共入計略、可引付儀專一候、扱又、從琵琶嶋館へ舟ヲ可指越之由候間、其元無油斷可遮之段專用候謹言、

三月四日

佐野清左衛門殿(尉脱)

景勝(花押)

七日、壬子上野九兵衛尉、越後町田ノ壘ヲ陷ル、是日、景勝、コレヲ褒シ、且ツ、景虎、遽ニ御館城ヲ退散セントスルノ狀アルヲ以テ、速ニ參陣セシム、

〔歴代古案〕五

〇羽前

(中頸城郡旭村) 御書中之趣、則披露申候、今度町田之地、安々と被入御手ニ、殊ニ數多被討捕候事、誠以

旁々持無比類候由、被仰事候、内々以御直書雖可被述仰候、幸近日可有參陣候間、以御使御禮可被仰述候、如此之趣、自拙者可申述候段、御説ニ候、扱又、御館之儀、火急ニ御退散之様ニ申來候間、早々御參陣尤ニ候、恐々謹言、

專柳齋

秀仙(山崎)

三月七日

上野九郎兵衛尉(上九) 御報

山崎秀仙

河田長親、小越與六兵衛ニ、増給トシテ、境主膳亮闕所地ヲ宛行フ、

〔竹田久太郎氏所藏文書〕〇羽前

爲増給、境主膳亮分出置之候、知行不可有相違候、軍役等之儀、急度可相嗜者也、仍如件、

天正七年三月七日

六六五

天正七年三月十二日

天年七

三月七日

小越與六兵尉殿

(河田長親)
禪忠花押

六六六

河田禪忠

十二日、丁越後廣瀨城將櫻井吉晴等、景虎ノ黨ヲ下倉城ニ攻撃ス、是日、景勝、コレヲ褒ス、

〔別歴代古案〕九

根小屋

戰捷ノ後
一所ヲ賞
與スルヲ
約ス

自其元如注進者、(北魚沼郡)下倉へ相働、彌小屋之儀者申ニをよそす、(要)半(腹)ふく迄せめ入、敵數百人討捕之、悉なてき(撫切)よ成之由、自以前度々之吾分共稼、誠以無比類、次第ニ候、此末彌可相稼事、簡要ニ候、其元任存分ニ付、而者、吾分共一書(所カ)不(褒美)うひ成之へく候、猶吉事重而謹言、

(天正七)
三月十二日

景勝

佐藤平左
衛門尉
同新次郎

櫻井三助殿
佐藤平左衛門殿
同新次郎殿

○景勝、佐藤平左衛門尉ノ、廣瀨三條ノ間ニ戰功アルヲ褒スルコト、六月十日ノ

條ニ見ユ、

十七日、壬戌景勝、御館城ニ、景虎ヲ攻ム、前關東管領上杉憲政及ビ景虎ノ子道滿丸、四ツ屋ニ於テ景勝ノ兵ニ害セラレ、景虎、敗レテ鮫尾城ニ遁ル、

〔歴代古案〕五

上野九兵衛尉ヲシ
陣長慶寺
ニ備ヲ立
テシム

急度啓之候、仍、晚ニ御館さまへ可被爲押詰由候間、其元之御人數も、晚之七ツ時分より(船)ふをこし、(中頸城郡有田村)長慶寺ニ可被立備由、御意候陣屋ニハ留守居を御置、用心(合)うとく可被申付よし御諒候、各(談)さんうあつて、仕置可被申付、簡用候、恐々謹言、

(天正七)
三月十七日

專柳齋
秀仙(山崎)

山崎秀仙

上野九兵衛殿

〔淺間文書〕

○上杉家
記所收

書中差越具披見候、委細心得候、然者、爰元之儀無何事候、可心安候、一昨十七日、館落居敵悉討捕之候、(鮫尾)中頸城郡斐太村宮内、(宗親)堀江うたへ申越候條、落居程有間敷候、可心易候、(下略)全文ハ、十、九日ノ條ニ收ム、

三月十九日

景勝

天正七年三月十七日

六六七

御館落城

淺間修理亮

天正七年三月十七日

淺間修理亮殿

六六八

〔竹田久太郎氏所藏文書〕○羽前

御奉公御尋ニ付書付を以申上候事

略○上

一 三月十七日(景虎)

(景勝)

殿御比け候ニ、屋形様御押掛候時分、最前に御供仕候者ハ、五拾騎衆の内カハ、國分次右衛門、拙者兩人御座候事、○中

慶長四年三月十七日

登坂角内判(廣重)

杉原常陸殿(親憲)

御披露

〔上杉古文書〕○十一羽前

小倉民部口書○中

三月十七日

官嶺様(管領上杉憲政)

御生害之日

右御感狀寫し越申候儀ハ、不入物ニ候へ共、官嶺様御生害之年號慥ニ御座候ニ付て、爲其ニ有儘ニ寫し指越申候、

憲政景虎ニ降ヲ勸メ自身四屋塞ニ至ルノ途ニ害セラシ

宗心様御代之御事

(天正)

同七年二月三郎殿と和融之爲御扱、官領様と若君様と御館へ之付城(中頸城郡春日村)四屋之城へ被

差向之處、城中之籠衆、此御扱之儀兼而不存候歟、又如何様之儀哉、覽官領様と若君様

を奉討捕、○下文ハ、二十四條ニツバク、

〔内田家書上〕 寛永十六年十二月書上

御館御一亂之節

憲政公御和談之思召ヲ以、道滿丸御同道ニ而、春日山城江被爲入候刻、桐澤但馬守内(且繁)

田傳(之脱)丞兩人ニ御出向被仰付、其節景勝公、桐澤内田兩人之者江御密談被仰合義、急度

奉承知、御道筋四ツ谷迄爲御出向相進、御出ヲ奉待請、桐澤但馬、其節憲政公奉害、内田

傳丞押續道滿君奉害、由承傳罷有候事、

〔高野山過去帳〕 ○城取友仙本

上杉兵部大輔藤憲政 兵庫頭憲房男、天正六年三月十八日(七年ノ誤)於越後遭害、臨川寺立山

光建、

〔上杉家譜〕

藤原姓 上杉

憲政

天正七年三月十七日

六六九

景勝欺キテ憲政道滿丸ヲ殺ス

憲政和談ヲハカル

憲政法號

成怡

天正七年三月十七日

五郎 修理大夫 成怡

六七〇

御館ニ居ル

享年七十
三
系圖

憲寬ニ代リ關東管領ト爲リ、山内ニ居ル、連年相州北條氏ト戰フ、天文十五年四月廿日、氏康ト武州河越ニ戰フ、利アラス、是ニ於テ上州平井城ニ居ル、永祿元年九月下旬、越後ニ至リ、管領職及ヒ上杉系圖、日旗、天國刀、行平脇差ヲ長尾景虎ニ讓ル、景虎新壘ヲ春日山麓ニ築キ之ニ居ラシム、御館ト號ス、憲政削髮シ成怡ト稱ス、天正七年三月十八日、越後頸城郡四屋ニ於テ自殺ス、年七十三、

〔上杉系圖〕

淺羽本

續群書類從所收

憲房

五郎右馬頭
永正十二年任管領

憲廣

四郎
養子、任管領、實公方源高基子

憲政

兵部少輔

天正十年三月十八日、於越州爲景勝生害、法名立山光建

龍若丸

天文二十年、於相州一宮、爲氏康被誅、

輝虎

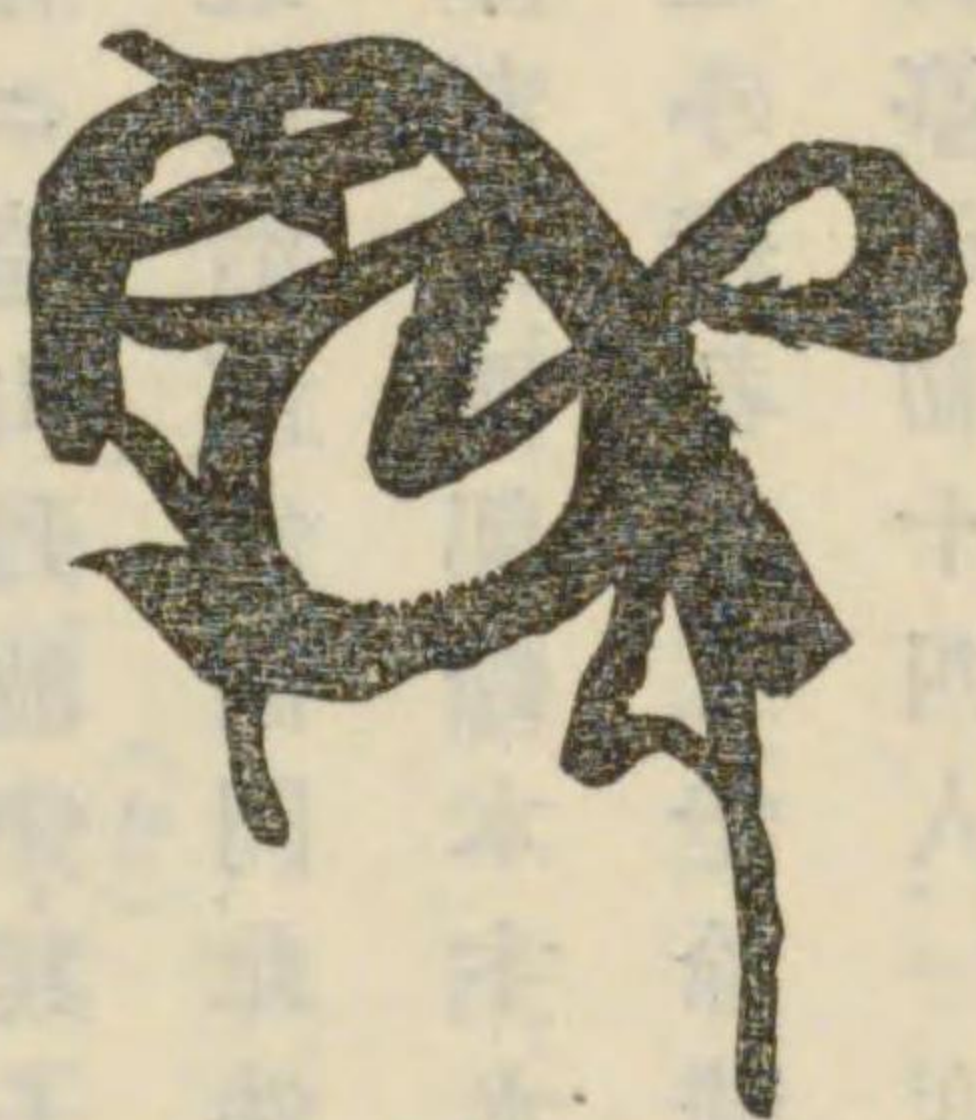
初號長尾彈正少弼、景虎、改政虎、

女子

〔參考〕

〔北越華押叢〕

上杉憲政光徹



上杉古文書(羽前)
三月十八日(天文)
二十三年

〔景勝一代略記〕

景虎關東ニ逃レントス、堅ク包圍ス

一御館逐日ヨハリ、第一兵糧ニつまりける、三郎殿思召ニハ、如何もして下郡の味方を頼、關東へ取除度と思召けれ共、米山寺城主上野九兵衛、五百餘よてあふけの橋をうとめける間、不叶也、信州口ニハ、四ツ屋と云所ニ、春日より、付城を被成被指置候間、不叶也、

一官領様より、三郎殿へ御異見ニハ、春日山へ困望、有降參より外之儀有へうらほと

被仰也、御刷も大形濟より、九歳に成賜ふ若子を證人として、官領様は御申、乗物よ

めし、謙信様より三郎殿へ御讓の御紋幕ひうきの御旗御持せ、四屋へ御出被成よと

御理ニ付、四屋へ御越候處、彼地ニ有合侍衆、御刷の子細ハ不存、又ハ御内證も御座候

哉、官領様與若君様ひし、と殺申奉る、御供の人々も皆討る、也、討もらされたる

者一人、御館へ走歸、此由申上、御刷の儀も不叶と思、よい者我先よと逃落也、三郎殿被

天正七年三月十七日

六七一

憲政ノ幹
旋ニテ景
虎降參ノ
コト調フ
憲政害セ
ラル

景虎妻ニ
勵マサル

景虎館退
去ノ模様

景虎信濃
ニ奔ラン
トス

景虎ニ隨
フ者

景虎ノ妻
自害ス

仰ハ爰^ニて攻殺されんより、四屋の付城を破り、信州へ除へきと思へ共、御臺を爰^ニ捨置事、骸の上の恥辱也と思ふふりとて、廉中へ入賜ひて仰をるハ、我^ノくのことく存つ共、爰^ニ殘し置申事口惜けきハ、此^ニまゝ爰^ニて自害し、一枕ニ成らんと宣われハ、御臺被仰ハ、何^レハぬ仰ふ、我ハ女の身ふきハ落命惜からし、御身ハいろよもして存へ、甲府へ相府を頼賜ひて、一度本意を達し賜へとの賜ひたり、御名殘ハ盡せは、おしく候得共、そや御急あれとす、め給、三郎殿聞召、女性の身さへうく宣ハ、思置事ふし、立出んとし賜ふう立うへり、去にても今別いつの世に逢へしと、袂にそり賜ふ、御臺涙ニ目もくれて、ふしまつと賜ふ、其外つ不^レめめのと迄、中門迄出賜ひ、歎賜ふ事限なし、

一三郎殿、味方の軍兵共、向仰けるハ、今四屋の付城打破、信州へ除へき也、我と思者供せよと仰けきハ、先御身付ニ、遠山丹波守^(康光)其子眞山、太右衛門、大礮小礮、小田原より加勢日庭、左馬頭、篠窪出羽、近藤治部、左衛門、此外國侍、上杉宗四郎殿、本庄新六郎、關澤^(開)、貝發、東條佐渡、其子喜三、木村孫四郎、鈴木主水、石坂左近、長谷川主水、同伊兵衛、若林甚八郎、北條刑部少、此外馬廻小侍都合二千餘騎、三手、分、四屋表へをし出也、一御館の屋形へ火をうけ給ふ、御臺を初十四人、一度ニ自害果給ふ、御供侍衆我家に

憲政ノ自
殺

藤牧原ノ
戰
高田川ノ
戰鬪

篠窪出羽
守討死ス

平野治郎
右衛門

火をうけ、妻子やき殺も有、切殺も有、

一三郎殿、三手之勢を引率し、四屋の城へ推寄、然ハ其朝官^(管領)様御自害被成ニ、不思議成事有、御生害の所より俄ニ霧立渡り、國中闇ニ成、其間、四屋の前をつき通り給ふ、去共、城中油斷せされハ、兩城より突出、敵數多討取、敵も隨一の衆ふきハ、其をハ打過る、此由春日山へ聞え、諸勢一騎うけニ出、藤牧原^(卷)まで追詰、敵もさす、覺衆ふきハ、返合^ノ戰、其より五六里^(町)行過、高田川迄討つ、くる、彼川小河ふき共、岸高し、殊更、春の半、雪ニ水増て橋ハなし、馬共乘入^ノ泳せ、れ共、向のさし高故、馬をのり放、武器もぬきすて、むうへあぐるもの、纔五百計也、其外川へ追込、討れて死も有、三郎殿御馬のり放、うちよてやう^ノあり給ふ、篠窪出羽守馬よこふき、乘渡、其の窪六十二餘老武者ふき共、馬より下り、三郎殿をのせ奉、代々の御奉公是迄也、御名殘惜や、御暇申とて、被官の持たる月劔おつ取、ひさの上ニのせ、道の中よむつと居向、敵餘多つきふせ、終ニ討ける、敵も味方も感をり、

一彼川迄は五百騎餘有し、向へのり渡し、さるハ六騎也、先志のく不、上杉惣四郎殿、本庄新六郎、近藤治部、左衛門、東條佐渡守、平野次郎^(ナシ)右衛門、此平野次郎右衛門ハ、本國尾張之者、諸國牢人しける、謙信様御拘被成、手柄仕者也、十此一丈の纒、十本莖蒲と

景虎鮫尾城ニ入ル

し仕一本も損す(世脱)此川のり渡、一三郎殿兼てハ信州迄と思召處、此川よて餘多死々れハ、不叶ノ鮫ウ尾へ逃入給ふ、鮫尾城主堀江玄蕃(宗親)も、春日山へ内々御困望申處、漸相調へ候へ共、三郎殿城へ入申也、

○下文ハ、二十四日ノ條ニツマク、

〔越後古實聞書〕

堀江玄蕃 鯨波上條 降參ス

御館散々の御様子なまハ、下郎共落行、差立者共を御城へ降參の分別ふり、鮫ヶ尾の城代堀江玄蕃ハ、安田惣八郎(顯元)大國石見方へ忍ノ、内通して、降參の佗致候得ハ、兩人才覺申上て、御捨免被遊メ付、御館を引在所へ歸り、則御城へ證人を上る、是を見て御館メ指連侍共、皆段々降參ふり、鯨波の者上條の者皆降參の御佗申、御免被成候得共、琵琶嶋の者計り降參の氣色なけまハ、佐野蓼沼さぬノの計策それとも調へて、三月二日の夜中メ、米船七艘御館へ入を見て、旗持の伏とも、海賊舟を出し、米舟を取卷き、舟合をして敵舟メ乗移り、上乘の者討取、かこの者擲取、米舟うそい取注進さる、御館の上下是を聞、彌力落しけるハ不便也、ひゞ嶋よて是を聞、何の頼まふけれハ降參の御佗仕る、御館よて十方暮て御自害メ究りけるを、管領憲政公より和談の御使立けり、御聞入不被成、引分諸所よて害し可申と相極候處、御和談の御返事さまハ、上下男女悦ひ限りふし三月十八日(七)四ツ屋の城よて御證

琵琶嶋ノ米舟ヲ奪フ

景虎ノ子ヲ殺ス

憲政ヲ弑ス

憲政ノ屍體ヲ曝ス

景虎ノ夫人自害ス

人の請取渡と定り、琵琶嶋の城代桐山(澤)但馬守被仰付、討手に定被置也、是をハ御館メ夢よも御存なく、當年九歳メ成玉ふ若君出立也、御門祝ひして乗物めさせ、御供の衆迄御身付メけ、御幕むらさきの御小旗迄爲持、管領様も御乗物よて若君御同心メ、四ツ屋表へ御出也、桐山但馬守請取申よりそやく害し奉る、御供之衆討取の者共、爰かしこへ追ちらし、手向ふ者ハ討取る有さぬ、中ノ鬼の如く也、憲政公長袖さまハゆるせと仰らまけれとも、上意ふれハ不叶、桐山内田貳人の手メ懸申、御歳七拾六よて失せ玉ふ、此時不思議有りたる、越後七郡俄くら闇入て、壹間先キ見へす、三日過朧月のことく也、五日内如此有之、憲政公御死骸者四ツ屋メさらしけるの痛しさよ、御館よてくらをみぬしさに思ひ、人御出し問ハせけるに、右之段々御聞、十方暮て、三郎殿御座有所メ、下々男女取る物もとあへせ、落行者夥敷し、此上御自害と思召定けり、然る處、小田原御加勢の内、篠窪出羽守謹而申上ルハ、定而討手來ルべし、是よて賤しき者の手メ御かゝり給ふより、此闇さメ紛き、四ツ屋の前を押破り、先除て御覽有べしと進めける、老武者の云々れハ、皆此儀同しける、三郎殿初めとして、何茂武具を堅めける、夫より出羽守(籬)中へ入、只今御除き候と云へハ、御前聞召、嬉しや扱え思ひ置事なしとて、御守刀くゞへふし給ふ、上臈達不殘自害なり、侍共の妻子、皆々一枕メ

景虎御館
城ヲ脱出
ス

天正七年三月十七日

六七六

高田川

ふしよける、哀ふりける次第也、扱御供よて、上杉惣四郎殿、本庄新六郎、東條佐渡守、同名喜三、木村彌四郎、鈴木主水、石坂左近、長谷川主水、向八兵衛、若林甚八郎、平野次右衛門、近藤治部、左衛門、岩井和泉守、弟式部、少遠山、真山、小磯兼一、神田右衛門、日庭左馬頭、篠窪出羽守を始め、旗本を副て百騎よハ過せ、上下三千餘りあるへきよ、皆落行、雑兵千貳三百程よて、御館御殿へハ八方より火懸て、四ッ屋の前を押して通り給ふ、知り合兩城より出けきとも、くら闇の時節よて、人數の多少知せ、先勢のび行も見へぞ、むと追いに追て、藤卷原の邊よて跡よ下りける者少々討留ける内よ、三郎殿、高田川に著給ひ、此川小川と申せとも、岸高く、橋ハ引ふり、殊よ雪まろ水出、越場見へぞ、三郎殿馬乗入り給ふよ、馬あぐるべき様ふく、上下およがせらる、然る所、篠窪出羽越場渡り、向岸に乗り上り、上下見せハ三郎殿見懸、急き立寄、篠窪か馬副鎗の柄下けて、鎧の石付よ取付、三郎殿あうり、馬放せられハ、篠窪う馬よ乗せ奉る、某是よて敵防申さむとて、六十二餘る篠窪壹人留り、急き給へとて、追手ハ大勢篠窪壹人よ切立られ、是よて時刻移しけり、老武者ふきハ次第よ勞きて不叶、終よ篠窪も討せける、三郎殿今泉ニ著給ふ、此城ハ番轉持^(手)よて、安田惣八郎、桃井宮内兩人よて勤めけり、敵味方かとあやふみ、門を立、用心する所に、追手の人數追付、三郎殿落行給ふ、討留よと聲々よ云ふて、偕

篠窪出羽
守討死ス
今泉ノ寨

鮫ヶ尾城
ニ入ル

平野治右
衛門ノ奮
闘

上杉憲景
討死ス
三寺ノ僧
和談ノ扱

と云追出る、あら手ふれハ間、近く追うけられ、平野次右衛門と名乗り、二度迄返しふせき参る、今泉より鮫ヶ尾迄七里追ハせ、人馬草臥、近頃御城方へ心變り参る、堀江玄蕃か城へ入て被頼ける、堀江玄蕃も哀よ思ひ、城へ入、運の極め、無是非、逆、無他、事守護しける、扱、三郎殿人數改メ見れハ、馬上よて六騎也、上杉惣四郎殿、本庄新六郎、東條佐渡守、近藤治部、左衛門、平野治右衛門と六騎殘候也、百騎計りの者、藤卷原よて討せ、高田川よても死、今泉鮫ヶ尾迄追討よ討せ、落散り、雑兵千貳三百、只五百計りニ成よける、平野次右衛門と云者ハ、本國尾張の者、弓矢修行の者也、武邊の隠れふけれハ、謙信公被抱被差置、其ことく今泉より鮫ヶ尾迄大勢よ向つて二度迄返せ、其日も一丈の幌かけて、九尺計りの金の菖蒲十本出しの立物にて、元カ馬ハ隠ふき、乗手也、人勝れてかく有も斷り也、○下文ハ、二十四條ニツマク、

〔北越軍記〕

六上

天正七年略

○中

上杉十郎憲景モ、三月朔日ノセリ合ニ被討シカハ、

モハヤ憲政モ、三郎モ、御館ニ怵カタク見へ候、三月中旬ヨリ、林泉寺、淨安寺、寶幢寺、三僧ノ扱ニテ、景勝ト三郎ト和談ノ扱有、景勝モ憲政モ管領ニテ主君ナリ、三郎ハ妹婿ナリ、流石ニ黙止カタク被思候所ニ、三月十八日^(七)ニ、上杉憲政入道立山ハ、黒衣ニテ、三郎子息道丸九歳ニ成候ト、三郎内方ト二人ヲ召連ツ、四ッ屋ノ附城へ御出有へ

天正七年三月十七日

六七七

道萬丸ト
内室ヲ質
トス

シトテ先立テ使者ヲ被差越一旦家督相論ハ有ヘキ事ナレト兄弟骨肉ノ合戦甚以テ家ノ衰微國ノ滅亡ナリ信長(織田)此弊ニ乗テ大軍ヲ引立北嚮セハ越後ハ上杉ノ物ニ不可有唯理非ヲヤメテ和睦尤ナリ我ハ謙信養父此兒ハ景勝ノ甥此女ハ景勝妹ナリ人質ニ出候間彌和談シテ助テ給リ候ヘト景勝へ申遣シ三郎内方ト子息道万丸ヲ伴テ憲政直ニ附城四屋へ御指向候所ニ景勝方先手衆ハ御扱ノ段不存ユヘ推懸管領上杉憲政ヲ奉討果候景勝方霧澤左京進ト申者憲政ヲ奉討候憲政ハ行年五十(七)六歳ナリ法名瑞岩院立山光建ト號ス

〔上杉年譜〕二十

三十一

天正七年三月十七日御館ニハ日々夜々ニ兵士落失ケレハ將士

等モ多ハ味方ニ降參ス御館ハ次第ニ微力ニ及ヒ其上第一ノ味方琵琶嶋モ軍門ニ降リシカハ兵糧ノ助力モナク相殘ル從臣モ飢渴ニ及ハカリナリ故ニ敵兵相議シ三郎景虎ノ夫人幼稚ノ嫡男并ニ古管領憲政ヲ御館ニ殘シ置今朝未明ニ景虎ヲ始トシ相從フ者ニハ本庄新六郎東條佐渡守同喜三石坂左近岩井和泉守弟式部近藤治部左衛門平野次右衛門篠窪出羽守等雜兵二三百人ニテ御館ヲ出奔ス此ヨリ先鮫尾城主堀江駿(宗親)河守ハ味方ニ内通シ御館ヲ立退トハ知スシテ景虎ヲ先トシテ鮫尾へ急キケル味方ニハ景虎落ルト聞ヨリモ追討ニ打ホトニ景虎ヲ落シ延サン爲

平野次右
衛門篠窪
出羽守討
死ス
景虎堀江
宗親ニ倚
ル

ニ小田原城主北條氏政ヨリノ援兵平野次右衛門篠窪出羽守二人蹈留リ防戦シ二人トモニ戦死ス此隙ニ景虎ハ鮫尾ニ馳著テ堀江ヲ頼マレケル堀江モ流石ニ峻拒シカタケレハ味方ニ屬スト雖トモ止ム事ヲ得スシテ城門ヲ開キ入ケル此時城内ニ入者僅十四五騎ニハ過サリキ或ハ半途ニテ討死シ又ハ落失スル者モ多カリケル既ニ日モ暮景ニ及ヒケレハ味方ノ軍士鮫尾城ヲ二重三重ニ取卷テ城ヲハ明日攻ムヘシトテ公モ城下ヲ去テ御陣ヲ屯ス同月十八日未明ヨリ御下知有テ鮫尾城下ヲ燒拂ハレ素城ハカリニナシテ相守ル其後安田(顯元)八郎ニ仰付ラレ城中堀江カ方へ内通ス其底蘊ハ知モノナシ

〔北條五代記〕七

三

上杉三郎景虎滅亡の事

略○上越後鉾楯の義小田原へ聞え急ぎ人數をさしけりハを所ハ先陣ハ上州沼田ヨ付(北條)氏政ハ武州河越まで著馬遅參ゆへ三郎ハ勝頼(景勝ノ誤)のため誅せらるよし途中ヨリ益ふく引返そと語をなればウとへふる人聞て景虎の滅亡ハ輝虎ヲ多てのそりりと遺言よよりて也其亂觴を尋るよ輝虎實子ふたゆへ甥の景勝を養子と思ひささめりされともされ明日み死をふらハ氏政ハ信玄聲一味ふり越後へそとらくよ至てハ景勝ハ幼稚をとしてひと乃國とふるへし志ろしとハ氏康の子三郎を養

景虎ノ滅
亡ハ謙信
ノ遺策ナ
リトノ説

宗親ニ内
通ス